

長谷小路周辺遺跡 (No.236)

由比ガ浜三丁目 194 番 71 地点

例 言

1. 本報は、鎌倉市由比ガ浜三丁目 194 番 71 地点に所在する遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は平成 25 (2013) 年 11 月 1 日から平成 26 (2014) 年 3 月 7 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約 140m²である。
3. 発掘調査体制は以下のとおりである。
担 当 者：伊丹まどか
調 査 員：押木弘己・須佐仁和・田畑衣理・渡辺美佐子
調査補助員：松吉里永子
作 業 員：牛嶋道夫・赤坂進・吉澤巧・江津兵太・南齋敬資・久島忠敬・星栄人
(公益社団法人鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報作成は以下の分担で行った。
遺構図版作成 押木弘己・松吉里永子
遺物実測 岡田慶子・松吉里永子・森谷十美
遺物図版作成 押木弘己・松吉里永子・森谷十美
観察表 押木弘己・松吉里永子・森谷十美
遺構写真 伊丹まどか・押木弘己・須佐仁和・松吉里永子
遺物写真 須佐仁和・松吉里永子
写真図版作成 押木弘己・松吉里永子
5. 本報の執筆は、第一章第 1 節の図表の作成を後藤健が、第三章第 3 節を押木が、その他は松吉が行った。
6. 本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は「HKS1305」とし、出土品への注記その他に使用した。
7. 本報の凡例は以下の通りである。
挿図縮尺 各図に縮尺を表記している。 遺構図版 水糸高は標高値を示す。
遺物図版 釉薬の範囲は・-・-・、加工痕・使用痕は●←→●で示した。また、遺物の煤痕は黒く塗りつぶして、表現をしている。
8. 本報記載の「土丹」は凝灰質泥岩を示す。
9. 整理段階において、遺物の分類及び編年は以下の論文を参考にした。
瀬戸産陶器：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
常滑産陶器：愛知県史編さん委員会編 2012『愛知県史別編窯業 3 中世・近世常滑系』愛知県
須恵器：田尾誠敏 2003「土器の変遷とその背景」『平塚市史』11 下別編考古 (2) 平塚市
古代の入間を考える会 2013『古代入間の土器と遺跡 (II) —須恵器坏の編年 (9・10 世紀) —』
10. 発掘調査及び報告書作成に関しては下記の方々よりご教授、ご協力を賜りました。記して深く感謝いたします。(敬称略・五十音順)
赤堀祐子・石元道子・太田美智子・沖元道・小野夏菜・河野真知郎・古田土俊一・佐藤千鶴子・佐藤ななみ・汐見一夫・高橋慎一朗・滝澤晶子・梅岡溪音・原廣志・松吉大樹・馬淵和雄・吉田和枝・吉田桂子・山口正紀・山口裕子・山口優子

目 次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	159
第1節 遺跡の位置と歴史的環境	
第2節 周辺遺跡の調査成果	
第二章 調査の概要	167
第1節 調査経過と方法	
第2節 堆積土層と面の概要	
第三章 検出遺構と出土遺物	170
第1節 1面検出遺構と出土遺物	
第2節 1面面上出土遺物と1面構成土出土遺物	
第3節 古代検出遺構と出土遺物	
第4節 II区トレンチ上層出土遺物	
第5節 表土出土遺物	
第6節 中世面・古代面より出土した具について	
第四章 まとめ	191

挿図目次

図1 調査地の位置	160	図14 竪穴住居（竪穴1・竪穴2）カマド内 遺物出土状況	183
図2 調査区設定図	167	図15 竪穴住居（竪穴1・竪穴2）出土遺物（1）	184
図3 調査区北壁・東壁 堆積土層図	169	図16 竪穴住居（竪穴1・竪穴2）出土遺物（2）	185
図4 全体図（中世）	170	図17 竪穴住居（竪穴1・竪穴2）出土遺物（3）	186
図5 1面遺構と遺物（1）	172	図18 II区トレンチ上層出土遺物	187
図6 1面遺構と遺物（2）	173	図19 表土出土遺物（1）	188
図7 1面遺構と遺物（3）	175	図20 表土出土遺物（2）	189
図8 1面遺構と遺物（4）	176	図21 表土出土遺物（3）	190
図9 1面遺構と遺物（5）	178		
図10 1面面上・1面構成土出土遺物	179		
図11 全体図（古代）	180		
図12 竪穴住居（竪穴1・竪穴2）	181		
図13 竪穴住居（竪穴1・竪穴2）カマド	182		

表 目 次

表 1 遺構計測表……………	178	表 5 遺物観察表 (Ⅱ区トレンチ上層) ……	197
表 2 遺物観察表 (中世) ……	193	表 6 遺物観察表 (表土) ……	198
表 3 遺物観察表 (1面面上・1面構成土) ……	195	表 7 貝の分類表……………	202
表 4 遺物観察表 (古代竪穴2出土) ……	196	表 8 遺物集計表……………	203

図 版 目 次

図版 1……………	205	図版 4……………	208
1-1 調査地遠景		4-1 竪穴住居跡カマド使用面② (北西から)	
1-2 表土掘削状況		4-2 竪穴住居跡カマド使用面② (北西・低位から)	
1-3 I区1面全景 (北から)		4-3 竪穴住居跡掘方 (北西から)	
1-4 I区深掘りトレンチ全景 (東から)		4-4 柱穴内遺物出土状況	
図版 2……………	206	4-5 カマド堀方 (北西・低位から)	
2-1 Ⅱ区古代面全景 (北から)		図版 5 出土遺物 (中世・古代の貝) ……	209
2-2 Ⅱ区古代面竪穴住居跡 (北西から)		図版 6 出土遺物 1 (古代) ……	210
図版 3……………	207	図版 7 出土遺物 2 (古代) ……	211
3-1 竪穴住居跡カマド検出状況 (北西から)		図版 8 出土遺物 (表土) ……	212
3-2 竪穴住居跡カマド使用面 (北西・低位から)			
3-3 竪穴住居跡カマド使用面 (北西から)			
3-4 カマド支脚上遺物出土状況			
3-5 カマド左袖内遺物出土状況			

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は、江ノ島電鉄由比ヶ浜駅手前の小道より住宅街に入った、鎌倉市由比ガ浜三丁目194番71地点に所在する(図1:★1)。本調査地は、県遺跡台帳No.236「長谷小路周辺遺跡」の範囲に含まれる。

遺跡名にある「長谷小路」とは、現在の県道鎌倉葉山線(県道311号)(図1参照)、とくに長谷寺から六地藏までの道「由比ガ浜大通り」のことを指す(『鎌倉事典』,p.242)。1685年に刊行された『新編鎌倉志』は「今小路は、寿福寺の前に石橋あり。勝橋と云。鎌倉十橋の一なり。此より南を今小路と云。巽荒神の邊より南、長谷までの間は、長谷小路と云なり。」(『新編相模国風土記稿』第6巻,p.96)としている。1829年に編纂された『鎌倉攬勝考』も「巽荒神の邊より、南は長谷村迄の所をいふ。是も古名にあらず。」(『新編相模国風土記稿』第6巻,p.191)と現在の今小路辺が想定される記述も見える。しかし、1841年に編纂された『新編相模国風土記稿』には「下馬橋より、西方長谷村に達するの路次たるが故此唱あり、【東鑑】に武蔵大路と見えしは、即此舊名なりとぞ、」(『新編相模国風土記稿』第4巻,p.280)とあり、小路の範囲が曖昧になっていた様子が伺える。

小路名の由来について『鎌倉市史 総説編』は「(前略)長谷という地名は勿論長谷寺ができてからでなければならない。しかもそれは長谷寺がその存在を人々の間に明確にしてからであるというべきである。(後略)」(『鎌倉市史 総説編』,p.294)とし、『鎌倉事典』もまた「(前略)長谷の地名は長谷寺が創建された鎌倉中期以後であるから(鐘銘に文永元年[一二六四]新長谷寺とあるので、寺はそのころには建立されていた)、小路名も長谷の地名が人々の間に明確になってからであろう。(後略)」と推察する(『鎌倉事典』,p.242)。

なお、「長谷」という地名は『新編相模国風土記稿』には「江戸より行程十三里、小坂郷に屬す、觀音堂起立ありしより寺號によりて村名となすとなり、(後略)」(『新編相模国風土記稿』第5巻,p.36)という記述がみられる。また1870年に編纂された『神奈川県皇国地誌 相模国鎌倉郡村誌』では「(前略)往昔(年歴不詳)大和国長谷觀音ノ像洪水二流サレ当国三浦郡長井浦へ漂着セシヲ此地二移シ新長谷寺ヲ建立セシヨリ自ラ長谷ヲ以テ地名トナスト云フ」(『神奈川県皇国地誌 相模国鎌倉郡村誌』,p.617)とあることから、長谷という地名は現在長谷3丁目に存在する長谷寺が由来であることがわかる。

地名成立の前提となる長谷寺の建立は、寺伝では奈良時代とされているものの、他の資料からは中世以前の寺の様子について知ることができない。『鎌倉市史 総説編』では「(前略)同寺の銅鐘の銘に新長谷寺の文字があり、それに文永元年七月十五日の年月が刻まれており、同寺所蔵の嘉暦元年十月九日の銘のある懸仏に、新長谷觀世音菩薩の文字があることなどによって、同寺は大體鎌倉時代の中期にはできていたように思われる。(後略)」(『鎌倉市史 総説編』,p.294)と推察されており、各種資料から確実に長谷寺の存在が証明できるようになるのは13世紀後半からになるだろう。

また、長谷村の範囲について『神奈川県皇国地誌 相模国鎌倉郡村誌』は「此地鎌倉ノ盛時二於テハ其府内ニアリテ今ノ如ク村界ノ區別無クシテ徳川氏政治ノ初旧鎌倉府ノ小部分ナル甘繩ト深沢ノ里(一二深沢郷二作ル)ノ里ノ内トヲ合セテ今ノ長谷村トハナシタリ(後略)」(『神奈川県皇国地誌 相模国鎌倉郡村誌』,p.617)とあり、江戸時代には、甘繩・深沢の一部を範囲としていたとわかる。『神奈川の地名』によれば「現在の長谷1-5丁目・由比ガ浜3-4丁目・坂ノ下」(『神奈川の地名』,p.278)が該当するとされており、それに従えば今回の調査地点も、江戸時代においては長谷村の範囲内であつ

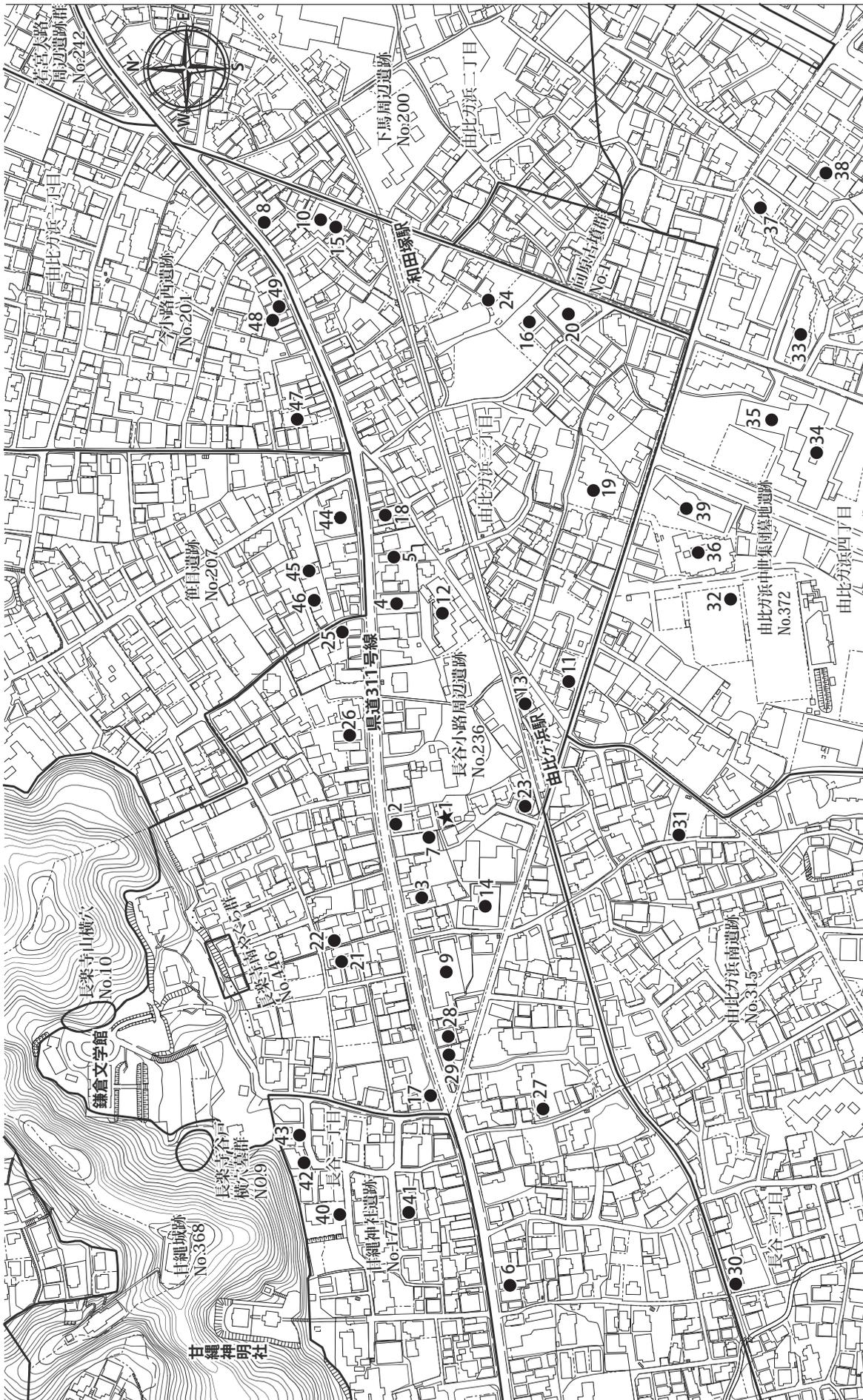


図1 調査地の位置

たと考えられる。

さて、長谷小路周辺の地形の発達について、上本進二氏は縄文時代中～後期の急速な海退により「縄文時代前期に形成された砂州は砂丘となり、海側には新しい砂堤（海岸線に平行に形成される砂の堆積地形）が形成されるようになる」（上本 2004,p.9）とし、弥生時代中期～古墳時代前期に「海岸線が後退して飛砂が減少した長谷小路一帯には集落が形成され、砂丘の高まりは削平されて風下側の湿地は埋まった」としている（上本 2004,p.10）。上本氏は、これを「砂丘後背地」と呼んでいる。古墳時代後期～奈良・平安時代にかけて「砂丘後背地」は「御成町・由比ヶ浜 1～3 丁目まで広がり」、中世に「低湿地や砂丘間低地は埋め立てられて縮小し、少なくとも 4 列あった由比ヶ浜砂丘列は一体化した」と推察した。また、鎌倉時代後期には方形竪穴建物が建ち並ぶことから、この時期には「砂丘も移動を止めて固定されていたと考えるべきであろう」と想定している（上本 2004,p.10）。

砂丘については「飛砂によって旧湿地が覆われた結果、現況地形に近い土地が形成され、13 世紀末～14 世紀初頭になると方形竪穴建築址を中心に遺構群が営まれることになる」（斉木 1992,p.156）など諸説ある。

遺跡の地点と詳細は後で示すが、長谷小路周辺の発掘調査では、現代の堆積土下層に中世遺物包含層があり、その次の土層直上より中世の遺構や遺物が検出される。その下層には「白黄色砂層」（斉木 1989）（註 1）という中世基盤層（風成砂層）が堆積し、更に下層の「後背湿地」（註 2）と考えられる「黒褐色弱粘質土」（註 3）層内から 8～10 世紀代の竪穴住居等が確認されている。

長谷小路周辺遺跡を中心に発掘調査が行われた地点を図 1 に示した。1992 年までの発掘調査成果より、中世基盤層のレベルを抜き出し比較した齋木秀雄氏は「長谷小路周辺では、白黄色砂層が 9～10m の高いレベルで確認され（長谷小路南遺跡（地点 6）など）、この地域と若宮大路・一ノ鳥居を結ぶ線上に、鎌倉時代初期の自然砂丘の頂部があった」としている（斉木 1989,p.54）。砂丘の高まりについて調査成果から、地点 21 から地点 3 へ向けて砂丘が高まり、地点 3 から地点 11・地点 23 周辺に向けてなだらかに落ち、地点 31・32 あたりから再び高まっていく状況が分かってきている（註 4）。一方で、地点 49 は、地点 4 と地点 12 よりも浅いレベルから古代遺物が出土していることから、宗臺秀明氏は『『県道 311 号線』もしくは『長谷小路』より北側では『後背湿地』が最も深く、乾陸化も遅れたため飛砂の堆積もここまでおよばなかった』と推考している（宗臺 1993,p.13）。また、地点 42・43 からは長谷小路周辺遺跡・由比ヶ浜南遺跡・由比ヶ浜中世集団墓地遺跡で中世基盤層と想定される「白黄色砂層」は検出されていない（馬淵 2007; 福田 2013）。

近年、長谷小路周辺の発掘調査は増加傾向にあり、調査成果も集積されつつある。本遺跡の近隣からは、古墳時代後期から平安時代前半期（7～10 世紀）の遺構、中世は 13 世紀後半から 14 世紀代を中心とした遺構・遺物が検出することが分かってきている。ただし、古代と中世の間（11～12 世紀）の遺構・遺物は管見の限り確認できず、古代と中世の継続性は見ることができない。

古代の遺構・遺物については、地点 9・12・13・15・33（註 5）などから古代（古墳時代後期～平安時代前半（7～10 世紀）の竪穴住居跡が見つかった。地点 11 では、遺構は検出されなかったが「類製塩土器」が出土しており、製塩を行っていた可能性が指摘されている（馬淵他 1994）。地点 14 からは「合体葬墓」1 基（宮田他 1997）、地点 16 からは「仰臥伸展葬の埋葬骨 1 体」と「火葬骨及び火葬址」が検出されている（宮田 2000）。地点 33 では「特殊遺構」や「祭祀遺構」も検出されている。地点 33 では、釣り針や土錘などの漁撈具と共に、穂摘み具や鋤先といった農具も出土していることから、半農半漁で生計を立てていたのではないかと推察されている（大河内 1996）。

中世の遺構・遺物については、地点4では、鞆の羽口や坩堝と考えられる土製品などが出土していることから「手工業者集団に関わる生活址」が想定されている(斉木1990)。地点6からは「炉状遺構」と大量の鞆の羽口、スラグなどが発見されたことから「職人集団の生活域」あるいは「工房区域」の可能性が指摘されている(斉木他1989、斉木他1990)。地点9からは「鑄造関係のスラグ、鞆の羽口、骨製品の完成品・未完品等が多く」出土しており、中でも「骨製品の「栗形」の未完成・加工途上で生じるチップ他が多く」これらの製作活動が行われていたと推察されている(斉木1992)。地点10からは、アンペラ様の編み籠に入れて捨てられたかわらけや魚骨・鯨類頭骨が一括出土した他、硯の製作・修理、動物の解体から革なめし、骨製品用材切り出しなど、工芸に関係する遺構や遺物が多く出土している。地点15からは、出土遺物の様相から「硯や獣骨製栗型の製作といった工芸職人居住地」と想定されている(宗臺1998)。地点12からは、周辺の発掘調査の成果との比較や「鏡の鑄型や鞆の羽口」といった遺物が出土したことから「鑄造作業」が行われていたことが推測されている(宗臺他1995)。地点16からは、鑄造関係品、骨の未加工品などが出土していることから職人集団の居所または工房の可能性が指摘されている(宮田2000)。地点20の溝47からは鑄造関連遺物が、まとまって出土していることから鑄造関連が盛んであったのではないかと想定されている(宗臺2002)。地点49からは、模鑄銭と模鑄銭鑄型と共に仏具の一部と思われる鍍金の施された銅片が出土していることから、「銅細工・鑄物師などを生業とした職能民」が活動していたのではないかと考えられている(宗臺1993)。

以上に記したこれまでの調査成果からわかる本調査地周辺の変遷は、次のように想定できる。海退による砂丘地帯の地形の変化により、古代から人が住み始めるようになり、当初は集落と墓が共存する地帯であったものの、古代末にあたる11～12世紀の一時期、本遺跡地周辺はあまり積極的な使用がなされなくなる。しかし、砂丘の移動が止まり、地形が固定化された13世紀後半には再び当該地に人が集まり始め、工房・居住・倉庫など様々な用途が推察される方形竪穴建物群が立地し、13～14世紀代の長谷小路周辺には、骨製品の製造や鑄造関係、漁撈などを生業とした職能民あるいは職能集団の工房が存在し職能民が活発に活動する場所となっていた様子が窺える。

[註]

- 註1：「白黄褐色砂層」(斉木1992)、「黄灰色砂層」(汐見2004)など砂層の色調表現については執筆者により異なる。
- 註2：地点4の調査時に松島義章氏が、長谷小路周辺に堆積している「黒褐色弱粘質砂層」の成立について、「海岩砂丘背後の湿地様の状況が大きく影響している」と指摘し、これ以降「黒褐色弱粘質砂層」と「後背湿地」との関連が指摘されるようになった(斉木1992)。
- 註3：齋木秀雄氏は、1989年に発行された「由比が浜三丁目194番25地点」の発掘調査報告書中、中世基盤層下に堆積する黒褐色の砂層を「黒褐色(ややチョコレート色に近い)」と表現した。以降、鎌倉では、この土層の色調について「チョコレート色」や「チョコ」といった表現がされている。
- 註4：2002年に汐見一夫氏が、「白黄色砂層」(中世基盤層)の標高に着目し、その高低差について「長谷小路周辺遺跡地形概念図」として報告を行った。
- 註5：調査地点については図1を、調査地点の発掘調査報告書については、「第2節 周辺遺跡の調査成果」をご参照いただきたい。

[引用・参考文献]

- 鎌倉市教育委員会 1957『かまくら子ども風土記』上巻 鎌倉市教育委員会
鎌倉市教育委員会 1971『としよりのはなし鎌倉市文化財資料』第7集 鎌倉市教育委員会
相武史料刊行會 1930『新編 相模風土記』相武史料刊行會
神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会 1991『神奈川県皇国地誌 相模国鎌倉郡村誌』神奈川県図書館協会

- 蘆田伊人編 1970『大日本地誌大系（23） 新編相模国風土記稿』第4巻 雄山閣
- 蘆田伊人編 1970『大日本地誌大系（23） 新編相模国風土記稿』第5巻 雄山閣
- 蘆田伊人編 1970「新編鎌倉志」『大日本地誌大系（23） 新編相模国風土記稿』第6巻 雄山閣
- 蘆田伊人編 1970「新編攬勝考」『大日本地誌大系（23） 新編相模国風土記稿』第6巻 雄山閣
- 上本進二 2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子棧敷戸遺跡』東国考古学研究所調査研究報告第26集
東国歴史考古学研究所
- 白井永二編 1976『鎌倉事典』東京堂出版
- 松尾宣方 1989「中世の海岸線と浜」『よみがえる中世3』平凡社
- 斎木秀雄 1989「鎌倉の地形を復元する」『よみがえる中世3』平凡社
- 斉木他 1992『神奈川県・鎌倉市 長谷小路南遺跡—鎌倉市由比ヶ浜3丁目202番2外所在遺跡の発掘調査報告書—』
長谷小路南遺跡発掘調査団
- 汐見他 2002『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18—平成13年度発掘調査報告—第2分冊』鎌倉市教育委員会
- 汐見他 2004『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20—平成15年度発掘調査報告—第2分冊』鎌倉市教育委員会
- 宗臺秀明 1993『今小路西遺跡 由比が浜一丁目213番3地点』今小路西遺跡発掘調査団
- 宗臺秀明 1994『長谷小路周辺遺跡由比が浜三丁目228・229番外（No.236）—中世前期の地割を伴う工芸職人居住地の調査—』長谷小路周辺遺跡発掘調査団
- 宗臺秀明 1995『長谷小路周辺遺跡由比が浜三丁目258番1地点（No.236）—中世都市外縁部市街地における町割りの調査—』長谷小路周辺遺跡発掘調査団
- 宗臺秀明 2014「出土遺物からみた海浜地域の職能民」『考古学から見る公開セミナー 中世都市鎌倉の海浜地域』公益財団法人かながわ考古学財団
- 鈴木弘太 2013『ものが語る歴史29 中世都市鎌倉の海浜地域と竪穴建物』同成社
- 高柳光寿 1959『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館
- 高柳光寿 1959『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館
- 福田他 2013『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書29—平成24年度発掘調査報告—（第1分冊）』鎌倉市教育委員会
- 松葉崇 2014「中世鎌倉の葬送—海浜地域を中心として—」『考古学から見る公開セミナー 中世都市鎌倉の海浜地域』公益財団法人かながわ考古学財団
- 馬淵他 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23—平成18年度発掘調査報告—（第1分冊）』鎌倉市教育委員会
- 萬年一剛 2014「掘削によってあきらかになった鎌倉・逗子の平野発達史」『神奈川県温泉地学研究所 平成26年度研究成果発表会講演要旨集』神奈川県安全防災局
- 森孝子 1997『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書—由比ヶ浜3丁目2番200地点（No.236）』長谷小路周辺遺跡発掘調査団
- 山口正紀 2014「鎌倉（海浜地域）の概要」『考古学から見る公開セミナー 中世都市鎌倉の海浜地域』公益財団法人かながわ考古学財団

第2節 周辺遺跡の調査成果（図1）

神奈川県遺跡台帳に登録されている遺跡名称と番号、調査地点一覧を図1に表した。調査地点の詳細については、以下の通りである。今回、未報告の調査地点は、図1及び調査地点一覧に示していない。

< 調査地点一覧 >

長谷小路周辺遺跡 NO.236

1. 由比が浜三丁目194番71（本調査遺跡）
2. 由比が浜三丁目194番25他（斉木他 1989『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5—昭和63年度発掘調査報告—』鎌倉市教育委員会）、由比ヶ浜三丁目194番25外（斉木他 1990『由比ヶ浜三丁目194番25外遺跡調査報告書—長谷小路周辺遺跡群内、秋山ビル建設に伴う緊急発掘調査—』長谷小路遺跡発掘調査団）
3. 由比が浜三丁目199番1（斉木他 1990『神奈川県・鎌倉市 由比ヶ浜三丁目199番1地点遺跡調

- 査報告書—長谷小路周辺遺跡群内、福地ビル建設に伴う緊急発掘調査—』由比ヶ浜三丁目 199 番 1 地点所在遺跡発掘調査団)
4. 由比ガ浜三丁目 258 番 8 (斉木他 1990『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6—平成元年度発掘調査報告—』鎌倉市教育委員会)
 5. 由比ガ浜三丁目 9 番 41 (斉木他 1990『神奈川県埋蔵文化財調査報告』32 神奈川県教育委員会)
 6. 長谷二丁目 252 番 1(菊川他 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7—平成 2 年度発掘調査報告—』鎌倉市教育委員会)
 7. 由比ガ浜三丁目 194 番 24 (宗臺他 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7—平成 2 年度発掘調査報告—』鎌倉市教育委員会)
 8. 由比ガ浜三丁目 223 番 11 (斉木他 1991『神奈川県埋蔵文化財調査報告』33 神奈川県教育委員会)
 9. 由比ガ浜三丁目 202 番 2 (斉木他 1992『神奈川県・鎌倉市 長谷小路南遺跡—鎌倉市由比ヶ浜 3 丁目 202 番 2 外所在遺跡の発掘調査報告書—』長谷小路南遺跡発掘調査団)
 10. 由比ガ浜三丁目 229 番外 (宗臺他 1993『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9—平成 4 年度発掘調査報告— (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会)
 11. 由比ガ浜三丁目 1175 番 2 (馬淵他 1994『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10—平成 5 年度発掘調査報告— (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会)
 12. 由比ガ浜三丁目 258 番 1 地点 (斉木他 1995『神奈川県鎌倉市長谷小路周辺遺跡 由比ガ浜三丁目 258 番 1 地点 (No. 236) —中世都市外縁部市街地における町割りの調査—』長谷小路周辺遺跡発掘調査団)
 13. 由比ガ浜三丁目 194 番 40 (大河内他 1997『神奈川県・鎌倉市 長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書—由比ヶ浜三丁目 194 番 40 地点—』長谷小路周辺遺跡発掘調査団)
 14. 由比ガ浜三丁目 2 番 200 (宮田他 1997『神奈川県・鎌倉市 長谷小路周辺遺跡群発掘調査報告書—由比ヶ浜 3 丁目 2 番 200 地点 (No.236) —』長谷小路周辺遺跡発掘調査団)
 15. 由比ガ浜三丁目 228 番 2 (宗臺他 1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14—平成 9 年度発掘調査報告— (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会)
 16. 由比ガ浜三丁目 1262 番 6 (宮田他 2000『神奈川県・鎌倉市 長谷小路周辺遺跡発掘調査団調査報告書—由比ガ浜三丁目 1262 番 6 外地点 (No.236) —』長谷小路周辺遺跡発掘調査団)
 17. 長谷一丁目 209 番 4 (桝淵規彰 2000『神奈川県埋蔵文化財調査報告』43 神奈川県教育委員会)
 18. 由比ガ浜三丁目 254 番 15 (原他 2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17—平成 12 年度発掘調査報告— (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会)
 19. 由比ガ浜三丁目 1173 番 (押木他 2001『鎌倉遺跡調査会調査報告 21 集 神奈川県・鎌倉市 長谷小路周辺遺跡—第 20 地点発掘調査報告—』鎌倉市長谷小路周辺遺跡発掘調査団)
 20. 由比ガ浜三丁目 1262 番 2、1251 番 1・2 (宗臺他 2002『東国歴史考古学研究所調査研究報告第 31 集 長谷小路周辺遺跡 (No.236) 由比ガ浜三丁目 1262 番 2、1251 番 1・2 地点発掘調査報告書—弥生中期～平安時代葬送地から中世方形堅穴建物群地域へ—』長谷小路周辺遺跡発掘調査団／東国歴史考古学研究所)
 21. 長谷一丁目 205 番 12 (汐見他 2002『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18—平成 13 年度発掘調査報告— (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会)
 22. 長谷一丁目 199 番 20 外 (斉木 2003『神奈川県埋蔵文化財調査報告』45 神奈川県教育委員会)

23. 由比ガ浜三丁目 194 番 50 (汐見他 2004『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20—平成 15 年度発掘調査報告— (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会)
24. 由比ガ浜三丁目 1256 番 4・5、1260 番 1・3・4・5 (宮田・滝沢他 2005『神奈川県・鎌倉市 長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書 (鎌倉市由比ガ浜三丁目 1256 番 4・5、1260 番 1・3・4・5 地点)』株式会社博通)
25. 長谷一丁目 270 番 1 外 (2006『神奈川県埋蔵文化財調査報告』51 神奈川県教育委員会)
26. 長谷一丁目 265 番 19 (伊丹他 2010『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査報告書 26—平成 21 年度発掘調査報告— (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会)
27. 長谷二丁目 171 番 4 (熊谷他 2012『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』(有) 鎌倉遺跡調査会)
28. 由比ガ浜三丁目 206 番 6 外(赤堀他 2015『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』31 鎌倉市教育委員会)
29. 由比ガ浜三丁目 207—1 外 3 筆地点 (齊木他 2015『神奈川県・鎌倉市 長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書—由比ガ浜三丁目 207—1 外 3 筆地点—』有限会社鎌倉遺跡調査会)

由比ヶ浜南遺跡 NO.315

30. 長谷二丁目 122 番 9、10 (1990『神奈川県埋蔵文化財調査報告』32)
31. 長谷二丁目 188 番 2 外 (瀬田他 1995『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11—平成 6 年度発掘調査報告— (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会)

由比ヶ浜中世集団墓地遺跡 NO.372

32. 由比ガ浜四丁目 1181 番外 (1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I—昭和 46 年度～ 52 年度—』鎌倉市教育委員会)
33. 由比ガ浜四丁目 1134 番 1 (大河内他 1996『神奈川県・鎌倉市 由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書 鎌倉市由比ヶ浜四丁目 1134 番地点における古代および中世遺跡の埋蔵文化財調査報告 (第 1 分冊・古代編)』由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団)
34. 由比ガ浜四丁目 1136 番 (大河内他 1997『神奈川県・鎌倉市 由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書—由比ガ浜四丁目 1136 番地点 (KKY 鎌倉若宮荘)—< 第一次調査 > (第 1 分冊) (第 2 分冊)』由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団)
35. 由比ガ浜四丁目 1136 番 11 (齊木他 1997『神奈川県・鎌倉市 由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書—由比ガ浜四丁目 1136 番地点 (KKY 鎌倉若宮荘)—< 第二次調査 >』由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団)
36. 由比ガ浜四丁目 1179 番 1 他 (齊木他 2001『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡—5 地点 1 次・2 次調査—』由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団・鎌倉遺跡調査会調査報告書) 36 由比ガ浜四丁目 1171 番 3 (未報告)
37. 由比ガ浜四丁目 1133 番 1 外 (2003『神奈川県埋蔵文化財調査報告』46)
38. 由比ガ浜四丁目 1107 番 32 (森他 2011『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 28—平成 23 年度発掘調査報告— (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会)
39. 由比ガ浜四丁目 6 番 9 (齊木 1994『神奈川県・鎌倉市 由比ガ浜 4—6-9 地点発掘調査報告書—大蔵省印刷局鎌倉宿泊所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団)
39. 由比ガ浜四丁目 1170 番 1 (宮田・滝澤他 2014『株式会社 博通報告書第 63 集 神奈川県 鎌倉市由比ガ浜中世集団墓地遺跡 (No.372) 発掘調査報告書 (鎌倉市由比ガ浜四丁目 1170 番 1 地点)』株

式会社博通・株式会社齊藤建設)

甘繩神社遺跡群 NO.177

40. 長谷一丁目 227 番 (1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I—昭和 46 年度～ 52 年度—』鎌倉市教育委員会)
41. 長谷一丁目 236 番 1 (1992『神奈川県埋蔵文化財調査報告』34)
42. 長谷一丁目 227 番 25 (馬淵他 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23—平成 18 年度発掘調査報告— (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会)
43. 長谷一丁目 227 番 24 (福田他 2013『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29—平成 24 年度発掘調査報告— (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会) 笹目遺跡 NO.207
44. 笹目町 287 番 1 (2005『鎌倉の埋蔵文化財 8』鎌倉市教育委員会)
45. 笹目町 285 番 1 外(伊丹他 2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17—平成 12 年度発掘調査報告— (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会)
46. 笹目町 286 番 1 外 (伊丹他 2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17—平成 12 年度発掘調査報告— (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会)

今小路西遺跡 NO.201

47. 由比ガ浜一丁目 211 番 18、19 外 (熊谷他 2013『今小路西遺跡発掘調査報告書 由比ガ浜一丁目 211 番 18,19 外』)
48. 由比ガ浜一丁目 213—12 (熊谷他 2012『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 28—平成 23 年度発掘調査報告— (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会)
49. 由比ガ浜一丁目 213 番 3(宗臺他 1993『神奈川県鎌倉市 今小路西遺跡 由比ガ浜一丁目 213 番 3 地点』今小路西遺跡発掘調査団)

第二章 調査の概要

第1節 調査経過と方法 (図2)

本発掘調査は、個人住宅の建設に伴う事前の記録保存を目的として、鎌倉市教育委員会が実施した。本調査地周辺では発掘調査が多く行われており、その調査成果によって現地表面下1m前後で中世の遺跡が検出されることがわかってきている。当調査地点からも遺跡の検出が予想されたため発掘調査の実施に至った。

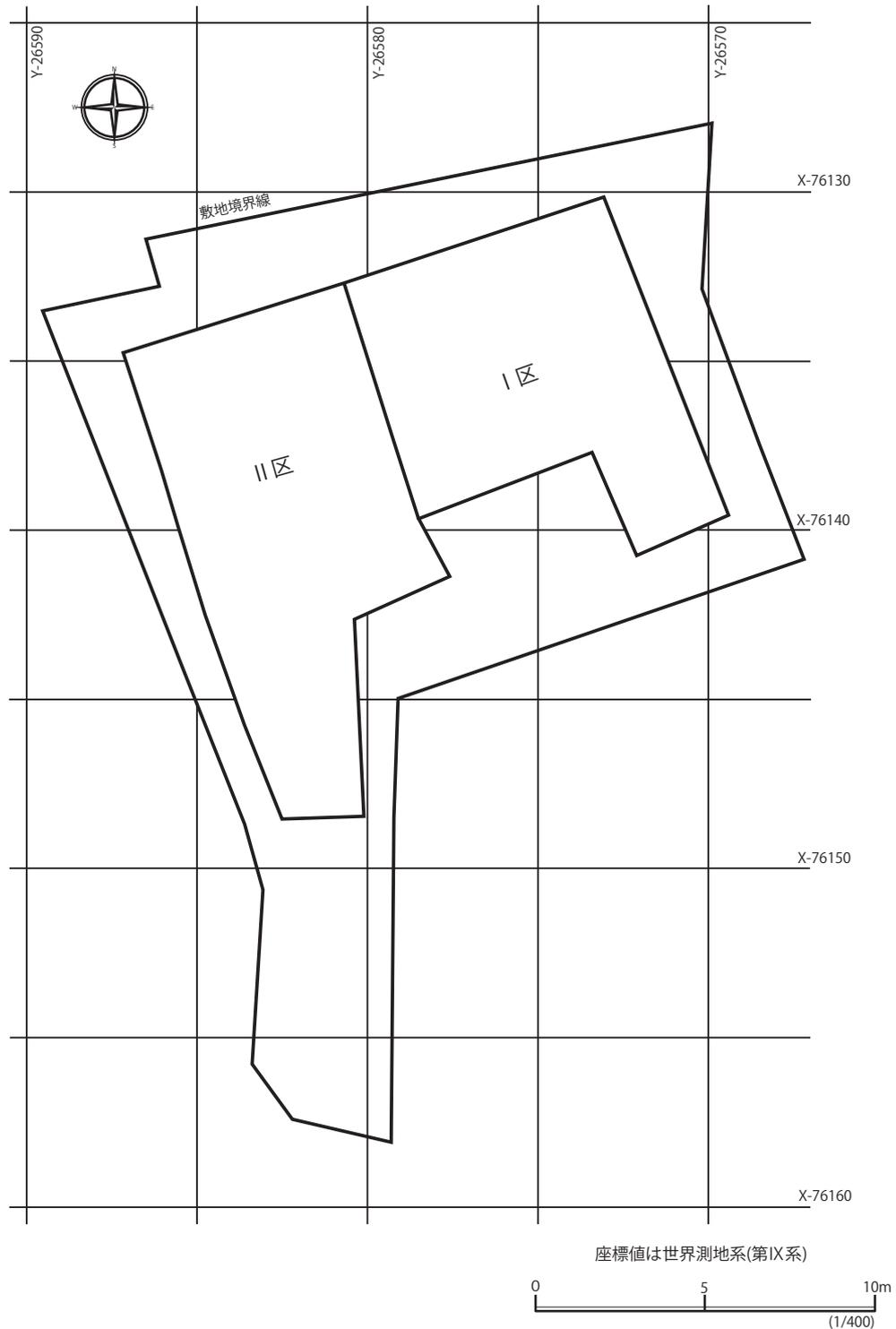


図2 調査区設定図

平成 25 年 11 月 1 日から平成 26 年 3 月 7 日までの実質 4 ヶ月にわたって発掘調査を行った。掘削に伴う残土置場を確保する必要から調査区を二分割し、先行して着手した東部をⅠ区、西部をⅡ区とした。11 月 5 日に重機によるⅠ区の表土掘削を行い、順次、遺構掘削と記録作業を進めた。1 面確認時点で、掘削深度が現地表面から 2m 近くになったことや堆積土が砂であることから、安全性に配慮し、下層での調査については調査面積を狭めトレンチを設定して確認作業を行った。12 月 24 日から 25 日にⅠ区の埋め戻し、Ⅱ区の表土掘削を重機で行った。平成 26 年 2 月 25 日までⅡ区の調査を進めた。2 月 7 日にⅡ区調査区の西壁が崩落したため、調査区を狭めトレンチを設定し確認調査を行った。3 月 7 日には調査器材の撤収を行い、現地での調査工程を全て終了した。

測量に当たっては公共座標系（世界測地系第Ⅸ系）に即した座標軸を設定し、都市再生街区基準点（補助点）「3A437」と「3A436」より光波測量機による開放トラバース測量で座標の数値を移動した。

第 2 節 堆積土層と面の概要（図 3）

図 3 に当調査地の調査区北壁・東壁の堆積土層を示した。Ⅰ・Ⅱ区の調査共に、掘削深度が 2m を超えたため、現地表面から 2m 以下の層位については、トレンチ調査で確認した堆積土層を合成している。

地表面と表土（図 3 土層番号 1）

現地表面は標高 10.5m 前後である。近代の建物基礎により最も深い箇所では現地表面から深度 2.8 ～ 2.7m 程まで削平を受けている。

1 面（図 3 土層番号 4）

1 面の堆積はⅠ区でしか確認することができなかった。粒が細かく少し大きい貝殻片をやや多く包含する茶褐色砂質土である。第 1・2 層（図 3 参照）により中世の遺構覆土との区別が極めて困難であったが、炭化物や遺物など包含物の微量な差、覆土の色調の違いなどによって遺構が確認できたため第 4 層直上（図 3 参照）を中世面と判断した。海拔は 8.8m ～ 8.9m。

2 面（図 3 土層番号 6）

2 面の灰褐色砂質土は、土器など人為的な遺物を包含しない風成砂層（中世基盤層）である。海拔は 8.1m ～ 8.35m。

3 面（図 3 土層番号 23）

3 面は、やや粘性のある黒褐色砂質土で、漆黒砂や貝砂を包含している。腐植土層と考えられる。古代遺構面はⅡ区のみ確認できた。古代遺構は、中世遺構と思われる第 8 層（図 3 参照）より削平を受けている。海拔は 8.15m ～ 8.20m。

4 面（図 3 土層番号 24）

4 面は、しまりがあり、やや湿っている暗茶褐色砂質土で無遺物層である。海拔は 6.9m ～ 6.95m。

5 面（図 3 土層番号 25）

5 面は、黄褐色砂質土で粒状の黒色粘土・貝砂を含む無遺物層である。湧水のため壁面のみの確認となったが、遺物を全く含まない海砂層と思われる。海拔は 6.75m ～ 6.80m。

各層の詳細については、図 3 を参照されたい。

念した。遺物の出土していない遺構は表1を、遺物の法量や特徴については表2を参照されたい。

土坑1・11 (図5)

土坑1と11は調査区北西で発見した土坑である。土坑1は残存長軸1.65m、残存短軸1.6m、深さ1mを測り、残存部弧状を呈する。土坑11は残存長軸1.3m、残存短軸0.62m、深さ0.6mを測り、残存部は短辺に丸みを持つ楕円形状である。覆土は、混入物の違いはあるものの、2基とも4層(図3)に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。土坑11より土坑1が新しい。

土坑1からは、かわらけ大皿片5点、瀬戸窯柄付片口片1点、常滑窯甕片1点、貝7点、土師器：武蔵型甕片2点・相模型甕片1点・相模型坏片1点が出土している。図5-1はかわらけ大皿である。土坑11からは、かわらけ大皿片4点とスラグ1点が出土している。図5-2は、かわらけの大皿である。

土坑2・13 (図5)

土坑2は、調査区南西角で発見された。規模は残存長軸0.4m、残存短軸0.3m、深さ約0.36mを測り、残存部形は弧状を呈する。土坑13の規模は残存長軸0.7m、残存短軸0.4m、深さ約0.14mを測り、残存部形は楕円形を呈する。覆土は、混入物の違いはあるものの、4層(図3)に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。土坑2は土坑13より新しい。

土坑2からは、かわらけ小皿片1点、大皿片17点、瀬戸窯器種不明片(四耳壺の可能性有)1点、産地不明陶器片1点、骨1点、貝8点、土師器：相模型坏片1点が出土している。図5-3は、かわらけの小皿1点、4～6の大皿3点、7の産地不明陶器片1点である。土坑13からは、出土遺物は骨2点、貝6点が出土しているが、小破片のため図示していない。

土坑3 (図5)

調査区南東側で検出された。規模は残存長軸1.2m、残存短軸1m、深さ0.2mを測る。残存部は楕円形を呈する。覆土は、上層は黒褐色系の砂質土である。下層は4層(図3)に由来する暗褐色系の砂質土を有する。上層・下層とも貝殻粒を多く含んでいる。

土坑3からは、かわらけ小片16点、大皿片67点、器種不明青磁片1点、常滑窯甕片2点・壺片1点、釘1点、骨1点、貝20点、古代遺物(器種不明)1点が出土した。図5-8・9はかわらけ小皿、10は釘である。

土坑4 (図5)

調査区南東側で発見した。遺構の南側は攪乱による削平を受けている。規模は残存長軸1.75m、残存短軸0.53m、深さ0.13mを測る。覆土は、混入物の違いはあるものの4層(図3)に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。

土坑4からは、かわらけ小皿片2点、大皿片13点、青白磁梅瓶片2点、常滑窯片口鉢I類片1点、スラグ2点、貝2点、須恵器：甕片1点・坏片1点、土師器：武蔵型甕片2点などが出土した。図5-11・12は青白磁梅瓶である。12は、火を受けたのか釉が溶けて模様が確認できない。

土坑7・土坑15 (図5)

土坑7は、長軸1m、短軸0.96m、深さ約0.35mを測り、楕円形を呈す。土坑15の規模は、残存長軸0.75m、残存短軸0.31m、深さ約0.22mを測り、残存部より楕円形と推定される。覆土は、混入物の違いはあるものの、2基とも4層(図3)に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。土坑7は、土坑15より新しい。

土坑7からは、かわらけ小皿14点、大皿片29点、常滑窯甕3点、常滑窯尾張型山茶碗1点、土鍋1点、釘1点、鍵1点、骨4点、貝14点が出土した。図5-13はかわらけ小皿、14は常滑窯尾張型山

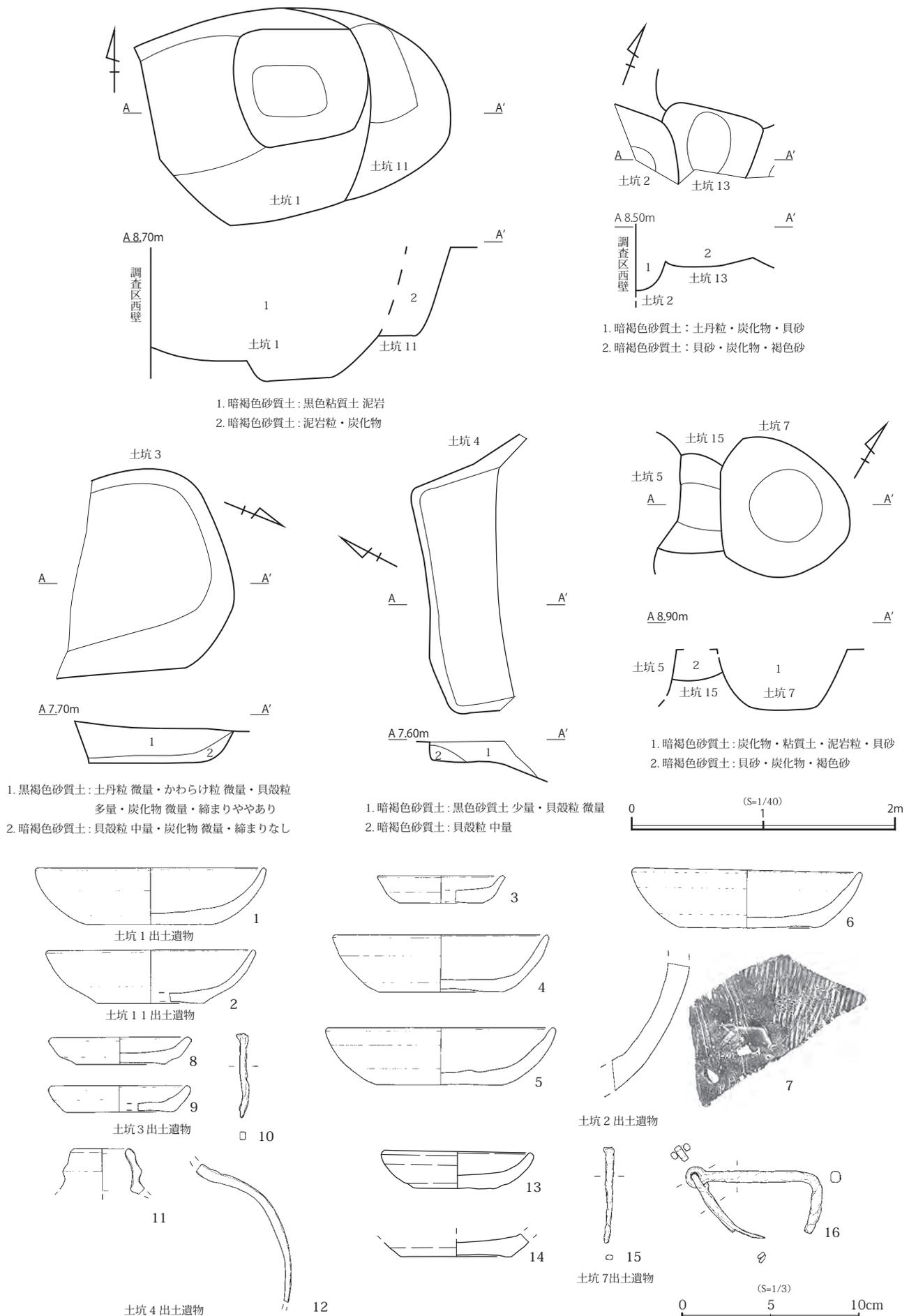


図5 1面遺構と遺物(1)

茶碗、15 は釘、16 は不明鉄製品である。16 の不明鉄製品は、形状から鍵の可能性はある。土坑 15 からは、かわらけ小皿片 2 点と渥美窯甕片 1 点が出土しているが、小破片のため図示していない。

土坑 8 (図 6)

土坑 8 の規模は残存長軸 0.7m、残存短軸 0.5m、深さ約 0.22m を測り、残存部形は楕円形を呈する。覆土は、混入物の違いはあるものの 4 層 (図 3) に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。

土坑 8 からは、かわらけ大皿片 1 点のみ出土しているが、小破片のため図示し得るには至らなかった。

土坑 9・18 (図 6)

調査区北壁東側で発見された。調査時、同じ遺構として掘り上げたが、別の遺構である可能性が考えられる。規模は残存長軸 1.9m、残存短軸 0.8m、深さ約 0.5m を測り、残存部形は両方楕円形を呈する。覆土は暗褐色粘質土である。

土坑 9・18 からは、かわらけ小皿片 2 点、中皿片 1 点、大皿片 5 点、滑石製鍋片 1 点、骨 1 点、貝 2 点が出土している。図 6-1 はかわらけ中皿である。

土坑 10 (図 6)

個別に図示していないが、調査区東壁の一番北側で発見された遺構である。規模は残存長軸 0.95m、残存短軸 0.15m、深さ約 0.39m を測り、残存部形は弧形を呈する。覆土は暗褐色粘質土である。

土坑 10 からは、かわらけ小皿片 12 点、大皿片 37 点、常滑窯甕 4 点、産地不明の甕片 1 点、不明金属製品 2 点、骨 3 点、貝 60 点が出土している。図 6-2 ~ 7 はかわらけ小皿片、8 ~ 10 はかわらけ大皿、11 は常滑窯甕、12 は産地不明の甕である。格子状の押印が施されている。

pit2 (図 6)

覆土は、混入物の違いはあるものの 4 層 (図 3) に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。

pit2 からは、かわらけ大皿片 1 点のみ出土しているが、小破片のため図示し得るには至らなかった。

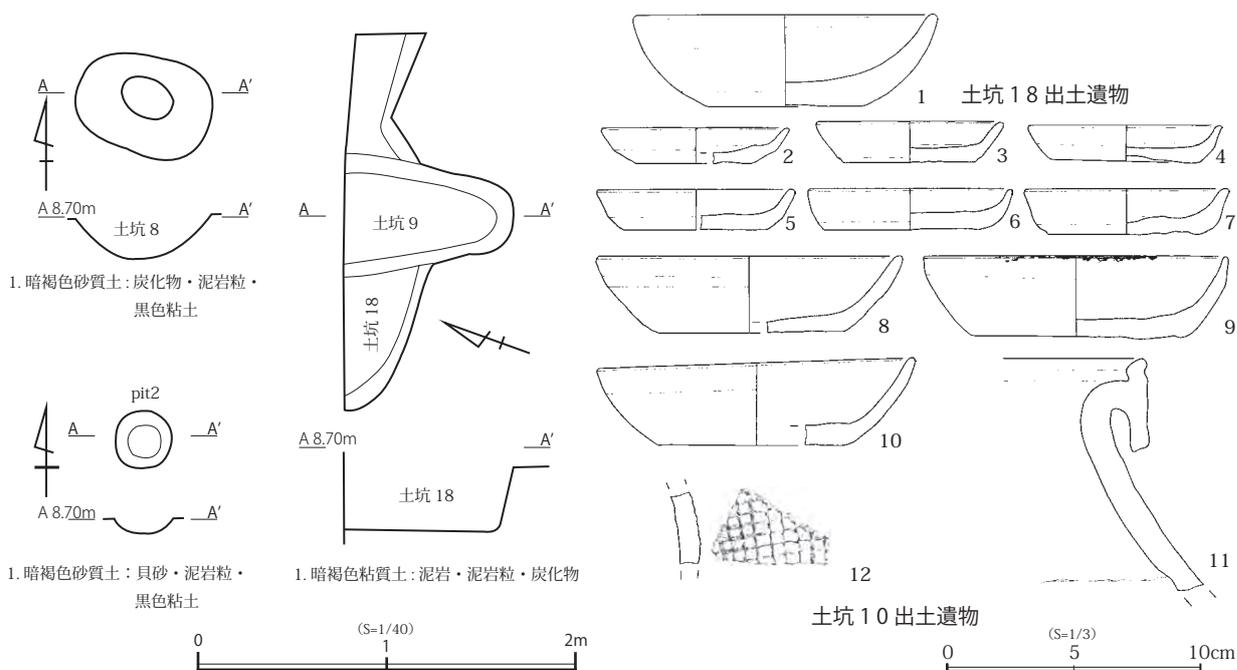


図 6 1 面遺構と遺物 (2)

土坑 5・6・16・20・23・27 (図 7)

多数の土坑が複雑に切り合っていたため I 区調査区中央に南北ベルトを残して土層の確認を行った。

土坑 5 (図 7)

調査区中央に位置する。土坑 5 は長軸約 3.9m、短軸 0.85m、深さ約 1.2m を測り、残存部は細長い楕円形を呈す。覆土は茶褐色～暗褐色の砂質土である。土坑としたが、長軸 3m 以上、深さ 1.2m と周辺の遺跡で検出された土坑と比べ大型であることから他の機能を持つ遺構の可能性も考えられる (図 7 第 1・2・3・4・5・6 層)。上層の攪乱により一部削平をうけている。土坑 15・20・27 より新しい。

土坑 5 からはかわらけ小皿片 21 点、大皿片 153 点、青磁連弁文碗片 1 点、常滑窯甕 7 点、常滑窯壺類 1 点、常滑窯片口鉢 I 類 1 点、轆の羽口 1 点、銭 1 点、骨 9 点、貝 44 点が出土した。図 7-1～4 はかわらけ小皿、5・6 は大皿、7 は常滑窯片口鉢 I 類、8 は元符通寶である。

土坑 6・16 (図 7)

プラン確認時は 1 つの遺構と判断したが、南北ベルトを入れ覆土を確認したところ別々の遺構であることがわかった。土坑 6 は、残存長軸 1.9m、残存短軸 0.9m、深さ約 0.1m を測り、残存部は長方形を呈す。土坑 16 は、残存長軸 1.5m、残存短軸 0.6m、深さ約 0.4m を測り、残存部は歪な楕円形である。覆土は、混入物の違いはあるものの 4 層 (図 3) に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする (図 7 第 9 層)。土坑 6、16 の順に新しい。

土坑 6 からは、かわらけ大皿片 2 点、小皿片 2 点、貝 43 点、須恵器：甕片 1 点・長頸瓶片 1 点、土師器：武蔵型甕片 1 点・相模型甕片 1 点・三浦型甕片 4 点・相模型坏片 2 点が出土した。土坑 16 からは、かわらけ小皿片 4 点、大皿片 50 点、褐釉片 1 点、常滑窯甕片 1 点、加工痕のある土丹 2 点、釘 1 点、筭 1 点、骨 11 点、貝 69 点、須恵器：坏片 1 点、土師器：武蔵型甕片 1 点・三浦型甕片 5 点・土師器片 2 点・盤状坏の蓋片か？ 1 点、須恵器転用品 1 点が出土した。図 7-9 はかわらけ大皿片、10 は釘、11 は筭、12 は須恵器転用品である。

土坑 20 (図 7)

土坑 20 の規模は残存長軸 1.5m、残存短軸 1.05m、深さ 0.16m を測り、残存部楕円形を呈する。覆土は、混入物の違いはあるものの、4 層 (図 3) に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする (図 7 第 7 層)。土坑 5 に北東側を切られている。遺物は出土していない。

土坑 23 (図 7)

土坑 23 の規模は残存長軸 0.8m、残存短軸 0.25m、深さ 0.39m を測り、残存部長方形を呈する。覆土は茶褐色砂質土である (図 7 第 10 層)。土坑 16 より古く、土坑 27 より新しい。出土遺物はない。

土坑 27 (図 7)

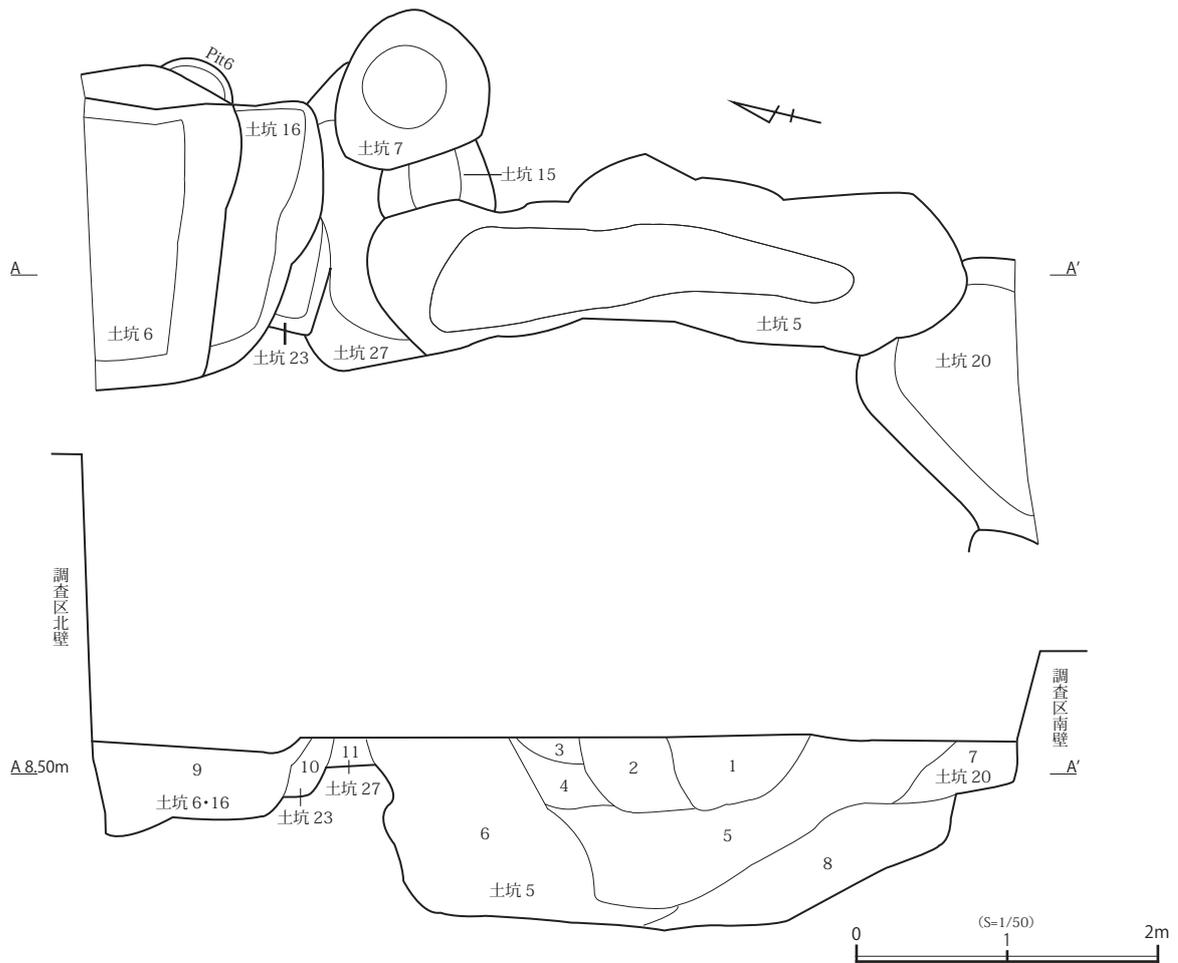
土坑 27 は、土坑 5・7・15・16・23 よりも古い。規模は残存長軸 0.19m、残存短軸 0.37m、深さ約 0.21m を測り、残存部形より楕円形が推定される。覆土は、混入物こそ違うが、土坑 7 と同じ茶褐色砂質土である (図 7 第 11 層)。

土坑 27 からは、小皿 6 点、大皿 12 片、貝 3 点、武蔵型甕 1 点が出土している。図 7-13 はかわらけ小皿、14 は釘である。

土坑 14・22・24・28 (図 8)

土坑 14 (図 8)

土坑 14 の規模は残存長軸 1.6m、残存短軸 1.5m、深さ約 0.91m を測り、残存部形は長方形を呈する。東側上層は土坑 3 による削平を受けている。覆土は、混入物の違いはあるものの、4 層 (図 3) に由来



- | | |
|-------------------------------|----------------------------|
| 1. 暗褐色砂質土 貝砂・炭化物 | 7. 暗褐色砂質土 茶褐色砂・貝砂・土丹粒 |
| 2. 茶褐色砂質土 褐色砂・炭化物 | 8. 茶褐色砂質土 褐色砂・貝砂 |
| 3. 茶褐色砂質土 貝砂・炭化物 | 9. 暗褐色砂質土 褐色砂・貝砂・炭化物・縮まりあり |
| 4. 茶褐色砂質土 茶褐色砂・貝砂・炭化物 | 10. 茶褐色砂質土 褐色砂 |
| 5. 褐色砂質土 茶褐色砂・貝砂・炭化物 | 11. 暗褐色砂質土 灰褐色砂・貝砂 |
| 6. 暗褐色砂質土 灰褐色砂・貝砂・黑色粘土・炭化物 多量 | |

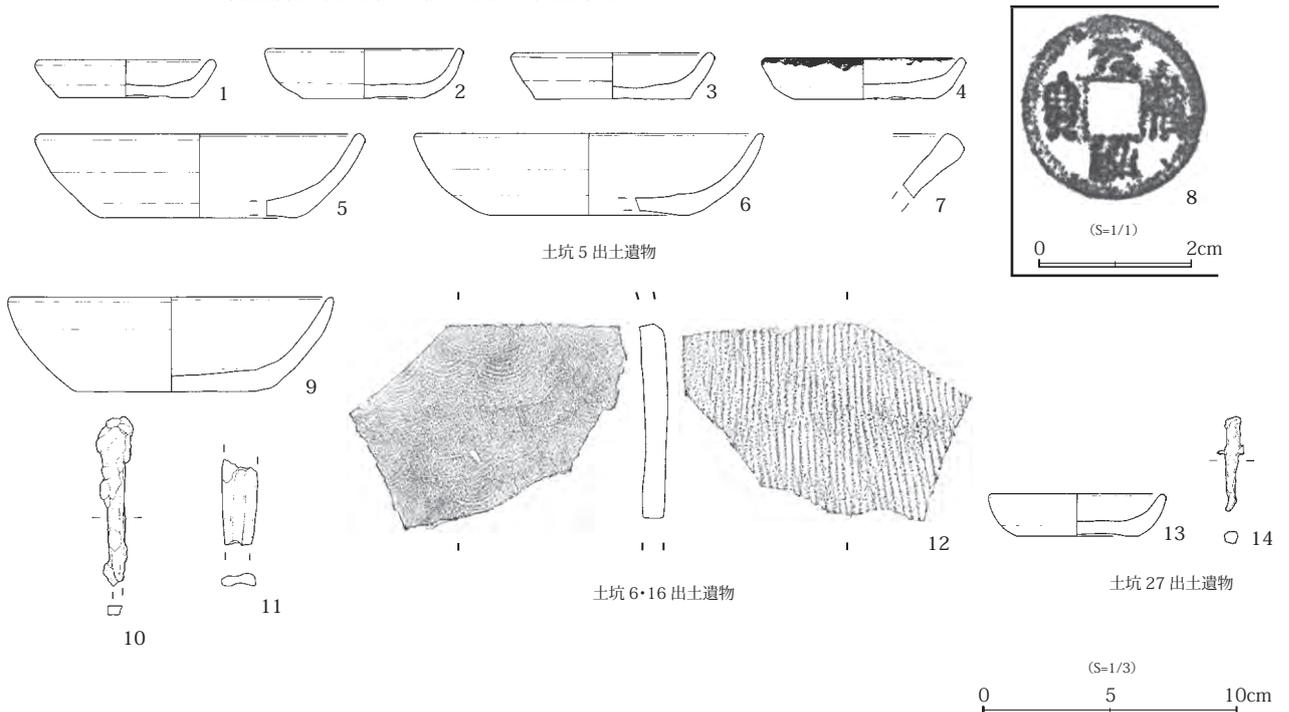


図7 1面遺構と遺物(3)

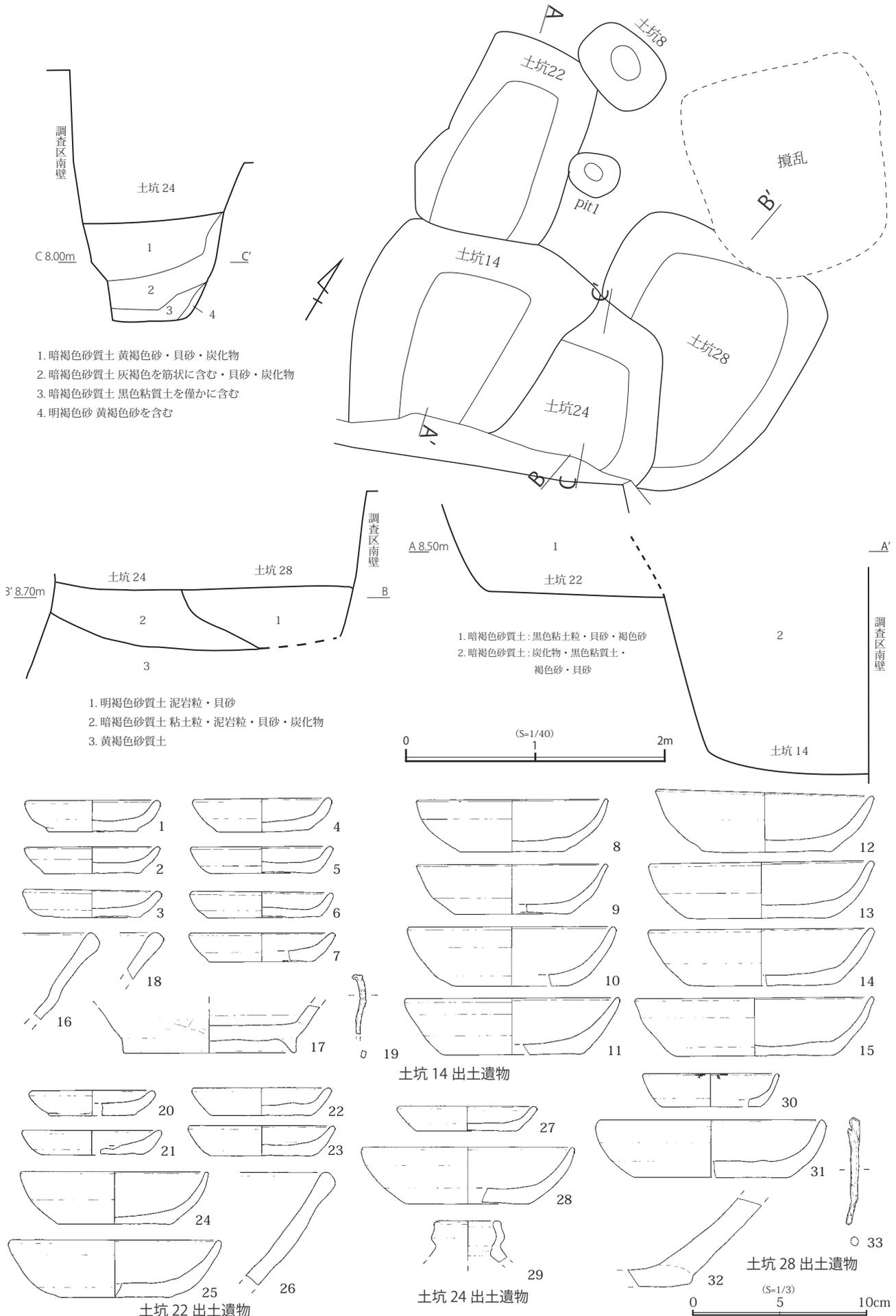


図8 1面遺構と遺物(4)

する暗褐色系の砂質土を主体とする。土坑 22・24 より新しい。

土坑 14 からは、かわらけ小皿片 20 点、中皿片 5 点、大皿片 14 点、灯明皿大皿片 2 点、白磁器種不明片 1 点、常滑窯甕片 3 点、常滑窯片口鉢 I 類片 4 点、軽石 1 点、釘 1 点、骨 6 点、貝 51 点が出土している。図 8-1～7 はかわらけ小皿、8・9 はかわらけ中皿、10～15 はかわらけ大皿、16・17 は瀬戸窯片口鉢 I 類、18 は常滑窯片口鉢 I 類、19 は釘である。

土坑 22 (図 8)

土坑 22 は調査区中央付近で検出された。規模は残存長軸 1.5m、残存短軸 1.0m、深さ約 0.35m を測り、残存部形は長方形を呈する。覆土は、混入物の違いはあるものの、4 層 (図 3) に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。土坑 14、土坑 8、pit1 の方が新しい。

土坑 22 からは、かわらけ小皿片 14 点、中皿片 8 点、大皿片 46 点、瀬戸窯器種不明片 1 点、常滑窯甕片 3 点、常滑窯片口鉢 I 類片 1 点、鞆の羽口片 2 点、骨 4 点が出土している。図 8-20～23 はかわらけ小皿、24 はかわらけの中皿、25 はかわらけ大皿、26 は常滑窯片口鉢 I 類である。

土坑 24 (図 8)

土坑 24 の規模は残存長軸 1.2m、残存短軸 1.2m、深さ約 0.72m を測り、残存部形は長形状である。覆土は、混入物の違いはあるものの、4 層 (図 3) に由来する暗褐色系の砂質土を主体とし、一部明褐色砂が含まれる。土坑 28 より新しく、土坑 14 より古い。

土坑 24 からは、かわらけ小皿片 12 点、大皿片 46 点、青白磁梅瓶片 1 点、常滑窯片口鉢 I 類片 1 点、常滑窯器種不明片 1 点、スラグ 1 点、骨 4 点、貝 54 点が出土した。図 8-27 はかわらけの小皿、28 はかわらけ大皿、29 は青白磁梅瓶である。

土坑 28 (図 8)

規模は残存長軸 1.7m、残存短軸 1.7m、深さ約 0.45m を測り、残存部形は楕円形を呈する。覆土は、明褐色砂質土である。北側を攪乱に南西を土坑 4 と 24 に削平されている。土坑 4、24 の方が新しい。

土坑 28 からは、かわらけ小皿片 14 点、大皿片 45 点、穿孔かわらけ小皿 1 点、常滑窯甕 1 点、常滑窯片口鉢 I 類 1 点、常滑窯片口鉢 II 類 1 点、釘 1 点、貝 78 点、相模型甕片 3 点が出土している。図 8-30 はかわらけ小皿、31 は大皿、32 は常滑窯片口鉢 II 類、33 は釘である。

土坑 19 (図 9)

土坑 19 の規模は、残存長軸 0.9m、残存短軸 0.25m、深さ 0.6m を測り、残存部より楕円形と想定される。覆土は、混入物の違いはあるものの、4 層 (図 3) に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。土坑 26 より新しく、土坑 11 より古い。南側を攪乱により削堀されている。

土坑 19 からは、かわらけ小皿片 1 点、大皿片 24 点、かわらけ大皿 (灯明皿) 1 点、常滑窯壺 1 点、常滑窯尾張型山茶碗 1 点、スラグ 1 点、骨 3 点、貝 20 点、相模型坏 1 点が出土した。図 9-1 はかわらけ小皿、2・3 はかわらけ大皿、4 は常滑または備前の壺底部片、5 は常滑窯尾張型山茶碗である。

土坑 21 (図 9)

南壁中央側で発見された。規模は残存長軸 0.48m、残存短軸 0.35m、深さ約 0.14m を測り、残存部形は長形状である。覆土は、混入物の違いはあるものの、4 層 (図 3) に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。土坑 14 より古い。

土坑 21 からは、かわらけ小皿片 3 点、大皿片 8 点、常滑窯甕片 1 点、渥美窯甕片 1 点が出土している。図 9-6～8 はかわらけ小皿、9 は常滑窯甕である。

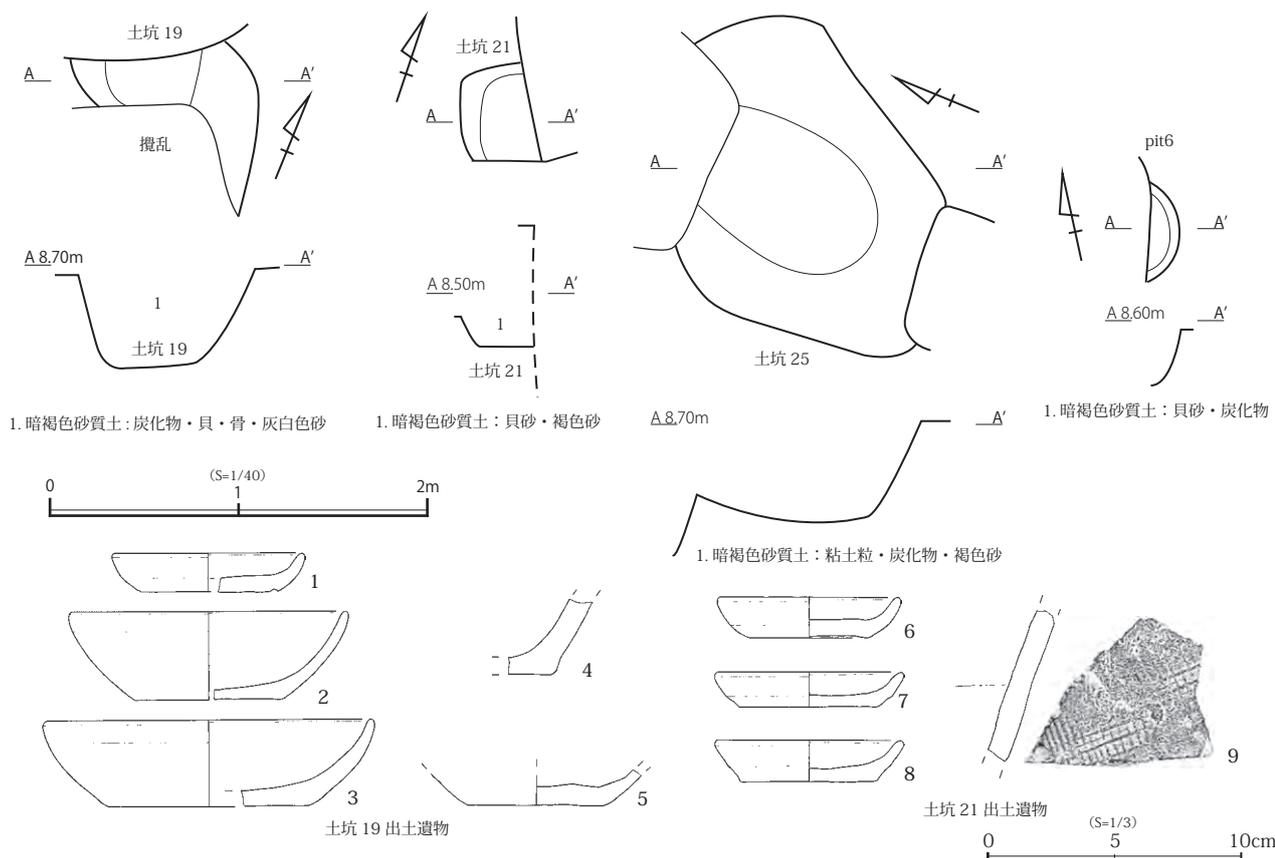


図9 1面遺構と遺物(5)

土坑 25 (図9)

調査区南西側で発見された。規模は残存長軸 1.57m、残存短軸 1.2m、深さ約 0.35m を測り、残存部形より楕円形と推定される。覆土は粘土粒・炭化物・褐色砂を含む暗褐色砂質土である。北側は攪乱、東側は土坑 20、南側は土坑 13 に切られている。

土坑 25 からは、かわらけ小皿片 6 点、大皿片 33 点、常滑窯甕片 3 点、骨 5 点、貝 21 点、須恵器：壺片 1 点、土師器：相模型甕 3 点・三浦型甕片か？ 2 点・相模型坏片 1 点・土師器坏片 1 点が出土しているが、小破片のため図示していない。

pit6 (図9)

覆土は、混入物の違いはあるものの、4 層 (図 3) に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。pit6 からは、貝 1 点と南比企系須恵器甕片 2 点であるが、小破片のため図示し得るには至らなかった。

表 1 遺構計測表

遺構	長軸	短軸	検出標高	底面標高
土坑 12	1.5	0.54	8.58 ~ 8.46	8.34 ~ 8.18
土坑 17	1.6	0.87	8.70 ~ 8.68	8.64 ~ 8.57
土坑 26	0.87	0.32	8.68 ~ 8.57	8.35 ~ 8.30
遺構	長軸	短軸	検出標高	底面標高
pit1	0.4	0.35	8.72 ~ 8.67	8.42
pit3	0.45	0.35	8.74 ~ 8.69	8.55
pit4	0.5	0.37	8.71 ~ 8.67	8.64

(単位 = m)

第2節 1面面上出土遺物、1面構成土出土遺物（図10）

法量や遺物の特徴については表3を参照されたい。1面面上からは、かわらけ小皿片18点、大皿片97点、常滑窯8点、常滑窯片口鉢I類1点、常滑窯尾張型山茶碗1点、火鉢1点、釘3点、金属製品釣針1点、骨片5点、貝31点が出土した。図10-1・2はかわらけ小皿、3・4は大皿、5は釣針、6・7・8は釘である。1面構成土からはかわらけの大皿片1点、銭1点、骨片4点、貝3点、須恵器：坏1点、土師器：古代以前の壺または甕類1点、三浦型甕1点が出土した。図10-9は銭1点である。

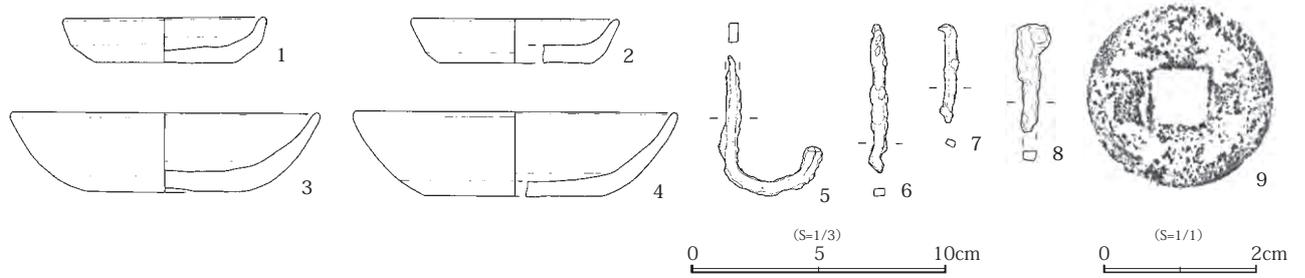


図10 1面面上・1面構成土出土遺物

第3節 古代検出遺構と出土遺物 (図11～17)

I区・II区ともに1面以降は現地表下2m以上での作業となり堆積土が砂ということから、安全性を考慮し下層での調査については調査面積を狭めて作業を行った。I区のトレンチ調査では遺構は検出されず堆積土の確認に留まった。II区では調査中に調査区西壁が崩落と大雪のため調査区を狭め、トレンチを設定し調査を行った。

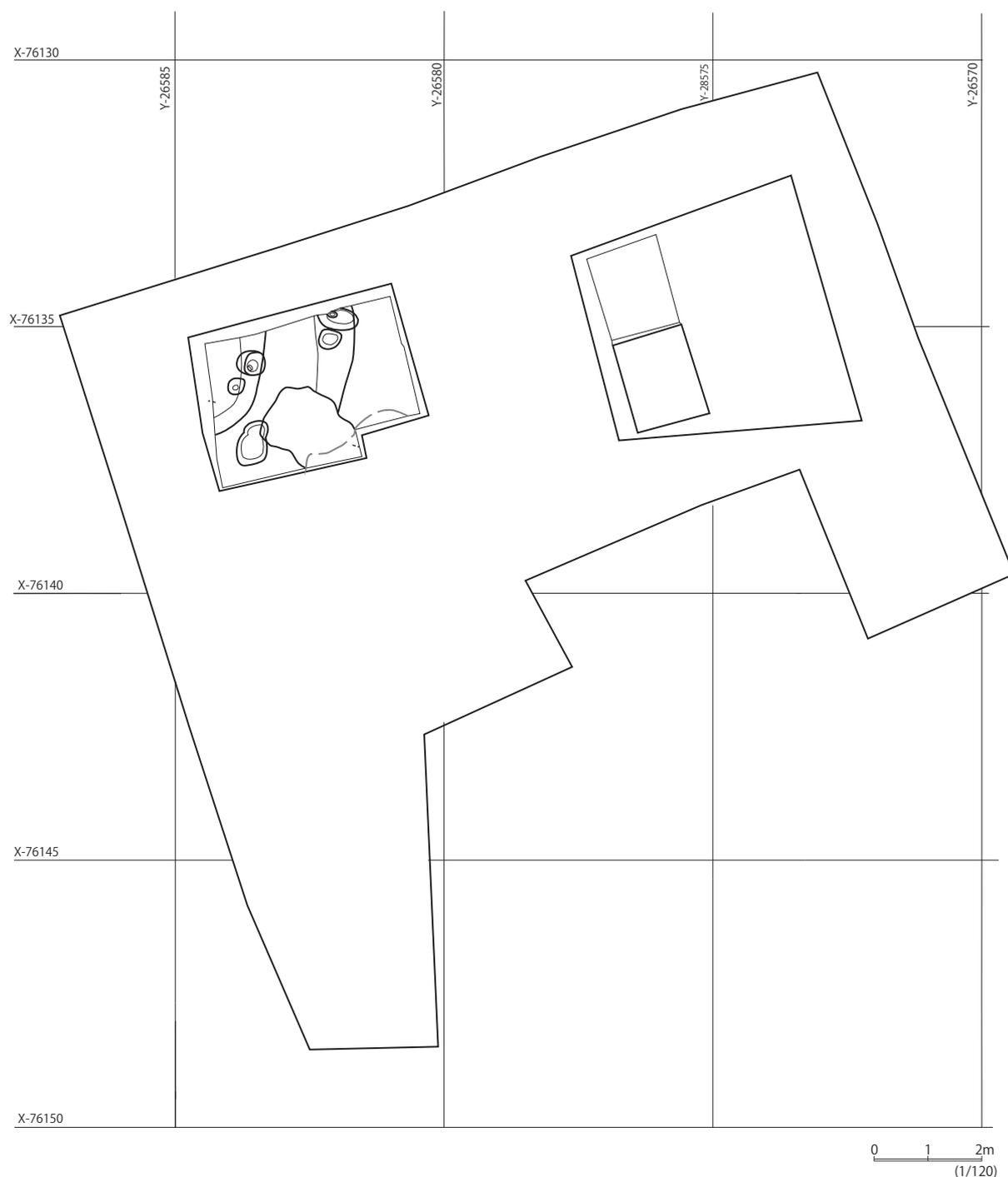
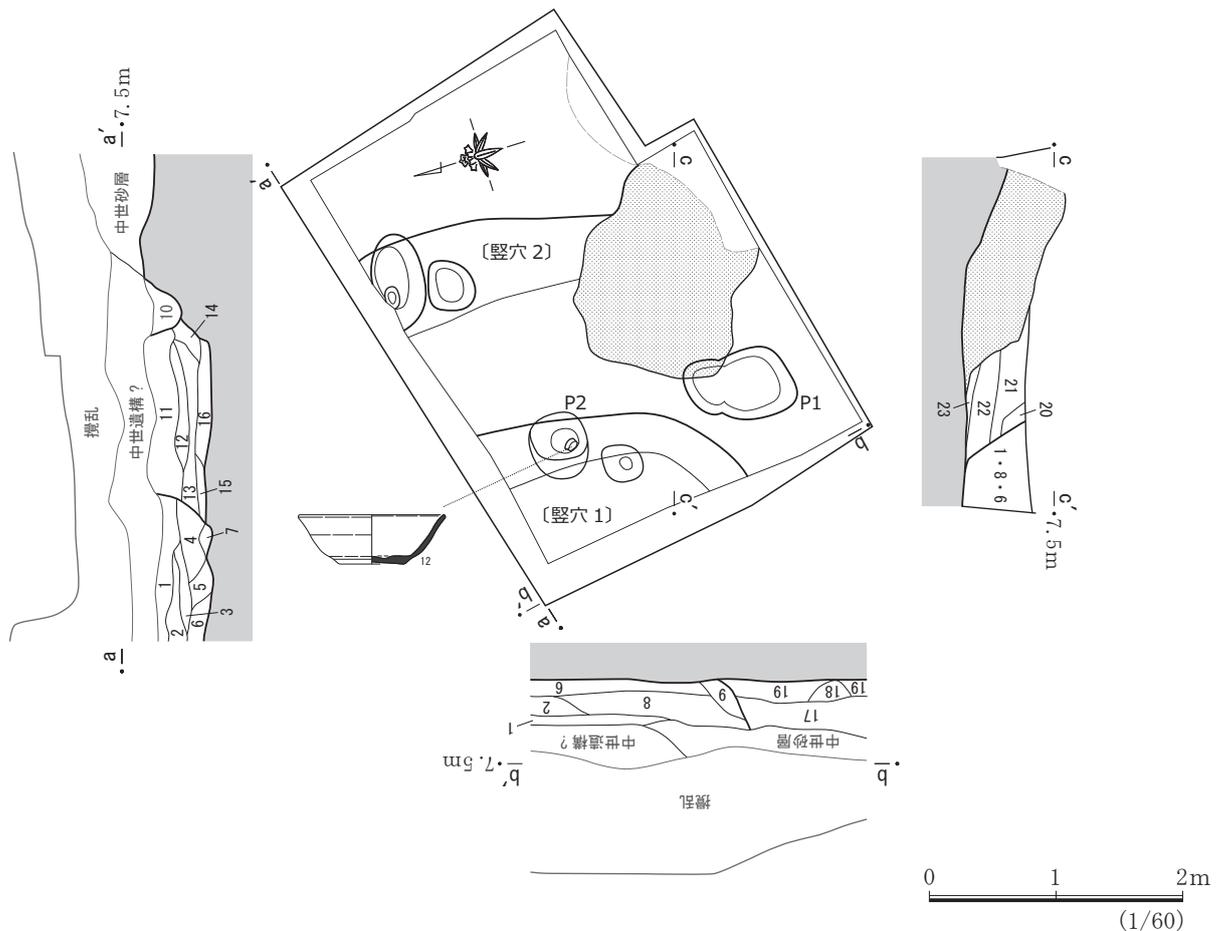


図11 全体図 (古代)

Ⅱ区北西部では、現地表面から2.1 mほど掘り下げた標高8.4 mで東西4 m×南北2.5 mのトレンチを設定・掘削し、中世以前の堆積状況および古代遺構の確認を行った。

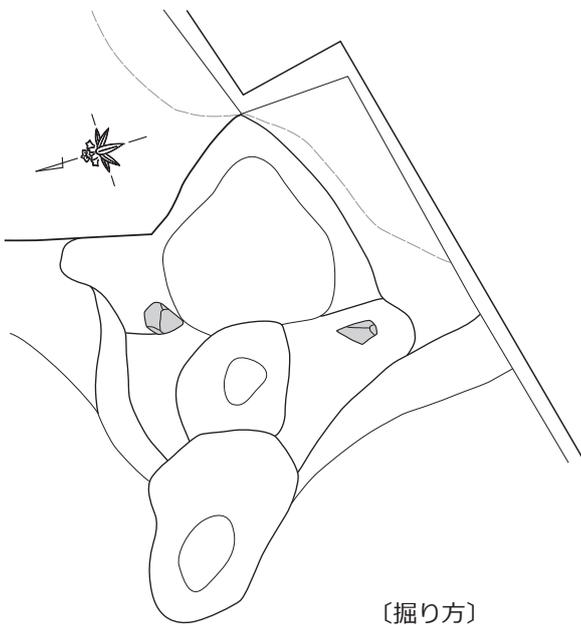
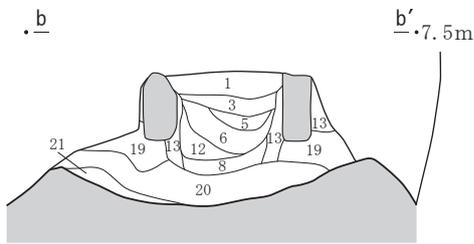
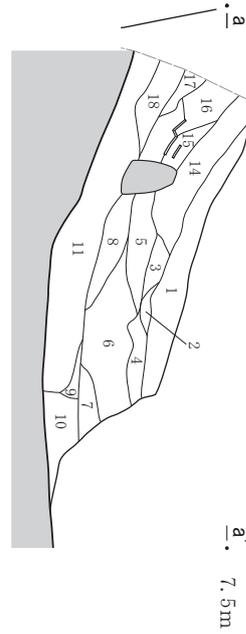
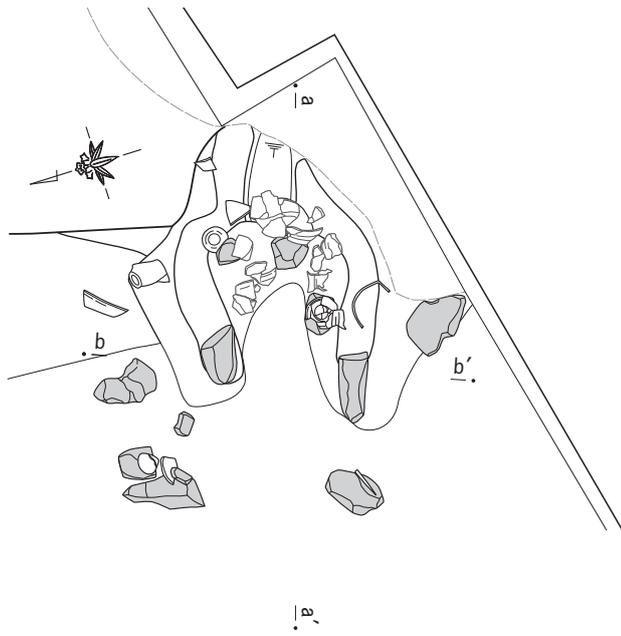
その結果、平安時代の竪穴住居跡2軒が検出され、このうち1軒でカマドが確認された（竪穴2）。カマドの左袖部が設定トレンチの南外に続くことから、この範囲を確定すべく、遺構の遺存部分に限定して50cmほどトレンチの拡張を行った。

海岸砂丘という非常に軟質な地盤に加えて2 mを超える掘削深度、そして予想外の積雪による調査区壁面の崩落といった要因も重なり、安全面への配慮から調査区の更なる拡張は断念した。



- | | |
|--------------------------------------|--------------------------------|
| 1 褐色砂質土 泥岩粒・炭化物混入。 | 13 褐色砂質土 粘土粒・炭化物微量。 |
| 2 黒褐色粘質土 粘土ブロック・焼土・炭化物混入。 | 14 暗褐色砂 |
| 3 黒褐色粘質土 焼土・炭化物混入。 | 15 黒褐色砂質土 炭化物混入。 |
| 4 暗褐色砂質土 粘土粒・炭化物混入。 | 16 褐色砂質土 炭化物微量混入。 |
| 5 暗褐色砂質土 粘土粒・炭化物・灰粒混入。 | 17 暗褐色砂質土 泥岩粒混入。 |
| 6 暗褐色砂 炭化物、下位の一部に灰粒混入。 | 18 暗褐色砂質土 黄褐色砂多量混入。 |
| 7 暗褐色砂質土 炭化物・灰粒混入。 | 19 暗褐色砂 |
| 8 暗褐色砂質土 粘土粒多量、焼土・炭化物混入。 | 20 暗褐色砂質土 泥岩粒混入。 |
| 9 暗褐色砂質土 粘土ブロック混入。 | 21 暗褐色粘質土 粘土ブロック・焼けた泥岩粒・炭化物混入。 |
| 10 暗褐色砂質土 かわらけ片・炭化物混入。中世遺構か。 | 22 暗黄褐色砂質土 粘土粒混入。 |
| 11 褐色砂質土 粘土粒・炭化物微量混入。 | 23 黄褐色砂 黒褐色砂質土混入。 |
| 12 褐色砂質土 上面に締め強い粘土層が堆積。
粘土粒・灰粒混入。 | |

図 12 竪穴住居（竪穴1・竪穴2）



- 1 暗褐色粘質土 貝殻・砂ブロック・黒褐色粘土混入。
天井崩落土。
- 2 暗褐色粘質土 貝殻・黒褐色粘土・泥岩粒・炭化物混入。
- 3 暗褐色粘質土 1層より砂質。灰粒多く混入。焚口～煙道。
- 4 暗褐色砂質土 黒色粘土・貝殻・泥岩粒・炭化物多量。
- 5 暗褐色粘質土 炭化物・黒褐色粘土混入。
3層より灰粒少ない。
- 6 暗褐色砂質土 貝殻・泥岩粒・炭化物・黒褐色粘土混入。
- 7 暗黄褐色砂質土 貝殻・泥岩粒・炭化物少量混入。
- 8 暗黄褐色砂 黒褐色粘土、焼土・焼けた泥岩粒・炭化物混入。
- 9 暗黄褐色砂 黒褐色粘土多量、炭化物混入。
- 10 黄褐色砂 黒色砂・炭化物混入。
- 11 暗黄褐色砂 黒褐色砂・炭化物混入。
- 12 暗黄褐色砂質土 焼土主体で締まり強い。
上面に炭化物が薄く堆積する。
- 13 暗褐色粘質土 袖構築土。
- 14 暗褐色粘質土 貝殻・泥岩粒・炭化物多量混入。
- 15 暗褐色粘質土 泥岩粒・炭化物多量。
- 16 褐色粘土 貝殻・泥岩粒・炭化物混入。
- 17 褐色粘土 貝殻・焼けた泥岩粒・炭化物混入。
- 18 暗褐色砂 焼土・焼けた泥岩粒・炭化物混入。
- 19 暗黄褐色土 焼けた泥岩粒・炭化物多量混入。
- 20 暗黄褐色砂 炭化物・黒褐色砂混入。
- 21 暗黄褐色砂 混入物少なく締まり弱い。

図 13 竪穴住居 (竪穴 1・竪穴 2) カマド

以下、トレンチ内で検出された遺構と出土遺物について説明を行う。

トレンチ上端から深さ 60cm（標高 7.7 m 前後）までは現代の攪乱層で、濁りの強い暗褐色の砂質土が堆積していた。この下には 20～50cm の厚さで中世の基盤層および遺構覆土とみられる褐色砂質土が堆積し、これを取り除いた標高 7.4～7.5 m でキメの細かい腐植土をベースとする黒褐色砂質土が検出された。無遺物層であり、古代遺構の基盤層と考えられる。

トレンチ内で検出された遺構は竪穴住居（2 軒）とピット 5 基で、ピットのうち中世遺物が出土した 1 基（図 12-10 層）以外は古代に属するものと考えている。

竪穴住居は、トレンチ壁断面の観察から 2 軒が重複した状態で確認されたものと捉え、西側で新しいものを竪穴 1、これに切られていたものを竪穴 2 と分けて呼称した。掘り方底面は、竪穴 1 の方がわずかだが低い。ただ、限定された調査範囲であり、両遺構の出土遺物には明確な年代差がないことも考慮すれば、同一遺構内の覆土様相の差異といった可能性も完全には排除できない。

竪穴 1 は断面観察による計測値として、東西 120cm、南北 210cm 以上の規模となることを確認した。深さは 50cm ほどで、掘り方底面の標高は 6.7～6.8 m を測る。明瞭な貼り床は確認できなかったが、図 12-23 層がこれに相当すれば、厚さは 10cm 程度である。

竪穴 2 は東辺のみが確認でき、全体の規模・形状は不明である。南北 400cm、東西 275cm までを計測し得た。掘り方底面までの深さは 50cm で、底面標高は 6.8 m を測る。図 12-14・15 層が貼り床であった可能性がある。竪穴の東壁にカマドを付設しており、これを正面に見た場合の遺構中心軸は N-110°-E 前後を指す。カマドは東壁から 40cm ほど突出したところで現代攪乱に切られるが、煙道の立ち上がり具合から、これよりも大きくは突出せずに煙出し施設があったものと考えている。カマド全体では

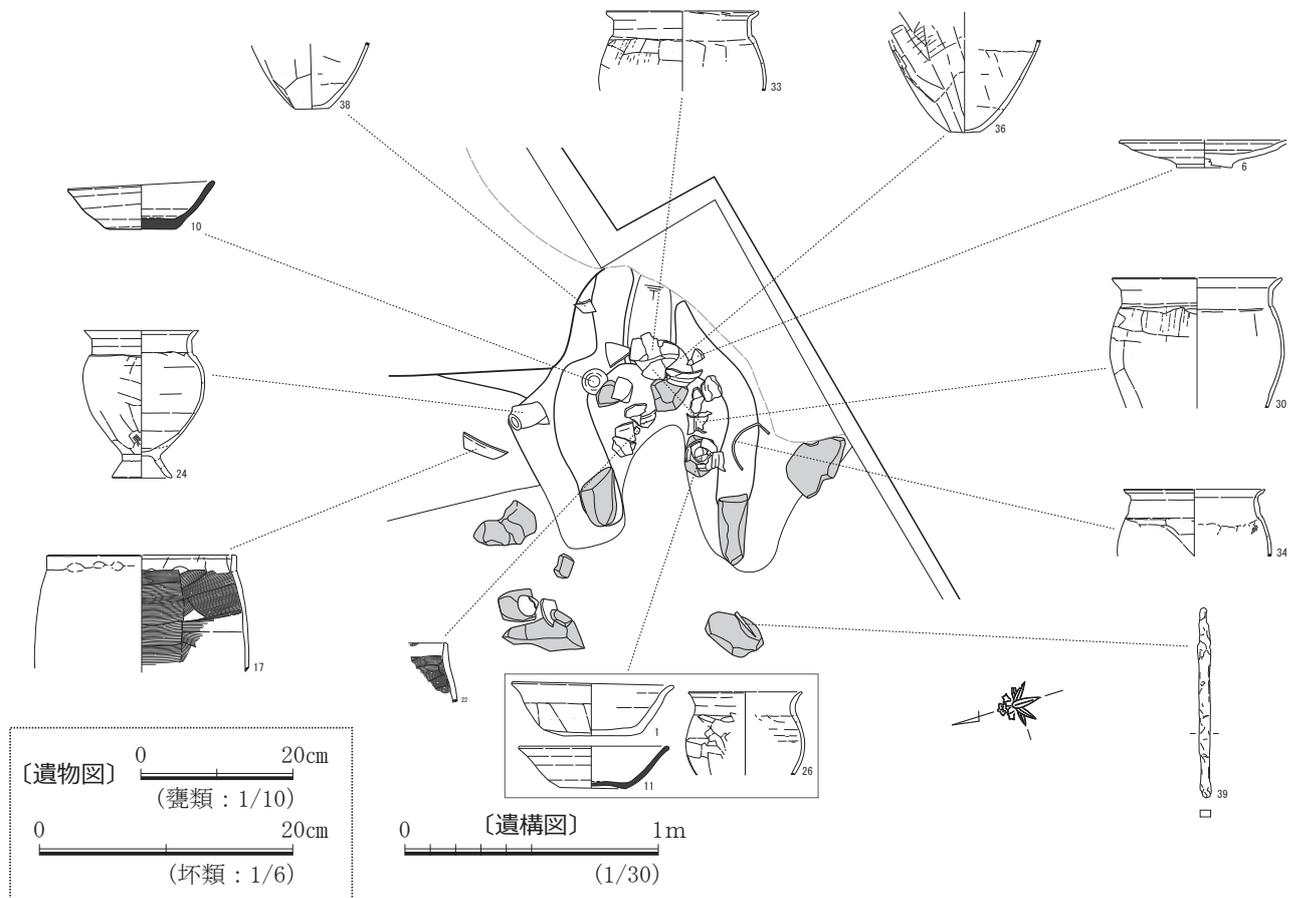


図 14 竪穴住居（竪穴 1・竪穴 2）カマド内 遺物出土状況

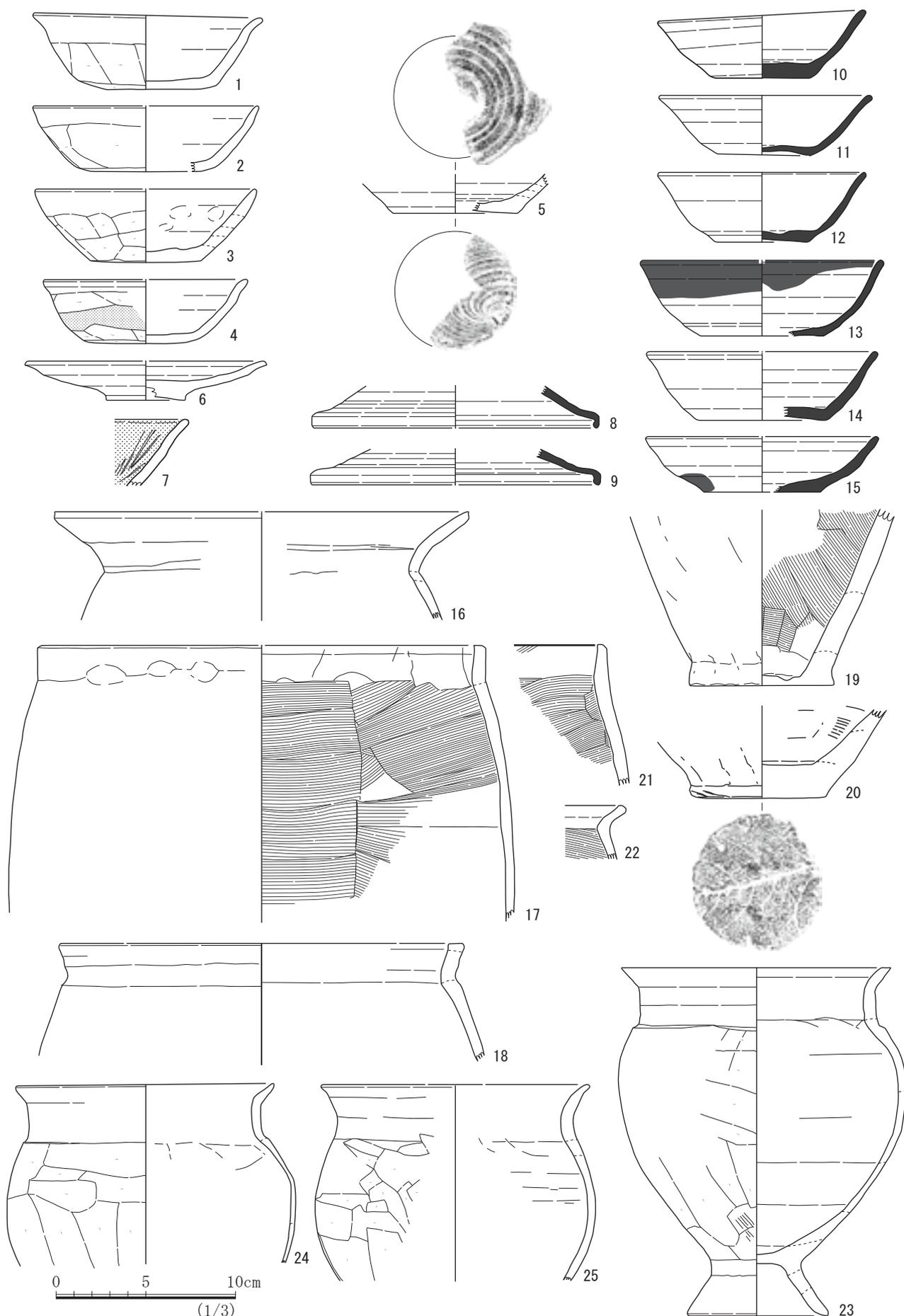


图 15 竖穴住居（竖穴 1·竖穴 2）出土遺物（1）

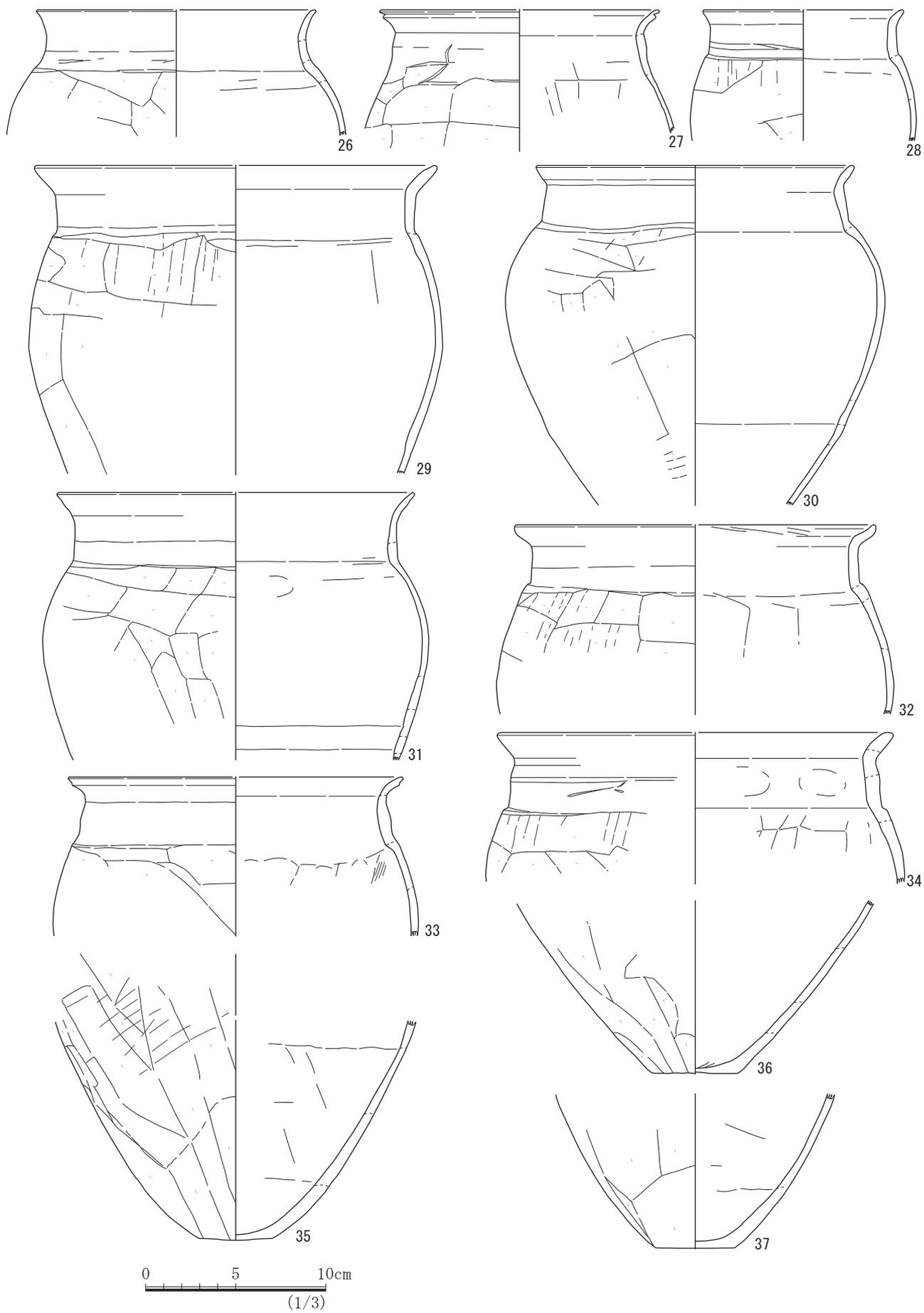


图 16 竖穴住居（竖穴 1·竖穴 2）出土遺物（2）

長さ 160cm 以上、両袖幅は 110cm 前後となり、燃焼部では 40cm ほどの高さが遺存していた。焚口から煙道にかけての両袖には高さ 20cm 前後の凝灰岩が一定間隔で立てられ、これに灰白色の粘土を貼り付けて形成されていた。凝灰岩は掘り方底面の砂層上だけでなく焼けた粘土の上に置かれるものもあったことから、使用による劣化と補修とが繰り返された様子が窺える。右袖の南外では切り出し痕のある扁平な凝灰岩が出土しており、形状・位置から袖石に架構天井石が転げ落ちたものと考えられる。燃焼部には、支脚とみられる 23cm 高の円柱状凝灰岩が据えられていた。カマド内では煮炊具以外の土器も出土しており、不要となった土器が補修時の混和材となった様子が窺えた（図 13）。

竪穴の掘り方底面では小規模なピットが検出されているが、展開状況も明らかでなく柱穴となるかは定かでない。このうち、P2 としたものは 30cm ほどの深さをもち、底面の標高は 6.5 m を測る。底面付近から、南比企窯産の須恵器坏が出土している（図 15-12）。

図 15～17 には、竪穴 2 の出土遺物を掲げた。ここでは全体の様相を述べることにし、個々の資料の詳細は、遺物観察表を参照されたい（ただし、器種分類の目安となる成形・整形方法についてはイレギュラーなケースを除いて省略している）。

土師器の相模型坏は口径が 12cm 前後で口径 / 底径比が 50% 以上のものが主体を占める。体部外面は一段ないし二段の横へラケズリを施している。『平塚市史』における d 段階の資料が中心といえよう。須恵器の坏・坏蓋は南比企窯の製品が主体で、坏の底部外面には右回転の糸切り痕が無調整で残る。坏は口径 11cm 台と 12～13cm の二法量に区別でき、加えて口径 / 底径比および口径 / 内底径比がともに 50% 前後を示すことから、概ね鳩山Ⅷ期に比定できる。15 は体部が他の資料より開いており、中世の山茶碗となる可能性も残る。

土師器の甕は、台付甕を含む武蔵型の製品が 10 個体以上と主体をなしており、これに三浦型が次ぐ。相模型の甕は非常に少なく、図示できたには 16 の 1 点のみであった。

38 の鞆羽口は、カマド構築材として再利用されたものとみられる。39 の鉄製品は角棒状を呈するが、用途は不明である。40 の砥石は、中世上野砥に似た石材である。土師器および須恵器の供膳具は 9 世紀後葉の特徴を備え、カマド内の出土資料も同様であることから、住居の使用期間もこの時期と考えられることができる。

本地点では、現地表面から 3 m 掘り下げないと古代の遺構面に達しなかった。周辺の調査例では中世以降も人的活動の退潮に伴う砂丘の発達経過が把握されており（地点 40）、古代以前の地形復元および土地利用の実態を掴むためには問題意識だけでなく多大な労力が必要である。それでも、小規模とはいえ発掘調査の積み重ねこそが課題の克服のために最も有効な手段であることは間違いない。

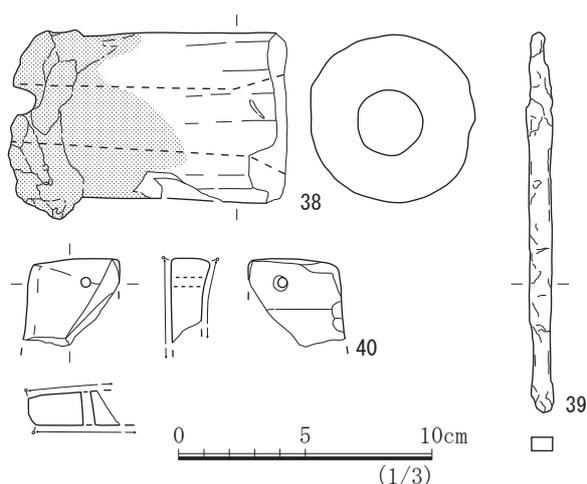


図 17 竪穴住居（竪穴 1・竪穴 2）出土遺物（3）

第4節 II区トレンチ上層出土遺物 (図18)

この他、II区トレンチ内から出土した遺物を述べていく。標高7.7m前後をトレンチ上層、標高7.5m以下をトレンチ下層とわけた(図3・図11)。法量や遺物の特徴については表5を参照されたい。

上層ではかわらけ小皿片2点、大皿片25点、青磁蓮弁文碗片1点、褐釉であろうか器種不明1点、常滑甕5点、常滑片口鉢Ⅱ類1点、火鉢1点、土錘5点、土丹1点、スラグ1点、骨片6点、貝7点、近代瓦1点、須恵器:杯(南比企)片4点、土師器:甲斐型杯片1点、相模型甕片5点、三浦型甕片5点、相模型杯片3点、相模型甕片3点が出土した。図18-1はかわらけ小皿、2は大皿、3は常滑片口鉢Ⅱ類、4～8は土錘である。

下層からは、かわらけ小皿片2点、大皿片30点、常滑甕片3点、常滑片口鉢Ⅰ類1点、土製品轆の羽口1点、軽石4点、石13点、焼けた土丹176点、土丹28点、金属製品4点、骨角製品2点、骨18点、貝326点、須恵器:坏片7点、坏片(南比企)24点、坏片(南多摩)2点、坏片(渥美・湖西似)1点、小型壺片か2点、蓋片(南比企)3点、甕片2点、甕片(南比企)4点、壺・甕類片1点、器種不明1点、土師器:相模型甕片103点、相模型坏片47点、相模小型甕片1点、相模型またはそれ以前の土器片2点、相模型系統坏片1点、三浦型甕片268点、三浦型甕片か1点、武蔵型甕片410点、武蔵型台付き甕片2点、土師器小片59点、古墳後期くらいの坏片か1点、甲斐型坏片2点、弥生の土器片か1点、弥生の壺または甕片1点、産地不明甕片1点、不明土器片1点、不明破片10点、三浦半島のロクロ土師器または坏片2点、土師器坏片1点、坏片1点が出土したが小破片のため図示していない。

II区トレンチ出土遺物の中に、近代遺物やかわらけ等が混入しているのは、近代の攪乱による影響である。

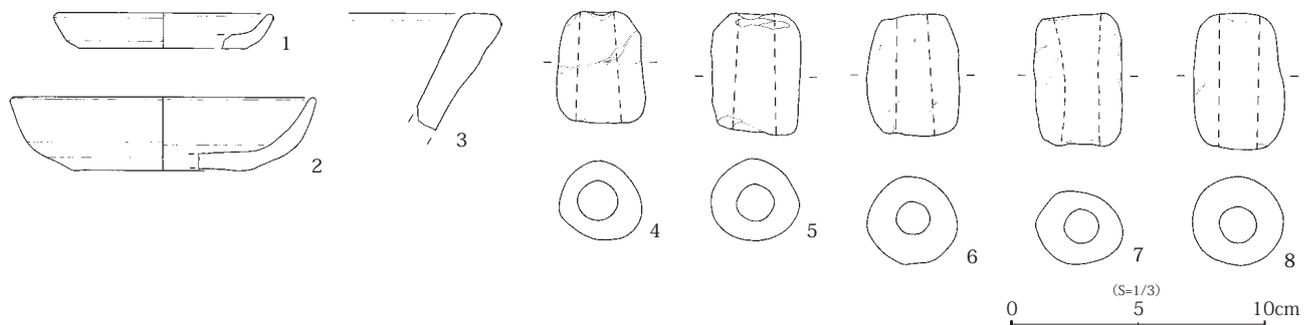


図18 II区トレンチ上層出土遺物

第5節 表土出土遺物 (図19～21)

図19～21には表土から出土した遺物を図示した。法量や遺物の特徴については表6を参照されたい。図19-1～30がかわらけの小皿、31～35はかわらけの中皿、36～51はかわらけの大皿、52～55は青磁の鎬蓮弁文碗、56は白磁の口元皿、57は白磁の口元碗、58・59は青白磁の梅瓶、60は瀬戸窯壺類の底部、61・62は瀬戸窯の折縁深皿、63は瀬戸窯の卸目皿、64は瀬戸窯の器種不明品である。図20-65～77は常滑窯片口鉢Ⅰ類、78～84はⅡ類、85は常滑窯の鉢類としたが、他産地の別器種の可能性も考えられる。86～88は常滑窯の甕、89は渥美窯の甕、90は東濃型山茶碗、91は常滑窯尾張型山茶碗、92は轆の羽口、93～95は火鉢、96は器種不明瓦質製品の脚、97は土錘、98・99は砥石である。図21-100～122は釘、123は不明鉄製品で頭頂部に丸く穴が開けられている。124～126は骨製品である。125は穿孔がみられるため紐などを通して使用するものかもしれない。126は用途不明骨製品で

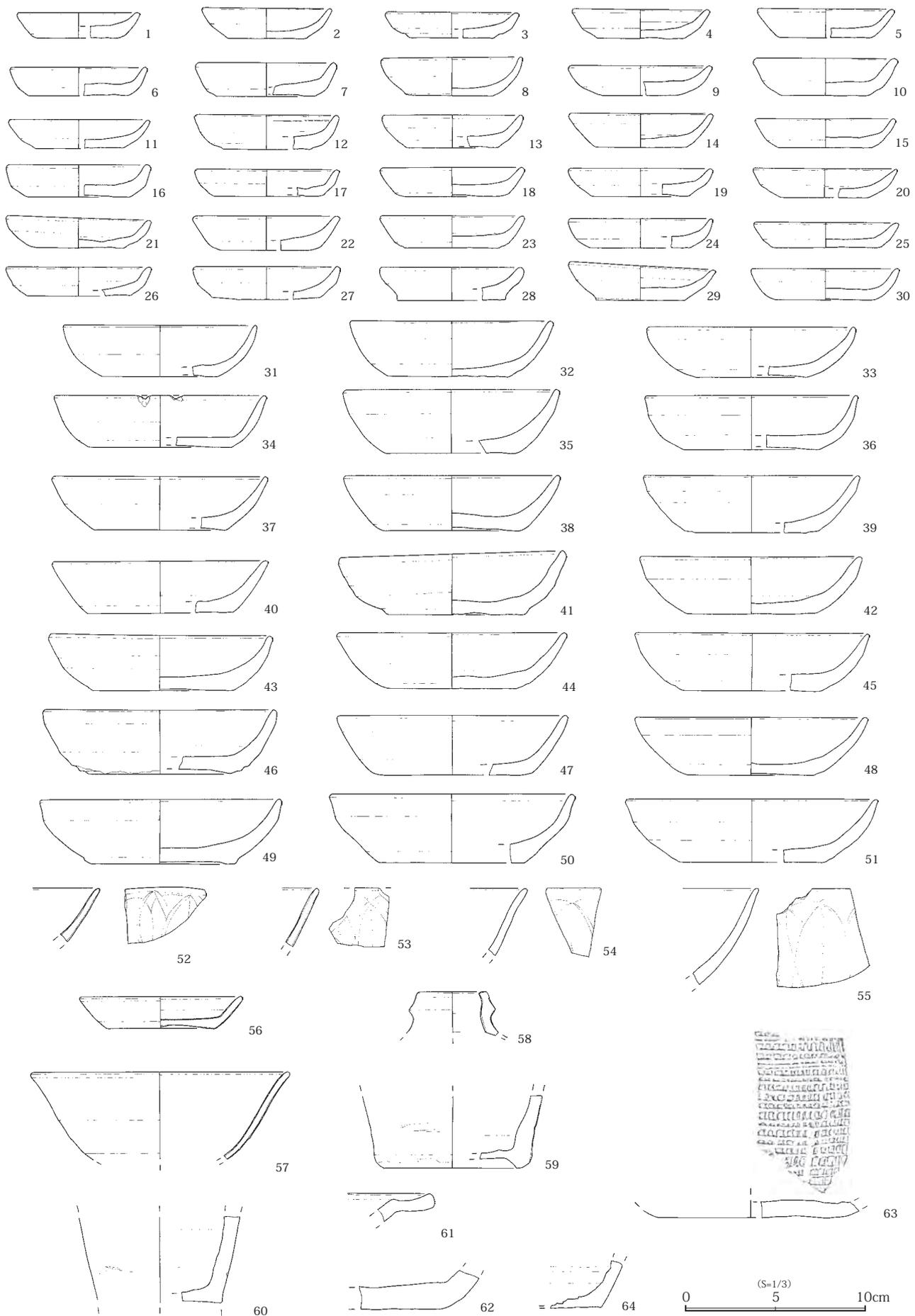


图 19 表土出土遺物 (1)

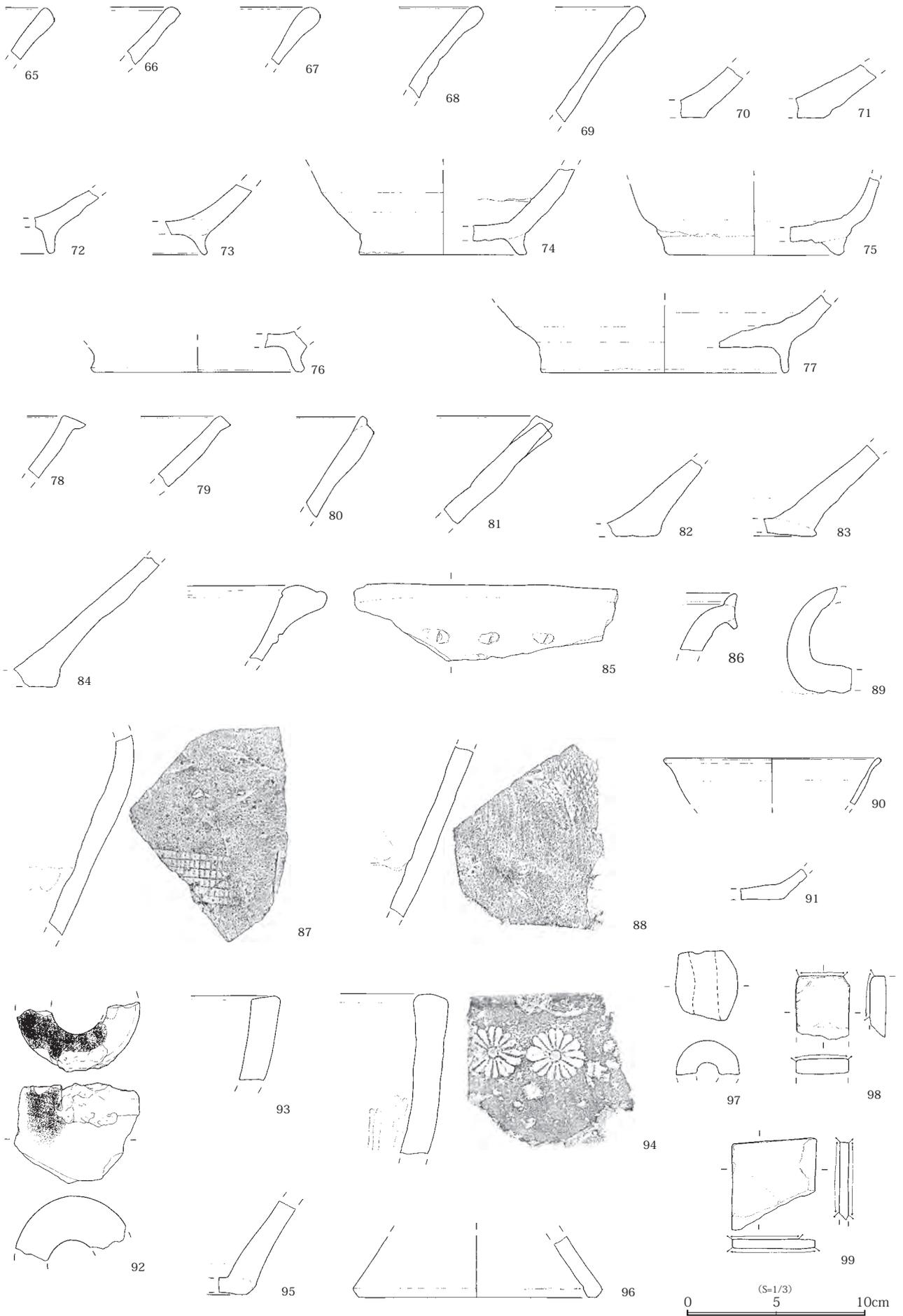


图 20 表土出土遺物 (2)

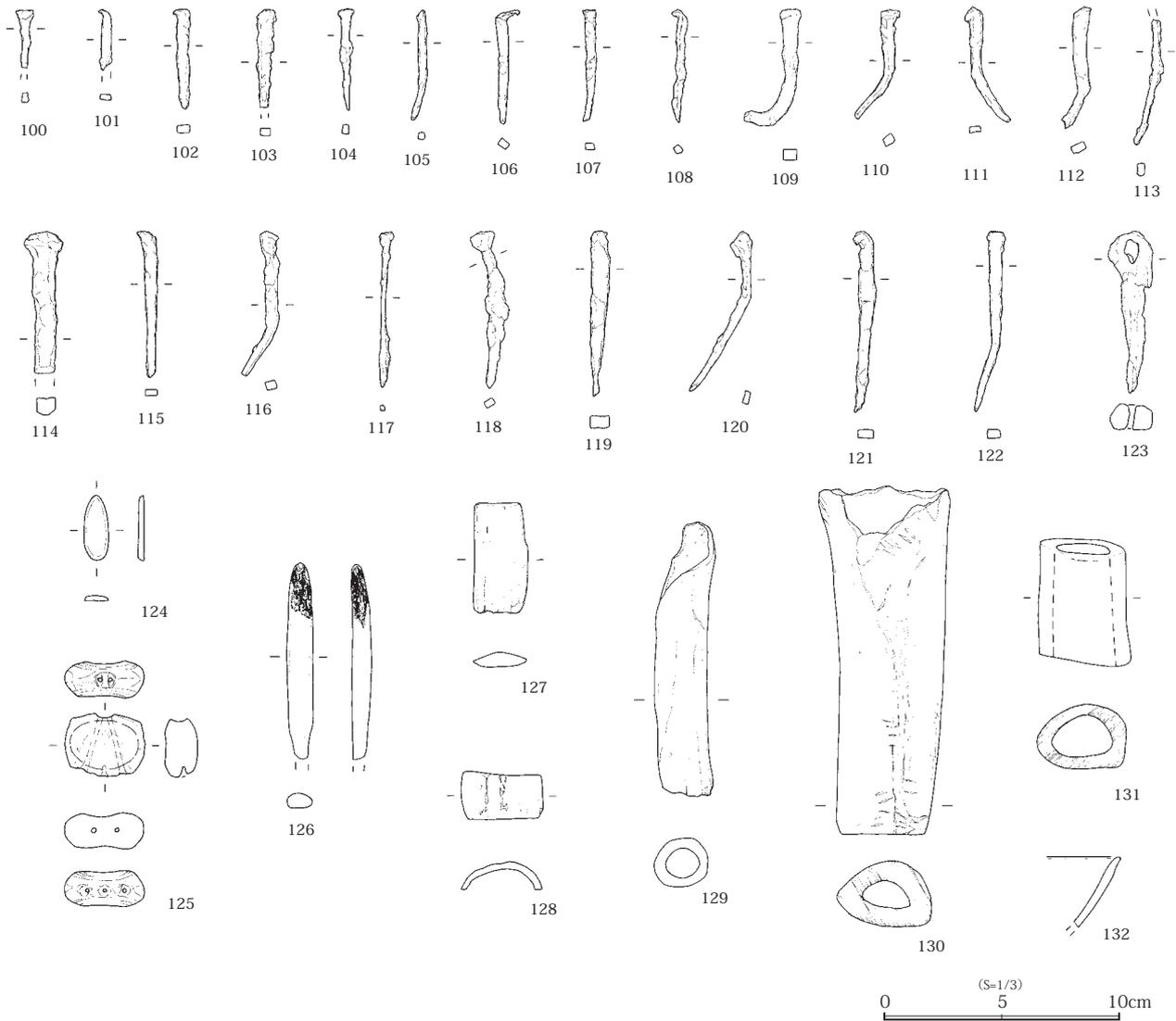


図 21 表土出土遺物 (3)

楕円形で薄く先端に丸みを持ち、先端が黒くなっている。127～131は加工途中もしくは端材の骨である。刃物で切られたような痕跡が残っている。132は須恵器の坏の口縁部片である。

第6節 中世面・古代面より出土した貝について

当遺跡地から出土した貝の種類、生息域、出土面、個体数を表7にまとめた。

貝の分類に際して、アワビやカキについては、破片資料がほとんどであったため「アワビ」、「カキ」と一括した。種類が特定できなかった貝は不明とし、二枚貝は出土点数をそのまま数えた。サザエは有棘種・無棘種とも一緒に数えた。

古代の遺構から多く出土した貝は、アサリ・チョウセンハマグリ・ヤマトシジミ・サザエ・ハマグリの順である。特にシジミ・ヤマトシジミ・アサリ等、汽水域や砂浜域などに生息していた貝を中心に出土した。

中世の遺構から多く出土した貝は、チョウセンハマグリ・ハマグリ・サザエ・ダンベイキサゴ・アサリ・イボキサゴ・キサゴ・アカニシである。内湾や砂浜域などでとれる二枚貝類を中心に、アワビ、サザエ、アカニシといった肉厚な巻貝が出土している。

古代はアサリの出土量が特に多いが、中世はチョウセンハマグリ・ハマグリという内湾や海浜域で採取するような貝の検出状況がみられる。変わって古代から出土する貝は、汽水域や砂浜域で採取する種類のものが多い傾向がみられた。本調査地周辺では、古代にはシジミなどが生息していたことが推察される。中世は、シジミなどの汽水域や砂浜域で採取される貝の検出量が極端に減少することから古代と中世の間に大きな環境の変化があった様子が窺える。

古代と中世とも遺構から多量に貝が出土しているが、遺構の面積と貝の出土量を比較すると遺物の出土量は少なく、ゴミ穴と判断し難い状態であった。ゴミ穴だった場所を壊し、方形竪穴建物群の内側の空間地という場所に転用されたのかもしれないが憶測の域をでない。本調査地点の貝の検出状況からは、遺構の機能について比較することは非常に難しいが、古代と中世の貝の検出状況の変化がわかる事例と考えられる。今後、長谷小路周辺遺跡内より出土している貝を精査することにより、採取されていた貝の傾向、古代との比較、調査地周辺の環境・生息していた貝の種類などを想定する材料になるのではないかと思われる。

[引用・参考文献]

奥谷喬司・波部忠重 1983『学研生物図鑑 貝Ⅱ〔二枚貝・陸貝・イカ・タコほか〕』学習研究社

奥谷喬司・波部忠重 1983『学研生物図鑑 貝Ⅰ〔巻貝〕』学習研究社

池田等 2012『見て、さわって、不思議を学ぶ！貝の図鑑&採集ガイド』実業之日本社

池田等・松沢陽士 2009『海辺で拾える貝ハンドブック』文一総合出版

第四章 まとめ

長谷小路周辺では、1989～2015年までの間に計29件の発掘調査が行われている。2002年に報告された「長谷一丁目205番12」では、長谷小路周辺の地形概念図により13世紀代の中世基盤層（風成砂層）と現在の道路の高低差がほぼ同じであることが指摘されている（汐見2002,p.162）。

この調査成果をもとに、長谷小路周辺遺跡の現地表面・中世基盤層（風成砂層）の標高を抜き出してみた。本調査地点では、第二章でも述べたがⅡ区は近代の造成による攪乱で削平されていたため、中世基盤層が確認できたのはⅠ区だけであった。図1調査地点図の遺跡地点番号、地点21（現地表標高：約9.3～9.0m、中世基盤層標高：7.80～7.75m）から地点3（現地表標高：9.6m、中世基盤層標高：8.8m）へ向けて砂丘が高まり、地点3から地点23（現地表標高：8.6m、中世基盤層標高：7.5m）・地点11（現地表標高：8.3～8.1m、中世基盤層と考えられる風成砂層は確認されていない）周辺に向けてなだらかに落ち、地点31（現地表標高：10.6～10m、中世基盤層標高：9.5～9.3m）・地点32（現地表標高：約9m、中世基盤層標高：7.9m）あたりから再び高まっていく状況が分かってきている。本調査地点は、図1の地点1に所在し、地点3と地点23の間に位置する場所である。本調査地点は、現地表標高：約10.5m前後、中世基盤層標高：8.30mで現地表面は、地点3に比べ1mほど高くなる。図示していないが中世基盤層は地点3から当地点で一旦下がり、当地点から地点23へむけ緩やかに上がる様子が、Ⅰ区トレンチ西壁で確認できた。当地点と地点23の間に標高が少し高まる場所があり、そこから地点23に向けなだらかに傾斜していく様子が推考できる。

これまでの長谷小路周辺遺跡における発掘調査で、検出・出土した遺構・遺物の傾向を鑑みると、当遺跡地周辺の状況は、方形竪穴建物が建ち並び、漁撈や骨製品などの加工・制作を生業とする職能民が生活していた場であったと想定される。本調査地点では中世・古代ともに生活面の上部が現代の

攪乱による削平をうけていたが、9世紀後葉と14世紀代、下って近代の生活の痕跡は確認されたが、それぞれの継続性は見られなかった。

本調査地点からは周辺遺跡で検出されている方形竪穴建物は検出されおらず、図7の土坑5・6・7・15・16・23・27・20のように切り合いが集中していることから土坑を頻繁に作り変える必要がある場所であったと想定される。しかしながら、土坑の検出数に比べ、遺物の出土量が非常に少ない。本調査地点周辺の地点2・3・4・7・9・12・13・14（図1参照）などからは多くの方形竪穴建物が発見されおり、中には職人集団との関連を想起させる遺物も多く出土している。しかし、本調査地点より検出された遺構や遺物からは、職人に関連するような遺構や遺物は発見されなかったことから、方形竪穴建物が立ち並ぶ中の空間として、何かに利用されていた場とも考えられる。

Ⅱ区北西部で行ったトレンチ調査の結果、古代の竪穴住居跡が2軒確認され、竪穴2からはカマドを検出した。時期は出土した須恵器や土師器から9世紀後葉と推定される。住居址に伴うカマドは、その一部を近代の攪乱により破壊されていたが、カマドの構築材として須恵器の坏や轆の羽口、武蔵型甕、相模型甕、三浦型甕などが使用されていたのは注視される。特に武蔵型甕の出土量が多い傾向にあり、甕の種類に偏りがみられた。周辺遺跡からも古代の遺構や遺物が出土しているが、本遺跡との関連性は未詳である。周辺遺跡の調査事例の増加を待ちたい。

表2 遺物観察表(中世)①

() = 復元値 [] = 遺存値

指図 番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法 (cm)			観察項目
				口径	底径	器高	
5-1	1面土坑1	かわらけ	口縁2/7 ~底部4/7	(12.8)	(7.0)	3.2	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 橙色 e: 良好
5-2	1面土坑11	かわらけ	口縁1/16 ~底部1/5	(11.5)	(6.0)	3.0	a: 轆轤 外底糸切痕 内底 ^テ b: 雲母 赤色粒 白色粒 良土 c: 橙色 e: 良好
5-3	1面土坑2	かわらけ	口縁1/7 ~底部1/4	(6.9)	(4.8)	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡赤橙色 e: 良好
5-4	1面土坑2	かわらけ	口縁1/8 ~底部1/2	(11.9)	(7.0)	3.2	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好 f: 二次焼成か全体に煤付着
5-5	1面土坑2	かわらけ	口縁~底部 1/3	(12.6)	(7.0)	3.2	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡赤橙色 e: 良好
5-6	1面土坑2	かわらけ	略完形	12.6	7.9	3.2	a: 轆轤 外底糸切痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
5-7	1面土坑2	中世不明陶器	胴部片	—	—	[7.25]	a: 上部 ^テ 目 下部 ^テ ^テ b: 暗灰色 微砂 白色粒 c: 暗灰色 e: 良好 硬質
5-8	1面土坑3	かわらけ	口縁1/5 ~底部2/5	(7.6)	(5.0)	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
5-9	1面土坑3	かわらけ	口縁~底部 1/4	(7.6)	(6.0)	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡赤橙色 e: 良好
5-10	1面土坑3	鉄製 釘	完形	長4.7	幅0.5	厚0.3	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重3.7g
5-11	1面土坑4	青白磁 梅瓶	口縁部小片	(3.0)	—	[2.6]	b: 白色 精良緻密土 d: 淡水青色
5-12	1面土坑4	青白磁 梅瓶	胴部片	—	—	[7.9]	b: 灰白色 黒色粒 精良緻密土 d: 淡水青色不透明 f: 外面に模様 全体に二次焼成を受け釉がとりべ状になっている
5-13	1面土坑7	かわらけ	口縁1/8 欠 ~底部全	8.2	4.4	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
5-14	1面土坑7	山茶碗	底部小片	—	(6.2)	[1.3]	a: 輪積み成形の轆轤整形 外底糸切 内底 ^テ b: 灰色 小石粒 c: 灰色 f: 産地・型式不明
5-15	1面土坑7	鉄製 釘	完形	長5.4	幅0.4	厚0.3	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重2.3g
5-16	1面土坑7	鉄製品	完形	L型: 長7.7 I型: 長5.8	幅0.6 幅0.4	厚0.5 厚0.2	f: L型-頭部外φ1.2 内φ0.5 I型-頭部外φ1.2 内φ0.7 重20.0g
6-1	1面土坑18	かわらけ	口縁~底部 1/7	(11.6)	(6.0)	3.6	a: 轆轤 外底糸切痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
6-2	1面土坑10	かわらけ	口縁1/5 ~底部1/3	(7.2)	(4.6)	1.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
6-3	1面土坑10	かわらけ	口縁2/7 ~底部4/7	(7.2)	(5.2)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 黄灰色 e: 良好
6-4	1面土坑10	かわらけ	完形	7.4	5.7	1.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
6-5	1面土坑10	かわらけ	口縁1/3 ~底部3/7	(7.6)	(5.6)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
6-6	1面土坑10	かわらけ	口縁4/7 ~底部3/5	7.8	6.4	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
6-7	1面土坑10	かわらけ	口縁1/5 ~底部1/4	(7.8)	(6.6)	1.8	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 黒色粒 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
6-8	1面土坑10	かわらけ	口縁1/5 ~底部1/3	(11.8)	(7.4)	3.0	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
6-9	1面土坑10	かわらけ	一部欠損	11.8	8.2	3.1	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 橙色 e: 良好 f: 裏に焼成痕
6-10	1面土坑10	かわらけ	口縁1/4 ~底部2/3	12.3	7.6	3.2	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 白色粒 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
6-11	1面土坑10	常滑 甕	口縁部片	—	—	[9.2]	a: 輪積み b: 暗灰色 白色粒 長石粒 礫片 c: 暗灰褐色 e: 良好 硬質 f: 中野編年7型式
6-12	1面土坑10	龜山 甕	胴部小片	—	—	[2.8]	b: 黄橙色 白色粒 粗胎 c: 暗灰褐色 f: 内面の器表剥離
7-1	1面土坑5	かわらけ	口縁1/3 ~底部3/8	(6.8)	(5.2)	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
7-2	1面土坑5	かわらけ	口縁3/7 ~底部1/2	(7.4)	(4.8)	1.95	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
7-3	1面土坑5	かわらけ	口縁1/4 ~底部1/3	(7.6)	(6.0)	1.8	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 泥岩粒 海綿骨針 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好

表2 遺物観察表(中世)②

() = 復元値 [] = 遺存値

指図 番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法 (cm)			観察項目 a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
				口径	底径	器高	
7-4	1面 土坑5	かわらけ	口縁 2/5 ~底部 3/7	(7.7)	(5.4)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ⁺ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 小石粒 粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好 f: 灯明皿 口縁部に煤付着
7-5	1面 土坑5	かわらけ	口縁 1/7 ~底部 1/6	(12.5)	(7.7)	3.3	a: 轆轤 外底糸切痕 内底 ⁺ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
7-6	1面 土坑5	かわらけ	口縁 1/18 ~底部 1/5	(13.5)	(7.8)	3.2	a: 轆轤 外底糸切痕 内底 ⁺ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
7-7	1面 土坑5	常滑 片口鉢 1類	口縁部小片	—	—	[2.5]	a: 輪積み 内外面 ⁺ b: 灰色 小石粒 c: 灰色
7-8	1面 土坑5	銅銭	完形	外径 2.4	内径 2.0 孔径 0.7	厚 0.1	f: 元符通寶 北宋 1098年 篆書 重 3.5g
7-9	1面 土坑 6・16	かわらけ	口縁 1/8 ~底部 1/3	(12.6)	(8.0)	3.7	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ⁺ b: 微砂 白色粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 良土 c: 橙色 e: 良好
7-10	1面 土坑 6・16	鉄製 釘	下部欠損	長 [6.7]	幅 0.5	厚 0.4	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 8.7g
7-11	1面 土坑 6・16	骨製品 筭?	両端欠損	長 [3.4]	幅 1.3	厚 0.4	f: 両面中央に溝状の加工
7-12	1面 土坑 6・16	須恵器 甕	胴部片	—	—	[7.7]	b: 灰色 黒色微粒 精良土 c: 淡灰黄色の自然釉 e: 良好 硬質 f: 中世での再利用の可能性あり 上端一部に切り出し痕・磨耗
7-13	1面 土坑27	かわらけ	口縁 1/8 ~底部 1/5	(6.7)	(4.8)	1.7	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ⁺ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
7-14	1面 土坑27	鉄製 釘	完形	長 3.7	幅 0.5	厚 0.5	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 2.9g
8-1	1面 土坑14	かわらけ	口縁 3/7 ~底部 3/5	(7.2)	5.0	1.8	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ⁺ b: 微砂 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好
8-2	1面 土坑14	かわらけ	口縁~底部 1/7	(7.5)	(5.4)	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ⁺ b: 微砂 雲母 白色粒 黒色粒 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好
8-3	1面 土坑14	かわらけ	口縁 2/3 ~底部 4/5	7.5	5.9	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ⁺ b: 微砂 雲母 白色粒 黒色粒 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-4	1面 土坑14	かわらけ	完形	7.6	5.2	1.9	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ⁺ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
8-5	1面 土坑14	かわらけ	口縁 1/4 ~底部 1/3	(7.8)	(5.8)	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ⁺ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-6	1面 土坑14	かわらけ	口縁~底部 3/5	7.9	6.4	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ⁺ b: 微砂 金雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-7	1面 土坑14	かわらけ	口縁 1/5 ~底部 1/3	(8.1)	(6.0)	1.65	a: 轆轤 外底糸切痕 内底 ⁺ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好 f: 磨滅激しい
8-8	1面 土坑14	かわらけ	口縁 1/7 ~底部 1/3	(10.8)	(6.0)	3.0	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ⁺ b: 微砂 金雲母 黒色粒 海綿骨針 良土 c: 橙色 e: 良好
8-9	1面 土坑14	かわらけ	口縁~底部 1/6	(10.8)	(6.4)	2.85	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ⁺ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 泥岩粒 やや良土 c: 橙色 e: 良好
8-10	1面 土坑14	かわらけ	口縁 1/3 ~底部 1/5	(11.6)	(6.4)	3.4	a: 轆轤 外底糸切痕 内底 ⁺ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
8-11	1面 土坑14	かわらけ	口縁 1/8 ~底部 3/7	(12.2)	(7.6)	3.25	a: 轆轤 外底糸切痕 内底 ⁺ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-12	1面 土坑14	かわらけ	口縁 1/4 ~底部略完 形	12.3	7.5	3.45	a: 轆轤 外底糸切痕 内底 ⁺ b: 微砂 雲母 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-13	1面 土坑14	かわらけ	口縁 2/7 ~底部全	12.6	7.4	3.2	a: 轆轤 外底糸切痕 内底 ⁺ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-14	1面 土坑14	かわらけ	口縁 1/5 ~底部 4/7	(12.6)	(8.2)	3.25	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ⁺ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好 f: 二次焼成か内外面一部に煤付着
8-15	1面 土坑14	かわらけ	口縁~底部 1/2	(13.6)	(9.0)	3.3	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ⁺ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 やや良土 c: 橙色 e: 良好
8-16	1面 土坑14	瀬戸 片口鉢	口縁部小片	—	—	[4.9]	b: 灰色 長石粒 小石粒 緻密 c: 灰色 e: 良好 f: 13c 第3
8-17	1面 土坑14	瀬戸 片口鉢	底部小片	—	(9.8)	[2.8]	a: 外面工具 ⁺ b: 灰色 小石粒 c: 灰色 e: 良好 f: 13c 第4
8-18	1面 土坑14	常滑 片口鉢 1類	口縁部小片	—	—	[2.7]	a: 輪積み 内外面 ⁺ b: 灰色 1~7mm大小石粒 c: 灰色 f: 第2段階
8-19	1面 土坑14	鉄製 釘	下部破損	長 [3.4]	幅 0.4	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 1.9g
8-20	1面 土坑22	かわらけ	口縁 1/6 ~底部 1/5	(6.8)	(5.0)	1.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ⁺ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-21	1面 土坑22	かわらけ	口縁~底部 1/3	(7.8)	(5.6)	1.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ⁺ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 橙色 e: 良好

表2 遺物観察表(中世)③

() = 復元値 [] = 遺存値

指図 番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法 (cm)			観察項目
				口径	底径	器高	
8-22	1面土坑22	かわらけ	口縁1/6 ~底部3/7	(7.8)	(5.8)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ 後外周 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-23	1面土坑22	かわらけ	口縁2/5 ~底部3/7	(8.2)	(6.2)	1.7	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ 後外周 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 灰橙色 e: 良好
8-24	1面土坑22	かわらけ	口縁1/4 ~底部2/5	(10.6)	(6.4)	3.0	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
8-25	1面土坑22	かわらけ	口縁1/5 ~底部2/5	(11.8)	(6.2)	3.3	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
8-26	1面土坑22	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片	—	—	[6.5]	a: 輪積み b: 淡灰橙色 白色粒 赤色粒 石英粒 長石粒 礫片 粗胎 c: 淡灰橙色 e: 良好
8-27	1面土坑24	穿孔かわらけ	口縁1/5 ~底部2/5	(7.4)	(5.8)	1.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-28	1面土坑24	かわらけ	口縁1/16 ~底部1/3	(12.0)	(6.8)	3.25	a: 轆轤 外底糸切痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-29	1面土坑24	青白磁 梅瓶	口縁部小片	(3.2)	—	[2.4]	b: 灰白色 黒色粒 精良緻密土 d: 淡水青色半透明 貫入
8-30	1面土坑28	かわらけ	口縁~底部 2/7	(7.6)	(5.6)	1.9	a: 轆轤 外底糸切痕 b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 橙色 e: 良好 f: 灯明皿 口縁部に煤付着
8-31	1面土坑28	かわらけ	口縁1/6 ~底部1/5	(12.6)	(8.8)	3.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡赤橙色 e: 良好
8-32	1面土坑28	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部小片	—	—	[5.1]	a: 輪積み 内外面ヨコテ 外底砂目痕 b: 暗灰色 長石粒 小石粒 c: 茶褐色 f: 内面磨滅・灰緑色の自然降灰
8-33	1面土坑28	鉄製 釘	完形	長6.2	幅0.5	厚0.5	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重4.1g
9-1	1面土坑19	かわらけ	口縁1/6 ~底部1/5	(7.4)	(5.4)	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 橙色 e: 良好
9-2	1面土坑19	かわらけ	口縁~底部 1/6	(10.8)	(5.8)	3.5	a: 轆轤 外底糸切痕 内底 ^テ b: 雲母 金雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 良土 c: 淡橙色 e: 良好
9-3	1面土坑19	かわらけ	口縁1/4 ~底部1/5	(12.6)	(8.2)	3.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 良土 c: 淡橙色 e: 良好
9-4	1面土坑19	渥美 甕	底部小片	—	—	[2.9]	a: 輪積み b: 暗灰色茶色 白色粒 良土 粘性あり c: 暗灰褐色 e: 良好 硬質 ※備前の可能性も有
9-5	1面土坑19	山茶碗	底部小片	—	5.4	[1.4]	a: 轆轤整形 b: 灰白色 黒色粒 白色粒 礫片 やや粗胎 c: 灰白色 e: 良好 f: 内底面磨耗・テ痕・尾張型(型式不明)
9-6	1面土坑21	かわらけ	口縁4/7 ~底部2/3	7.0	4.6	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
9-7	1面土坑21	かわらけ	口縁3/8 ~底部2/5	(7.2)	(5.4)	1.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 白色粒 黒色粒 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
9-8	1面土坑21	かわらけ	口縁~底部 1/3	(7.2)	(5.4)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 白色粒 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
9-9	1面土坑21	常滑 甕	胴部片	—	—	[6.0]	a: 輪積み b: 灰橙色 白色粒 黒色粒 長石粒 礫片 c: 茶色 e: 良好 f: 外面に格子状の叩き目あり

表3 遺物観察表(1面面上・1面構成土)

() = 復元値 [] = 遺存値

指図 番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法 (cm)			観察項目
				口径	底径	器高	
10-1	1面面上	かわらけ	口縁3/5 ~底部2/3	7.8	5.8	1.75	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
10-2	1面面上	かわらけ	口縁1/4 ~底部2/5	(8.0)	(6.2)	1.7	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
10-3	1面面上	かわらけ	口縁1/3 ~底部1/2	(12.0)	(6.0)	3.1	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
10-4	1面面上	かわらけ	口縁一部 ~底部3/7	(12.6)	(7.4)	3.3	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底 ^テ b: 微砂 金雲母 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
10-5	1面面上	鉄製 釣針	完形	長(8.7)	幅0.8	厚0.4	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重10.4g
10-6	1面面上	鉄製 釘	完形	長5.9	幅0.4	厚0.3	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重4.0g
10-7	1面面上	鉄製 釘	完形	長3.9	幅0.3	厚0.25	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重1.9g
10-8	1面面上	鉄製 釘	下部欠損	長[4.3]	幅0.5	厚0.4	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重4.3g
10-9	1面構成土	銅銭	完形	外径2.5	内径1.9 孔径0.7	厚0.1	f: 判別不能

表4 遺物観察表(古代竪穴2出土)①

() = 復元値 [] = 遺存値

挿図 番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法 (cm)				観察項目	
				口径	底径	器高	内底径	a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考	
15-1	カマド	土師器 相模型 坏	略完形	12.6	8.0	4.3	—	b: 砂粒 金雲母 赤色粒 c: 淡橙色 e: 良好 硬質	
15-2	覆土	土師器 相模型 坏	口縁部 1/3 ~ 底部 1/4	(12.6)	(8.0)	3.7	—	b: 砂粒 赤色粒 c: 橙色 e: 良好 硬質 f: 一部煤付着	
15-3	覆土	土師器 相模型 坏	口縁部 1/4 ~ 底部 2/3	(12.0)	(5.6)	4.1	—	b: 砂粒、赤色粒、白色粒 c: 橙色 e: 良好 f: 内面に粘土紐痕	
15-4	覆土	土師器 相模型 坏	口縁部 1/4 ~ 底部略完形	(11.4)	6.6	3.6	—	b: 砂粒 金雲母 赤色粒 海綿骨針 c: 淡橙色 e: 良好 硬質 f: 一部火を受けて黒変	
15-5	覆土	ロクロ土師器 坏	底部 1/2	—	(6.7)	[2.2]	—	a: 底部外面回転糸切り痕 b: 砂粒、金雲母、白色粒、海綿骨針 c: 赤褐色 e: 良好 硬質 f: 内面に粘土紐痕	
15-6	カマド	ロクロ土師器 皿	口縁部 1/8 ~ 底部 1/8	(13.4)	(4.3)	(2.2)	—	a: 底部糸切り後ヘラナデか? b: 砂粒 良土 c: 淡橙色 e: 良好 硬質 f: 復元径は参考値	
15-7	覆土	内黒土器 碗 or 坏	口縁部 1/8	—	—	[3.3]	—	a: 内面黒色処理 + 暗文 b: 砂粒、赤色粒 c: 外面: 赤褐色、内面: 黒色 e: 良好 硬質 f: 甲斐など中部地方の製品か	
15-8	覆土	須恵器 坏蓋	口縁部 1/4 ~ 天井部の一部	(15.8)	—	[2.3]	—	a: 内外面ナデ b: 砂粒、白色粒、角閃石、海綿骨針 c: 灰~黒灰色 e: 良好 硬質 f: 外面の一部に煤付着。南比企産。9 と同一個体か	
15-9	覆土	須恵器 坏蓋	口縁部 1/4 ~ 天井部の一部	(16.0)	—	[2.0]	—	a: 内外面ナデ b: 砂粒、白色粒、海綿骨針、小石粒 c: 青灰色 e: 良好 硬質 f: 南比企産。一部に煤付着。8 と同一個体か	
15-10	カマド	須恵器 坏	口縁部 2/3 ~ 底部完形	11.6	5.3	3.2 ~ 3.8	5.1	a: 底部外面回転糸切り 底部脇ヘラケズリ 底面内面に渦巻状痕跡 b: 砂粒 赤色粒 白色粒 c: 青灰色~灰褐色 e: 良好 硬質 f: 東金子産	
15-11	カマド	須恵器 坏	口縁部 1/2 ~ 底部完形	(11.2)	5.1	3.3	5.7	a: 底部外面回転糸切り b: 赤色粒 白色粒 c: 青灰色~灰褐色 e: 良好 硬質 f: 粘土板底部に粘土紐巻き付けか。北武蔵産か	
15-12	P-2	須恵器 坏	口縁部 1/4 ~ 底部完形	11.3	5.3	3.9	5.7	a: 底部回転糸切り b: 砂粒 海綿骨針 c: 青灰色 e: 良好 硬質 f: 南比企産	
15-13	覆土	須恵器 坏	口縁部 1/4 ~ 底部 1/3	(13.2)	(6.6)	4.25	—	a: 底部外面回転糸切り b: 白色粒、角閃石、海綿骨針、泥岩粒 c: 灰色 e: 良好 硬質 f: 口縁部に煤付着	
15-14	覆土	須恵器 坏	口縁部 1/4 ~ 底部 1/3	(12.5)	—	[3.8]	—	a: 底部外面回転糸切り b: 砂粒、白色粒、赤色粒、海綿骨針 c: 灰色 e: 良好 硬質	
15-15	覆土	須恵器 坏	口縁部 1/4 ~ 底部 1/2	(12.7)	(6.4)	[3.1]	—	a: 底部外面回転糸切り b: 砂粒、金雲母、白色、角閃石 c: 白灰色 e: やや良好 軟質 f: 一部煤付着 中世山茶碗の可能性あり	
15-16	カマド	土師器 相模型 甗	口縁部 1/4	(23.0)	—	[8.1]	—	a: 内外面ナデ b: 砂粒、金雲母、赤色粒、角閃石、海綿骨針 1本、 小石粒 c: 黄褐色 e: 良好 f: 一部に煤付着	
15-17	カマド	土師器 三浦型 甗	口縁部 1/4	(24.4)	—	[15.5]	—	a: 口唇部ヘラによる面取り b: 砂粒、赤色粒、白色粒、角閃石、石英? c: 橙色 e: 良好 f: 内面の一部に黒色の付着物、不明付着物、外面の剥 落顕著	
15-18	覆土	土師器 三浦型 甗	口縁部小片	(22.6)	—	[6.8]	—	a: 口唇部面取り 口縁部と胴部の接合部分ヘラナデ 胴部ナデ? 外面の 剥落顕著 b: 砂粒 赤色粒 白色粒 角閃石 粗土 c: 淡褐色 e: やや良好 軟 質	
15-19	覆土	土師器 三浦型 甗	底部完形	—	7.8	[9.9]	—	a: 内面刷毛ナデ、ヘラ痕 b: 砂粒 金雲母 角閃石 c: 灰褐色 e: 不良 f: 被熱のため底部外面の器表剥落。一部煤付着	
15-20	覆土	土師器 三浦型 甗	底部完形	—	7.1 ~ 7.5	[5.2]	—	a: 底部外面木葉痕 胴部ヘラケズリ後ナデ? 内面ナデ b: 砂粒 金雲母 角閃石 c: 赤褐色 e: 良好	
15-21	カマド	土師器 三浦型 甗	口縁部小片	—	—	[8.0]	—	b: 微砂、赤色粒、白色粒、角閃石、海綿骨針、粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 一部に煤付着。器表の剥落顕著	
15-22	覆土	土師器 甗	口縁部小片	—	—	[2.9]	—	a: 胴部外面タテハケ、内面ヨコハケ b: 砂粒 金雲母 白色粒 角閃石 粗 土 c: 赤褐色~黒褐色 e: 良好 f: 古墳時代?	
15-23	カマド	土師器 武蔵型 台付甗	口縁部 1/8 ~ 底部略完形	(15.0)	7.9	19.4	—	a: 口唇部ヘラの押圧痕? b: 砂粒 金雲母 白色粒 c: 橙褐色 e: 良好 硬質 f: 内外面黒変	
15-24	カマド	土師器 武蔵型 甗	口縁略完形~ 胴部 2/3	14.2	—	[10.2]	—	b: 砂粒 金雲母 角閃石 c: 橙色 e: 良好 硬質	
15-25	カマド他	土師器 武蔵型 甗	口縁部 1/2 ~ 胴部 1/8	(14.8)	—	[11.0]	—	b: 金雲母 白色粒 海綿骨針 c: 赤褐色 e: 良好 f: 外面の一部黒変	
16-26	カマド	土師器 武蔵型 甗	口縁部 1/4	(15.4)	—	[7.1]	—	b: 砂粒 金雲母 角閃石 c: 橙褐色 e: 良好 硬質 f: 外面の一部黒変	
16-27	覆土	土師器 武蔵型 甗	口縁部 1/2	(15.2)	—	[8.0]	—	b: 砂粒 赤色粒 白色粒 角閃石 c: 褐色 e: 良好 硬質	
16-28	カマド	土師器 武蔵型 甗	口縁部 1/3	(11.0)	—	[7.3]	—	b: 金雲母 白色粒 c: 淡褐色 e: 良好 f: 外面の一部に煤付着	
16-29	カマド	土師器 武蔵型 甗	口縁部 1/4 ~ 胴部 1/4	(22.2)	—	[17.2]	—	b: 砂粒 赤色粒 角閃石 c: 橙色 e: 良好 硬質 f: 内面に白色の付着物	
16-30	覆土	土師器 武蔵型 甗	口縁部 7/8 ~ 胴部 1/8	16.9	—	[9.0]	—	b: 砂粒 金雲母 白色粒 海面骨針 c: 赤褐色 e: 良好 硬質 f: 内面の一部に 黒色の付着物	
16-31	覆土	土師器 武蔵型 甗	口縁部 1/4 ~ 胴部 1/4	(19.8)	—	[15.0]	—	b: 砂粒 金雲母 白色粒 c: 赤褐色 e: 良好 f: 内面に黒色の付着物あり	

表4 遺物観察表(遺物観察表(古代竪穴2出土)②)

() = 復元値 [] = 遺存値

挿図 番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法 (cm)				観察項目 a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
				口径	底径	器高	内底径	
16-32	カマド	土師器 武蔵型 甗	口縁部 1/2	(20.0)	—	[10.6]	—	b: 砂粒 金雲母 c: 橙色 e: 良好 硬質 f:
16-33	カマド	土師器 武蔵型 甗	口縁部 1/2	(18.4)	—	[8.9]	—	b: 砂粒 金雲母 角閃石 c: 橙色 e: 良好 硬質
16-34	覆土	土師器 武蔵型 甗	口縁部 1/4	(21.8)	—	[8.4]	—	b: 砂粒 角閃石 金雲母 海面骨針 c: 赤褐色 e: 良好 硬質 f: 内面の一部に 白色の付着物
16-35	カマド他	土師器 武蔵型 甗	胴部 1/2 ~ 底部完形	—	3.5 ~ 4.0	[12.3]	—	b: 砂粒 金雲母 銀色粒 赤色粒 c: 淡橙色 e: 良好 f: 底部内面に黒色の付 着物、外面に煤付着
16-36	カマド	土師器 武蔵型 甗	胴部 1/4 ~ 底部 2/3	—	4.6	[9.7]	—	b: 砂粒 c: 橙褐色 e: 良好 f: 内面に白い付着物有り
16-37	カマド	土師器 武蔵型 甗	胴部一部~ 底部 1/2	—	4.4	[8.6]	—	b: 赤色粒 小石粒 c: 赤褐色 e: 良好
17-38	覆土	土製品 鞆 羽口	略完形	長 11.0	最大径 7.4	孔径 2.6	重 437.1g	a: 外面へラで面取り状の整形 b: 砂粒 雲母 白色粒 角閃石 小石粒 粗土 c: 赤褐色 e: 良好 f: カマド構築材として再利用か。
17-39	覆土	鉄製品 用途不明	完形?	長 15.2	幅 0.9	厚 0.6	—	f: 全体に錆が付着
17-40	覆土	石製品 砥石	1/2 以下	長 [3.4]	幅 [3.7]	厚 [1.5]	—	a: 表裏二面を使用 b: 流紋岩質凝灰岩 c: 淡黄色 f: 中世の上野産中砥(砥 沢) に似る

表5 遺物観察表(Ⅱ区トレンチ上層)

() = 復元値 [] = 遺存値

挿図 番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法 (cm)			観察項目 a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
				口径	底径	器高	
18-1	Ⅱ区トレン チ上層	かわらけ	口縁 1/6 ~底部 1/5	(8.2)	(6.6)	1.4	a: 轆轤 外底糸切痕 b: 微砂 雲母 白色粒 黒色粒 海綿骨針 粗胎 c: 橙色 e: 良好
18-2	Ⅱ区トレン チ上層	かわらけ	口縁 1/6 ~底部 1/4	(11.8)	(7.0)	2.9	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ナ ^o b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 海綿骨 針 泥岩粒 良土 c: 橙色 e: 良好
18-3	Ⅱ区トレン チ上層	土器質 火鉢	口縁部小片	—	—	[4.7]	a: 輪積み 外面口縁部下ヨ ^o ナ ^o b: 微砂 礫片 c: 灰橙色 e: 良好 f: 口縁部及び 外面は二次焼成を受けたか I b 類?
18-4	Ⅱ区トレン チ上層	土錘	完形	長 4.5	幅 3.2	厚 3.1	b: 雲母 黒色粒 白色粒 良土 c: 灰橙色 e: 良好
18-5	Ⅱ区トレン チ上層	土錘	完形	長 4.8	幅 3.4	厚 3.3	b: 雲母 黒色粒 白色粒 良土 c: 灰橙色 e: 良好
18-6	Ⅱ区トレン チ上層	土錘	完形	長 4.8	幅 3.6	厚 3.5	b: 雲母 黒色粒 白色粒 良土 c: 灰橙色 e: 良好
18-7	Ⅱ区トレン チ上層	土錘	完形	長 5.1	幅 3.4	厚 2.9	b: 雲母 黒色粒 白色粒 良土 c: 灰橙色 e: 良好
18-8	Ⅱ区トレン チ上層	土錘	完形	長 5.4	幅 3.4	厚 3.5	b: 雲母 黒色粒 白色粒 良土 c: 灰橙色 e: 良好

表6 遺物観察表(表土)①

() = 復元値 [] = 遺存値

指図番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法 (cm)			観察項目 a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
				口径	底径	器高	
19-1	表土	かわらけ	口縁一部 ～底部 1/5	(6.6)	(4.6)	1.4	a: 轆轤 外底糸切痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 白色粒 赤色粒 黒色粒 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-2	表土	かわらけ	口縁一部 ～底部 1/3	(7.0)	(4.4)	1.7	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 良土 c: 橙色 e: 良好
19-3	表土	かわらけ	口縁 1/5 ～底部 2/7	(7.0)	(4.6)	1.4	a: 轆轤 外底糸切痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 金雲母 白色粒 黒色粒 海綿骨針 良土 c: 淡橙色 e: 良好
19-4	表土	かわらけ	口縁 2/7 ～底部 1/3	(7.4)	(4.8)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 黒色粒 海綿骨針 赤色粒 良土 c: 淡橙色 e: 良好
19-5	表土	かわらけ	口縁 2/7 ～底部 1/3	(7.4)	(5.0)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-6	表土	かわらけ	口縁 1/16 ～底部 1/4	(7.4)	(5.4)	1.55	a: 轆轤 外底糸切痕 内底片 [°] b: 微砂 赤色粒 黒色粒 雲母 海綿骨針 白色粒 良土 c: 橙色 e: 良好
19-7	表土	かわらけ	口縁一部 ～底部 1/6	(7.4)	(5.4)	1.85	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好
19-8	表土	かわらけ	完形	7.5	4.8	2.1	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-9	表土	かわらけ	口縁 1/6 ～底部 1/4	(7.6)	(4.2)	1.65	a: 轆轤 外底糸切痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 やや良土 c: 淡黄橙色 e: 良好
19-10	表土	かわらけ	口縁 1/7 ～底部 3/5	(7.6)	4.6	2.05	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-11	表土	かわらけ	口縁一部 ～底部 2/5	(7.6)	(4.8)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 雲母 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 灰橙色 e: 良好
19-12	表土	かわらけ	口縁～底部 1/5	(7.6)	(4.8)	1.9	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-13	表土	かわらけ	口縁 1/6 ～底部 1/7	(7.6)	(5.0)	1.8	a: 轆轤 外底糸切痕 内底片 [°] b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好
19-14	表土	かわらけ	口縁 1/7 ～底部 3/5	(7.6)	(5.0)	1.9	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 灰橙色 e: 良好
19-15	表土	かわらけ	口縁一部 ～底部 1/3	(7.6)	(5.2)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-16	表土	かわらけ	口縁 1/7 ～底部 1/3	(7.6)	(5.6)	1.8	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 小石粒 粗胎 c: 淡灰黄色 e: やや不良
19-17	表土	かわらけ	口縁～底部 1/6	(7.6)	(5.8)	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 白色粒 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 粗胎 c: 淡橙色 e: やや良好 f: 内底面に一条の沈線
19-18	表土	かわらけ	口縁 1/5 ～底部 1/3	(7.7)	(5.0)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 赤色粒 黒色粒 白色粒 海綿骨針 雲母 粗胎 c: 赤橙色 e: 良好
19-19	表土	かわらけ	口縁～底部 2/5	(7.7)	(5.2)	1.55	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 小石 やや粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好
19-20	表土	かわらけ	口縁 1/5 ～底部 1/4	(7.8)	(4.8)	1.6	a: 轆轤 外底糸切痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-21	表土	かわらけ	口縁 4/7 ～底部全	(7.8)	5.0	1.7	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 灰橙色 e: 良好
19-22	表土	かわらけ	口縁 1/10 ～底部 1/4	(7.8)	(5.0)	1.9	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好
19-23	表土	かわらけ	口縁 1/5 ～底部 1/3	(7.8)	(5.2)	1.8	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 雲母 小石粒 海綿骨針 やや粗胎 c: 橙色 e: やや不良
19-24	表土	かわらけ	口縁 1/6 ～底部 1/5	(7.8)	(5.6)	1.6	a: 轆轤 外底糸切痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 やや粗胎 c: 灰橙色 e: 良好
19-25	表土	かわらけ	口縁～底部 1/4	(7.8)	(5.8)	1.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 良土 c: 淡橙色 e: 良好
19-26	表土	かわらけ	口縁 3/8 ～底部 1/3	(7.8)	(5.8)	1.6	a: 轆轤 外底糸切痕 内底片 [°] b: 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 小土粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-27	表土	かわらけ	口縁～底部 1/6	(7.8)	(6.0)	1.8	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好
19-28	表土	かわらけ	口縁 1/8 ～底部 1/5	(7.8)	(6.0)	1.8	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b: 微砂 雲母 白色粒 黒色粒 海綿骨針 粗胎 c: 灰橙色 e: 良好
19-29	表土	かわらけ	口縁 2/3 ～底部全	7.9	5.0	1.9	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-30	表土	かわらけ	口縁 1/3 ～底部全	(8.0)	5.4	1.75	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-31	表土	かわらけ	口縁～底部 1/6	(10.6)	(6.4)	2.8	a: 轆轤 外底糸切痕 内底片 [°] b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 やや良土 c: 橙色 e: 良好
19-32	表土	かわらけ	口縁 6/7 ～底部全	11.0	6.8	3.0	a: 轆轤 外底糸切・スノ状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-33	表土	かわらけ	口縁 1/5 ～底部 2/7	(11.2)	(6.2)	2.8	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-34	表土	かわらけ	口縁 1/5 ～底部 2/7	(11.6)	(7.8)	2.85	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底片 [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好 f: 灯明皿 内面全体～口縁部に薄く煤付着

表6 遺物観察表(表土)②

() = 復元値 [] = 遺存値

指図 番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法 (cm)			観察項目 a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
				口径	底径	器高	
19-35	表土	かわらけ	口縁 1/16 ~底部 1/3	(11.6)	(7.0)	3.55	a: 轆轤 外底糸切痕 内底フ [°] b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡赤橙色 e: 良好
19-36	表土	かわらけ	口縁 1/16 ~底部 1/3	(11.6)	(7.4)	3.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底フ [°] b: 微砂 赤色粒 黒色粒 雲母 良土 c: 橙色 e: 良好
19-37	表土	かわらけ	口縁一部 ~底部 1/4	(11.7)	(7.3)	2.95	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底フ [°] b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好
19-38	表土	かわらけ	口縁 1/16 ~底部 1/2	(11.7)	7.4	3.05	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底フ [°] b: 微砂 赤色粒 黒色粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-39	表土	かわらけ	口縁一部 ~底部 1/6	(11.8)	(7.4)	3.2	a: 轆轤 外底糸切痕 内底フ [°] b: 微砂 雲母 白色粒 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-40	表土	かわらけ	口縁 1/9 ~底部 1/4	(11.8)	(8.0)	2.9	a: 轆轤 外底糸切痕 内底フ [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 やや粗胎 c: 灰橙色 e: 良好
19-41	表土	かわらけ	口縁 1/2 ~底部 2/3	12.2	7.5	3.35	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底フ [°] b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 橙色 e: 良好 f: 黒胎芯
19-42	表土	かわらけ	口縁 1/2 ~底部 3/5	(12.2)	(7.6)	3.2	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底フ [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 灰橙色 e: 良好
19-43	表土	かわらけ	一部欠損	12.2	7.8	3.1	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底フ [°] b: 雲母 赤色粒 黒色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-44	表土	かわらけ	口縁 1/2 ~底部 3/5	(12.4)	(7.4)	3.1	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底フ [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-45	表土	かわらけ	口縁一部 ~底部 2/7	(12.4)	(8.0)	3.2	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底フ [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-46	表土	かわらけ	口縁一部 ~底部 2/5	(12.6)	(8.0)	3.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底フ [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 橙色 e: やや不良 黒胎芯
19-47	表土	かわらけ	口縁 1/16 ~底部 1/5	(12.5)	(7.4)	3.3	a: 轆轤 外底糸切痕 内底フ [°] b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-48	表土	かわらけ	口縁 1/5 ~底部 1/4	(12.7)	(7.0)	3.2	a: 轆轤 外底糸切痕 内底フ [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-49	表土	かわらけ	口縁 4/7 ~底部全	13.1	7.9	3.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底フ [°] b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒多量 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-50	表土	かわらけ	口縁~底部 1/7	(13.2)	(7.8)	3.85	a: 轆轤 外底糸切痕 内底フ [°] b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 雲母 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-51	表土	かわらけ	口縁 1/6 ~底部 1/5	(13.8)	(8.0)	3.5	a: 轆轤 外底糸切痕 内底フ [°] b: 雲母 赤色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや良土 c: 橙色 e: やや不良
19-52	表土	青磁 鎗蓮弁文椀	口縁部小片	—	—	[3.0]	a: 轆轤整形 b: 灰白色 黒色粒 精良緻密土 d: 灰緑色半透明 施釉やや厚い e: 堅緻
19-53	表土	青磁 鎗蓮弁文椀	口縁部小片	—	—	[3.3]	b: 灰色 黒色粒極少量 精良緻密土 d: 灰緑色半透明
19-54	表土	青磁 鎗蓮弁文椀	口縁部小片	—	—	[3.8]	b: 灰白色 黒色微粒 精良緻密土 d: 灰緑色半透明 施釉薄い e: 堅緻
19-55	表土	青磁 鎗蓮弁文椀	口縁部小片	—	—	[5.4]	b: 黄灰色 黒色微粒 精良緻密土 d: 黄緑灰色不透明 e: 堅緻
19-56	表土	白磁 口兀皿	口縁~底部 1/4	(8.8)	(7.9)	1.75	b: 灰白色 黒色粒 緻密 d: 乳白色半透明 口縁部露胎
19-57	表土	白磁 口兀碗	口縁部小片	(14.2)	—	[4.9]	b: 灰白色 黒色粒 緻密 d: 乳白色半透明 口縁部露胎
19-58	表土	青白磁 梅瓶	口縁部小片	(3.6)	—	[2.3]	b: 白色 精良緻密土 d: 水青色不透明
19-59	表土	青白磁 梅瓶	底部小片	—	(7.6)	[4.0]	a: 削り出し高台 b: 灰白色 黒色粒 精良緻密土 d: 水青色透明 貫入 高台露胎 f: 外面に沈線あり
19-60	表土	瀬戸 壺類	底部小片 高台欠損	—	—	[4.8]	a: 内面ヨリ [°] b: 灰色 黒色粒 c: 灰色 d: 緑灰色透明 貫入 外面のみ施釉 f: 外面に沈線 外底部に高台を付けるため [°] で [°] ミを入れてある
19-61	表土	瀬戸 折縁深皿	口縁部小片	—	—	[1.5]	b: 灰黄色 白色粒 礫片 良土 d: 二次焼成を受け不明 f: 前IV~中IIか
19-62	表土	瀬戸 直縁大皿か	底部小片	—	—	[2.1]	a: 轆轤成形 b: 灰黄色 白色粒 良土 d: 鉄釉 e: 良好 f: 中世後期以降か
19-63	表土	瀬戸 卸皿	底部片	—	(10.2)	[1.0]	a: 轆轤成形 b: 黄灰色 黒色粒 白色粒 小石粒 良土 e: 良好 硬質 f: 割れ口の一部に煤付着
19-64	表土	瀬戸 器種不明	底部小片	—	—	[2.6]	a: 外底糸切 b: 淡黄色 黒色微粒 良土 d: 灰緑色半透明 e: 良好

表6 遺物観察表(表土)③

() = 復元値 [] = 遺存値

指図番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法 (cm)			観察項目 a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
				口径	底径	器高	
20-65	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	[3.0]	a: 輪積み内外面ヨコナテ [°] b: 灰色 長石粒 小石 c: 灰色
20-66	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	[3.2]	a: 輪積み 轆轤整形 b: 灰褐色 白色粒 黒色粒 小石粒 石英粒 長石粒 粗胎 e: 良好
20-67	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	[3.3]	a: 輪積み 轆轤整形 b: 白色粒・石英粒・長石粒を多く含む 良土 c: 灰色 e: 良好
20-68	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	[5.2]	a: 輪積み 轆轤整形 b: 灰色 白色粒 黒色粒 石英粒 長石粒 礫 粗胎 c: 灰色 e: 良好 f: 内面磨滅
20-69	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片	—	—	[6.5]	a: 輪積み内外面ヨコナテ [°] b: 灰色 黒色粒 長石粒 小石粒 c: 灰色
20-70	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部小片 高台欠損	—	—	[2.8]	a: 輪積み 轆轤整形 回転ヘラズ ^リ b: 灰色 白色粒 黒色粒 礫片 良土 c: 灰色 e: 良好
20-71	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部小片	—	—	[3.0]	a: 輪積み 轆轤整形 b: 灰色 石英粒 長石粒 礫 良土 c: 灰色 e: 良好 f: 内面磨耗
20-72	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部小片	—	—	[3.6]	a: 輪積み 轆轤整形 回転ヘラズ ^リ b: 灰色 石英粒 長石粒 礫片 良土 c: 暗灰色 e: 良好 f: 内面磨耗
20-73	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部小片	—	—	[4.0]	a: 輪積み b: 灰色 長石粒 小石粒 白色粒 c: 灰色 f: 外面にヘラ状工具によるヨコナテ [°] 内面に灰緑色の自然降灰が薄く掛かる
20-74	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片	—	(9.4)	[4.8]	a: 輪積み 轆轤整形 b: 灰色 白色粒 黒色粒 石英粒 長石粒 礫片 良土 e: 良好 f: 外面下位に回転ヘラ ^リ 内面に緑灰白色の自然降灰・下位に重ね焼き痕
20-75	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片	—	(9.6)	[4.4]	a: 輪積み 轆轤整形 b: 灰色 白色粒 黒色粒 石英 礫 良土 c: 灰色 e: 良好 f: 内底面に重ね焼き痕 内面磨耗 台形高台の古手 (型式不明)
20-76	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部小片	—	(12.0)	[2.3]	a: 輪積み 轆轤整形 b: 灰色 白色粒 黒色粒 石英粒 長石粒 礫 良土 e: 良好
20-77	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片	—	(13.8)	[4.4]	a: 輪積み 轆轤整形 回転ヘラズ ^リ b: 灰褐色 長石粒 石英粒 礫片 やや良土 c: 茶色～茶褐色 e: 良好 f: 外底部一部に自然釉かかる
20-78	表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	[3.4]	a: 輪積み内外面ヨコナテ [°] b: 暗灰色 白色粒 長石粒 小石粒 c: 茶褐色
20-79	表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	[4.0]	a: 輪積み 口縁部ナテ [°] b: 暗灰色 白色粒 長石粒 礫片 良土 c: 赤褐色 e: 良好 f: 内面磨耗
20-80	表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	[5.7]	a: 輪積み 内面～口縁部下までヨコナテ [°] b: 橙色 小石粒 c: 赤褐色 f: 6b～7型式
20-81	表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	[6.4]	a: 輪積み 口縁部ナテ [°] b: 灰色 白色粒 黒色粒 長石粒 良土 c: 内外面共に赤褐色 口縁部～内面に黄緑灰色の自然降灰 e: 良好 硬質 f: 中野編年8～9型式
20-82	表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部小片	—	—	[4.4]	a: 輪積み 外側面下位にヘラ状工具による調整痕 b: 暗灰色 微砂 石英粒 長石粒 礫片 やや粗胎 c: 暗褐色 e: 良好 f: 内面磨耗
20-83	表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部小片	—	—	[5.2]	a: 輪積み内外面ヨコナテ [°] 外面工具ナテ [°] 外底砂目痕 b: 灰色 白色粒 長石粒 小石粒 c: 茶褐色 内面に薄く緑灰色の自然降灰 f: 内面磨滅
20-84	表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部小片	—	—	[7.4]	a: 輪積み b: 暗灰色 白色粒 黒色粒 石英粒 長石粒 礫片 粗胎 c: 茶色 e: 良好 f: 内面磨耗
20-85	表土	常滑 浅鉢 or 鉢	口縁部片	—	—	[4.3]	b: 褐色 石英粒・長石粒・礫片をやや多く含む やや良土 c: 暗褐色 e: 良好 f: 外側面に工具による押印模様あり
20-86	表土	常滑 甕	口縁部小片	—	—	[3.6]	a: 輪積み b: 灰色 白色粒 長石粒 小石粒 c: 暗茶褐色の自然降灰が縁帯～内面に薄く掛かる f: 6a 型式
20-87	表土	常滑 甕	肩部片	—	—	[11.4]	a: 輪積み b: 暗灰色 白色粒 黒色粒 石英粒 長石粒 礫 粗胎 e: 良好 f: 内面に薄く指頭痕・一部黄灰色の付着物 器表に茶褐色自然降灰・格子目の叩き
20-88	表土	常滑 甕	胴部片	—	—	[9.6]	a: 輪積み b: 暗灰色 白色粒 黒色粒 石英粒 長石粒 礫片 粗胎 e: 良好 f: 内面に薄く指頭痕 器表に茶褐色自然降灰・格子目の叩き
20-89	表土	渥美 甕	頸部小片	—	—	[6.0]	a: 輪積み b: 暗灰色 精良土 c: 黒灰色 口縁部内側に黄緑灰色の自然降灰 d: 口縁部～頸部刷毛塗り e: 良好 硬質
20-90	表土	山茶碗 東濃	口縁部小片	(12.0)	—	[2.6]	a: 内外面ヨコナテ [°] 口縁部シナテ [°] b: 灰色 白色粒 緻密 c: 灰色 d: 口縁部～内面に暗緑灰色の自然降灰が極少量かかる
20-91	表土	山茶碗 尾張型 常滑	底部小片	—	—	[1.8]	a: 輪積み 轆轤整形 外底糸切 b: 白色粒 黒色粒 礫片 良土 c: 灰色 e: 良好
20-92	表土	土製品 羽口	小片	(7.0)	孔径 (3.0)	[5.3]	b: 微砂 白色粒 黒色粒 c: 黄褐色 e: 良好 f: 黒色～暗灰緑色のスラグが一部付着 外面全体に煤付着
20-93	表土	瓦器質 火鉢	口縁部小片	—	—	[4.8]	b: 暗灰色～灰褐色 白色粒 礫片 粗胎 c: 灰褐色 (二次焼成の為か?) 内面黒色処理 e: 良好 f: 器表面にガキ処理 輪花形
20-94	表土	瓦器質 火鉢	口縁部片	—	—	[9.0]	a: 輪積み b: 灰色 小石粒 敵片 やや粗胎 c: 灰色 e: 良好 f: 器表面に菊花文(16弁)のスタンプあり ヘラ ^リ 痕 河野分類Ⅲ類
20-95	表土	土器質 火鉢	底部小片	—	—	[5.2]	a: 内外面ヨコナテ [°] 外底砂目痕 b: 橙色 白色粒 黒色粒 小石粒 c: 橙色

表6 遺物観察表(表土)④

() = 復元値 [] = 遺存値

指図 番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法 (cm)			観察項目
				口径	底径	器高	a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
20-96	表土	瓦質?系の脚	脚部片	—	(13.2)	[3.5]	b: 灰橙色 赤色粒 黒色粒 粗胎 c: 淡白色 e: 良好 f: 内面及び器表上部に煤付着
20-97	表土	土錘	半破損	長 4.0	幅 3.5	厚 [1.2]	b: 雲母 黒色粒 白色粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
20-98	表土	砥石 (仕上砥)	下部・裏面 破損	長 [3.5]	幅 3.0	厚 [0.9]	b: 頁岩 (流紋岩質細流凝灰岩) c: 橙色 f: 鳴滝産 上部部に切り出し痕 砥面 1 面磨滅 裏面は剥離している
20-99	表土	砥石 (仕上砥)	下部破損	長 [5.2]	幅 [4.65]	厚 [0.5]	b: 不明 c: 暗赤橙色 f: 産地不明 砥面 2 面磨滅
21-100	表土	鉄製 釘	下部破損	長 [2.5]	幅 0.4	厚 0.2	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 1.4g
21-101	表土	鉄製 釘	下部破損	長 [2.6]	幅 0.4	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 1.4g
21-102	表土	鉄製 釘	完形	長 4.2	幅 0.5	厚 0.4	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 3.5g
21-103	表土	鉄製 釘	下部破損	長 [4.2]	幅 0.4	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 3.3g
21-104	表土	鉄製 釘	完形	長 4.4	幅 0.4	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 2.1g
21-105	表土	鉄製 釘	一部欠損	長 4.7	幅 0.3	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 1.6g
21-106	表土	鉄製 釘	一部欠損	長 4.7	幅 0.4	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 2.3g
21-107	表土	鉄製 釘	完形	長 4.8	幅 0.4	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 2.1g
21-108	表土	鉄製 釘	完形	長 4.9	幅 0.35	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 2.4g
21-109	表土	鉄製 釘	端部欠損	長 [5.0]	幅 0.6	厚 0.5	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 6.2g
21-110	表土	鉄製 釘	完形	長 5.1	幅 0.5	厚 0.4	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 3.8g
21-111	表土	鉄製 釘	完形	長 5.2	幅 0.45	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 3.5g
21-112	表土	鉄製 釘	一部欠損	長 5.2	幅 0.6	厚 0.4	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 5.9g
21-113	表土	鉄製 釘	上部破損	長 [5.5]	幅 0.5	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 3.2g
21-114	表土	鉄製 釘	下部破損	長 [6.1]	幅 0.8	厚 0.8	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 28.0g
21-115	表土	鉄製 釘	完形	長 6.3	幅 0.5	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 3.1g
21-116	表土	鉄製 釘	完形	長 6.4	幅 0.5	厚 0.4	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 5.4g
21-117	表土	鉄製 釘	完形	長 6.6	幅 0.2	厚 0.2	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 2.3g
21-118	表土	鉄製 釘	完形	長 6.8	幅 0.4	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 5.9g、全体に錆付着
21-119	表土	鉄製 釘	完形	長 7.1	幅 0.8	厚 0.5	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 9.4g
21-120	表土	鉄製 釘	完形	長 7.5	幅 0.55	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 6.0g
21-121	表土	鉄製 釘	完形	長 7.7	幅 0.7	厚 0.4	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 7.5g
21-122	表土	鉄製 釘	完形	長 7.8	幅 0.5	厚 0.35	a: 胴部四角形に鍛造 f: 重 4.4g
21-123	表土	不明鉄製品	一部欠損	長 [7.0]	幅 (1.8)	厚 (1.1)	a: 頭頂部に穴が開けられている f: 重 13.0g、全体に錆付着
21-124	表土	骨製品	完形	長 2.8	幅 1.0	厚 0.25	
21-125	表土	骨製品	完形	長 2.7	幅 3.4	厚 1.4	f: φ 0.2cm の穴が 3 箇所あり中 1 つは貫通していない
21-126	表土	骨製品	下部破損	長 [8.4]	幅 1.1	厚 0.65	f: 上部部に茶色の付着物
21-127	表土	骨製品	完形	長 4.7	幅 2.3	厚 0.6	f: 加工途中か?
21-128	表土	骨製品	完形	長 2.9	幅 3.4	厚 0.3	f: 半円状に加工
21-129	表土	骨製品	完形	長 11.8	幅 2.2	厚 2.1	f: はっきりとした加工痕は認められないが頭頂部にうすく削った様な痕が残る
21-130	表土	骨製品	完形	長 15.0	幅 4.4	厚 4.2 ~ 2.8	f: 下部部にノコ状工具による切断痕 上部はぼ 1/4 を残し内外面共に研磨され滑らかに加工されている
21-131	表土	骨製品	完形	長 5.3	幅 3.7	厚 2.8	f: 両端断面にノコ痕?あり 内外面共に研磨され表面はなめらかになっている
21-132	表土	須恵器 坏	口縁部小片	—	—	[3.2]	a: 轆轤整形 b: 灰色 黒色粒 白色粒 礫片 海绵骨針 土 e: 良好

表7 貝の分類表

		生息場所	表土	1面遺構	1面面上	1面構成土	I区深堀トレンチ	II区トレンチ上層	II区トレンチ下層	古代遺構
岩礁	センジュガイモドキ	岩礁		1						
	ナミノコガイ	潮間帯砂浜の波打ち際							2	2
	キイロダカラ	潮間帯の岩礁							1	
	クボガイ	潮間帯の岩礁		3					1	2
	イシダタミ	潮間帯の岩礁、転石		1						
	スガイ	潮間帯の岩礁、転石	7	7						
	バテイラ	潮間帯～水深10m位の岩礁	2	3					4	1
	トコブシ	潮間帯から水深10m位の岩礁	1							
	オオヘビガイ	潮間帯～水深20m位の岩礁、転石	1	2						
	ウチムラサキ	潮間帯～水深20m位の岩礁の間の砂礫地								1
	サザエ	潮間帯～水深50m位の岩礁	29	36	2		1		24	27
アワビ		4	13			3		3		
内湾	オオノガイ	内湾、干潟・潮間帯の砂泥地、泥地							2	7
	オキシジミガイ	内湾、干潟・潮間帯～水深20mの砂泥地、泥地		1						
	ハマグリ	内湾・潮間帯～水深10mの砂地、砂泥地	98	114	10			2	9	23
	サルボオ	内湾・潮間帯～水深20mの砂泥地	1							2
	シオフキ	内湾・潮間帯～水深20mの砂地、砂泥地	2	2			1		5	1
	アカニシ	内湾・潮間帯～水深20mの岩礁、砂地、砂泥地	47	18	3	1	6	1	6	2
	カガミガイ	内湾・潮間帯～水深30mの砂地、砂泥地	1	1					5	4
	カキ		1				4		2	1
砂浜	ダンベイキサゴ	潮下帯～水深10m位の砂地	31	36	1		1	1	4	4
	チョウセンハマグリ	潮下帯～水深10m位の砂地	20	138	10	1	5	1	27	64
	バイガイ	潮下帯～水深30m位の砂地、砂泥地	38	10	1			1	1	5
	アズマニシキ	潮下帯～水深50m位の岩礁						1		1
	ベンケイガイ	水深5～20m位の砂地、砂泥地							1	
	マツヤマワスレ	水深5～50m位の砂地	1							
	サトウガイ	水深10～30mの細砂地、外洋性	1			1	1		3	1
	イタヤガイ	水深10～100m位の砂地、砂泥地	1							
	イボキサゴ	潮間帯～水深10m位の砂地	14	26						
	キサゴ	潮間帯～水深10m位の砂地	9	22	1					
	アサリ	潮間帯～水深10mの砂地、砂泥地	5	36					24	113
	オキアサリ								6	10
	オニアサリ	潮間帯～水深5m位の岩礁の間の砂地、砂礫地								1
	ツメタガイ	潮間帯～水深30m位の砂地、砂泥地	4	1					4	3
ウラシマ	水深10～100m位の砂地、砂泥地							1		
汽水域	ヤマトシジミ			2			1		104	64
	シジミ		2						80	2
不明	ヒダリマキマイマイ		4	1					1	1
	イガイ科不明									4
	イタヤガイ科不明									1
	イトマキボラ科不明			1						
	ウミナナ類			3	2				1	
	サトウガイまたはサルボウ1		1							
	タマガイ科									1
	二枚貝不明						2		1	15
	ハボウキガイ科またはイガイ科			1						
	フネガイ類								1	
	巻貝不明									22
	リュウテンサザエ科不明			1	1					
	不明		2				3			
	不明バイ目								1	
	不明フネガイ科								1	

表8 遺物集計表

種別		表土	1面遺構	1面面上	1面構成土	I区深堀 セクション	II区トレンチ 上層	II区トレンチ 下層	古代遺構
かわらけ	糸切り	小205、中35、 大1759	小152、中13、大 613	小18、大97	大1		小2、大25	小2、大30	大9、破片16
	燈明皿	糸切大5	大3						
	穿孔		小1						
舶載 陶磁器	青磁	連弁文碗18、文 様不明小型鉢1	連弁文碗1、器種 不明1				連弁文碗1		
	白磁	口元皿6、口元碗 1、器種不明1	壺1						
	青白磁	梅瓶8、碗1	梅瓶3						
	褐釉	褐釉？3	1				褐釉系統 器 種不明1		
国産 陶磁器	瀬戸	袋物2、瓶子1、 花瓶、器種不明1、 御目皿1、天目茶 碗1、折縁深皿3、 縁袖小皿1、壺1、 鉢？1、壺類1	行平鍋？1、器形 不明1、四耳壺 か？1						
	常滑	甗111、 壺3、浅鉢か？1、 常滑転用品1	甗32、壺2、壺類 1	甗8			甗5	甗3	甗1
	常滑 片口I類	17	7	1				1	
	常滑 片口II類	16	1				1		
	瀬美		甗2						
	備前	片口鉢1、甗1							
	亀山		甗1						
	山茶碗	東濃2、不明5	尾張型2	尾張型1					
不明	1	1							
土製品	火鉢	5、瓦質火鉢4		1			1		
	その他	轆の羽口9、瓦質 の獨台系の脚1、 不明土器片2、土 錘1	轆の羽口3、土鍋 1				土錘5	轆の羽口1	瓦1
石製品	硯	砥石か？1							
	砥石	4							1
	滑石製品		鍋1						
その他	石1、硯の石材 になる可能性の ある石1、土丹3、 火成岩1、石1	焼けた石1、石2、 土丹2、加工痕の ある土丹2、石 1、窯くそ1、炉 壁か？1、軽石1、 土丹3				軽石3	穴あき土丹1	軽石4、石 13、焼けた土 丹176、土丹 28	土丹332、軽石4、 石16
金属製品	釘	26	5	4					
	銭		1		1				
	鉄滓	2	スラグ5						3
	その他	不明鉄製品7	鍵1、不明2				スラグ1	4	不明鉄製品2
骨角製品	加工品	10	筭1				2	1	
木製品	加工 木製品		3						
自然遺物	骨	骨片116、人歯1	51、骨片2	5	4		6	18	23

表 8 遺物集計表

種別	表土	1面遺構	1面上	1面構成土	I区深掘セクション	II区トレンチ上層	II区トレンチ下層	古代遺構
貝	ハマグリ 98、チヨウセンハマグリ 20、アカニシ 47、ダンベイキサゴ 31、イボキサゴ 14、スガイ 7、ツメタガイ 4、ヒダリマキマイ 4、バイガイ 38、サザエ 29、アワビ 4、カガミ貝 1、アサリ 5、シオフキ 2、シジミ 2、サトウガイ またはサルボウ 1、不明 2、オオヘビガイ 1、キサゴ 9、バテイラ 2、イタヤガイ 1、サルボウガイ 1、マツヤマウスレ 1、トコブシ 1、サトウガイ 1	アサリ 36、アカニシ 18、アワビ 13、オオヘビガイ 2、ハマグリ 114、バイガイ 10、サザエ 36、ダンベイキサゴ 36、イボキサゴ 26、キサゴ 22、チヨウセンハマグリ 138、ハボウキガイ科 またはイガイ科 1、カキ 1、イシダタミガイ 1、スガイ 7、センジュガイモドキ 1、クボガイ 3、ウミナナ類 3、シオフキガイ 2、ヤマトシジミ 2、バテイラ 3、リュウテンサザエ科不明 1、イトマキボラ科不明 1、オキシジミガイ 1、ヒダリマキマイ 1、ツメタガイ 1、カガミ貝 1	リュウテンサザエ科不明 1、バイガイ 1、アカニシ 3、サザエ 2、チヨウセンハマグリ 10、ダンベイキサゴ 1、キサゴ 1、ウミナナ類 2、ハマグリ 10	サトウガイ 1、アカニシ 1、チヨウセンハマグリ 1	サトウガイ 1、アカニシ 6、ダンベイキサゴ 1、シオフキ 1、チヨウセンハマグリ 5、二枚貝不明 2、サザエ 1、カキ 4、アワビ 3、不明 3、ヤマトシジミ 1	アカニシ 1、バイガイ 1、ダンベイキサゴ 1、チヨウセンハマグリ 2、アズマニシキ 1	アサリ 24、ヤマトシジミ 104、シジミ 80、チヨウセンハマグリ 27、カキ 2、ダンベイキサゴ 4、バテイラ 4、ヒダリマキマイ 1、ツメタガイ 4、サトウガイ 3、クボガイ 1、アカニシ 6、オオノガイ 2、サザエ 24、シオフキ 5、ハマグリ 9、オキアサリ 6、カガミガイ 5、キロダカラ 1、不明バイ目 1、ウラシマガイ 1、ウミナナ類 1、バイガイ 1、ナミノコガイ 2、フネガイ 1、シオヤガイ 1、不明フネガイ 1、アワビ 3・破片 50、ベンケイガイ 1、二枚貝不明 1	アサリ 113、カガミガイ 4、オオノガイ 6、ヤマトシジミ 64、シジミ 2、サザエ 27、チヨウセンハマグリ 64、ハマグリ 23、二枚貝不明 15、オキアサリ 10、オニアサリ 1、サルボウガイ 2、アズマニシキ 1、バイガイ 5、アカニシ 2、ツメタガイ 3、オオノガイ 1、ウチムラサキ 1、ヒダリマキマイ 1、クボガイ 2、バテイラ 1、ダンベイキサゴ 4、巻貝不明 22、シオフキ 1、サトウガイ 1、アワビ片 25、ナミノコガイ 2、イガイ科不明 4、イタヤガイ科不明 1、カキか？ 1、タマガイ科 1、
近代	播鉢 1、植木鉢 1 瓦 2、磁器 4、ガラス蓋 1	スレート 1				瓦 1		
古代遺物	須恵器甕 15、須恵器壺 10、相模型の前段階の坏 1、相模型壺 10、相模型坏 5、相模型坏 1、三浦型甕 15、蔵型甕 8、武蔵型甕 1、古墳後期くらいの坏 1、古墳時代の坏または鉢 1、古墳前半壺 1、不明土器片 5、不明 2、甕 1	古代？ 1、須恵器甕 4、須恵器(南比企)甕 2、須恵器坏 3、須恵器壺 1、須恵器長頸瓶 1、武蔵型甕 7、相模型坏 8、土師器片 2、三浦型甕 13、三浦型甕？ 2、盤状坏の蓋か？ 1、須恵器転用品 1、土師器坏 1		須恵器坏 1、古代以前の壺・甕類 1、三浦型甕 1	古墳後期須恵器甕または瓶類 4、南比企須恵器坏 1、甕？ 1 (古墳期まで遡る可能性あり)、古墳時代壺類 1	南比企須恵器坏 4、甲斐型坏 1、相模型甕 5、三浦型甕 5、相模型坏 3、武蔵型甕 3	三浦型甕 378、相模型甕 121、相模型坏 11、武蔵型甕 382、産地不明 4、律令以前の土師器甕 3、武蔵系統産地不明 1、武蔵型台付甕脚付き 5、不明 (参考資料)、古墳くらいの坏 1、ロクロ土師器 6、盤状坏系高台付皿 2、盤状坏の皿 1、ロクロ土師器皿 1、甲斐型坏 8、甲斐型の内黒坏 1、相模型または相模系統の坏 47、須恵器坏 24、須恵器(南多摩)坏 2、須恵器(南比企)坏 18、須恵器(埼玉系)坏 1、須恵器甕 6、須恵器(南比企)甕 10、須恵器小型壺 1、須恵器(南比企)甕または壺 1、土師器坏 2	相模型甕 103、相模型坏 47、相模小型甕 1、相模型またはそれ以前 2、相模型系統坏 1、三浦型甕 268、三浦型甕？ 1、武蔵型台付き甕 2、土師器片 59、古墳後期くらいの坏か？ 1、須恵器坏 7、須恵器(南比企)坏 24、須恵器(南多摩)坏 2、須恵器(渥美・湖西似)坏 1、須恵器小型壺？ 2、須恵器(南比企)蓋 3、須恵器甕 2、須恵器(南比企)甕 4、須恵器壺・甕類 1、須恵器器種不明 1、甲斐型坏 2、弥生ノ土器か？ 1、弥生の壺または甕 1、産地不明甕 1、不明土器 1、不明 10、三浦半島のロクロ土師器か？ 坏 2、土師器坏 1、坏 1
合計	2824	1468	166	12	38	78	1646	1756



1-1 調査地遠景



1-2 表土掘削状況



1-3 I区I面全景（北から）



1-4 I区深掘りトレンチ全景（東から）



2-1 II区古代面全景（北から）



2-2 II区古代面竪穴住居跡（北西から）



3-1 竪穴住居跡 カマド検出状況（北西から）



3-2 竪穴住居跡 カマド使用面（北西・低位から）



3-3 竪穴住居跡 カマド使用面（北西から）



3-4 カマド支脚上 遺物出土状況



3-5 カマド左袖内 遺物出土状況

図版4



4-1 竪穴住居跡 カマド使用面② (北西から)



4-2 竪穴住居跡 カマド使用面② (北西・低位から)



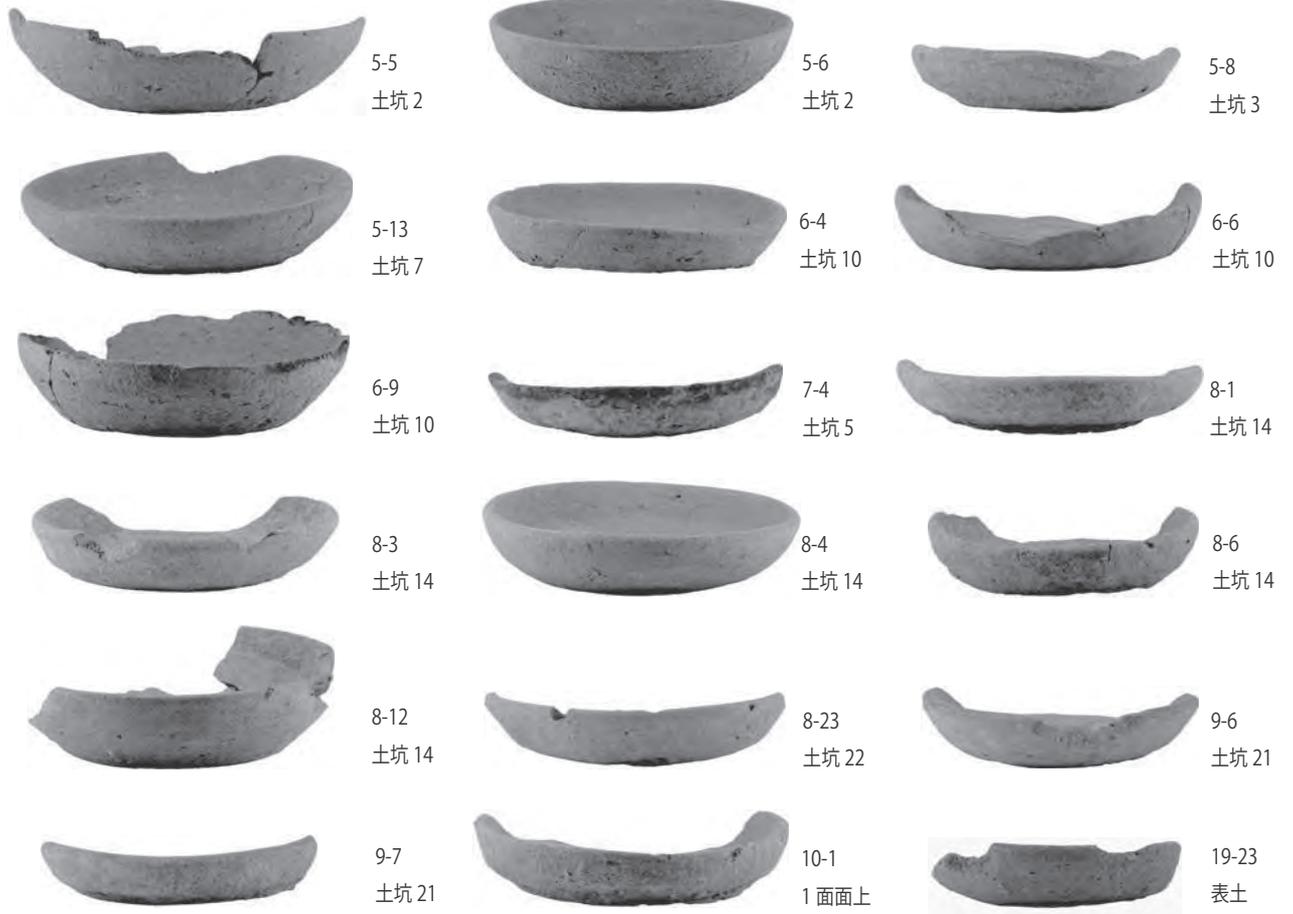
4-3 竪穴住居跡 掘方 (北西から)



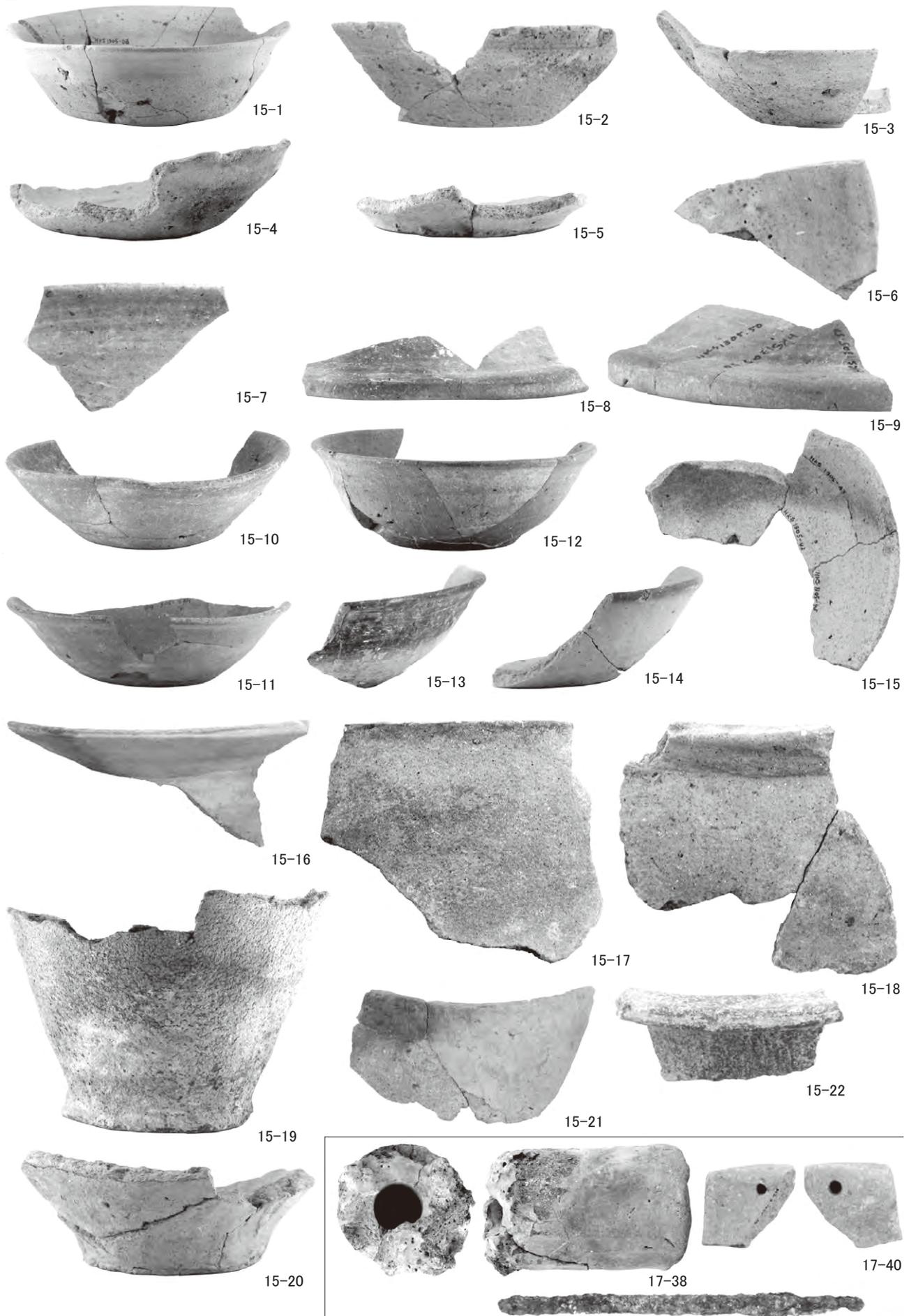
4-4 柱穴内 遺物出土状況



4-5 カマド掘方 (北西・低位から)

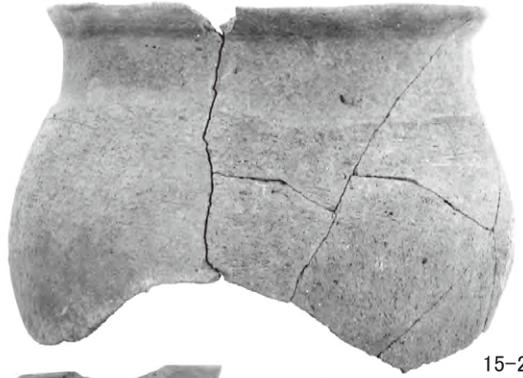


图版6





15-23



15-24



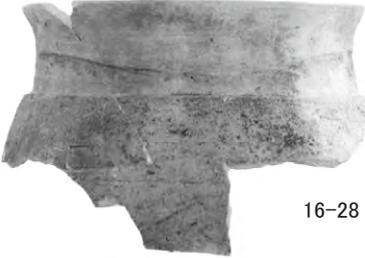
15-25



16-26



16-27



16-28



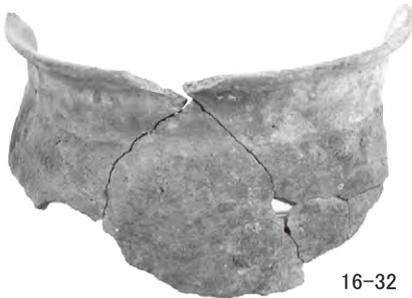
16-29



16-30



16-31



16-32



16-33



16-34



16-35

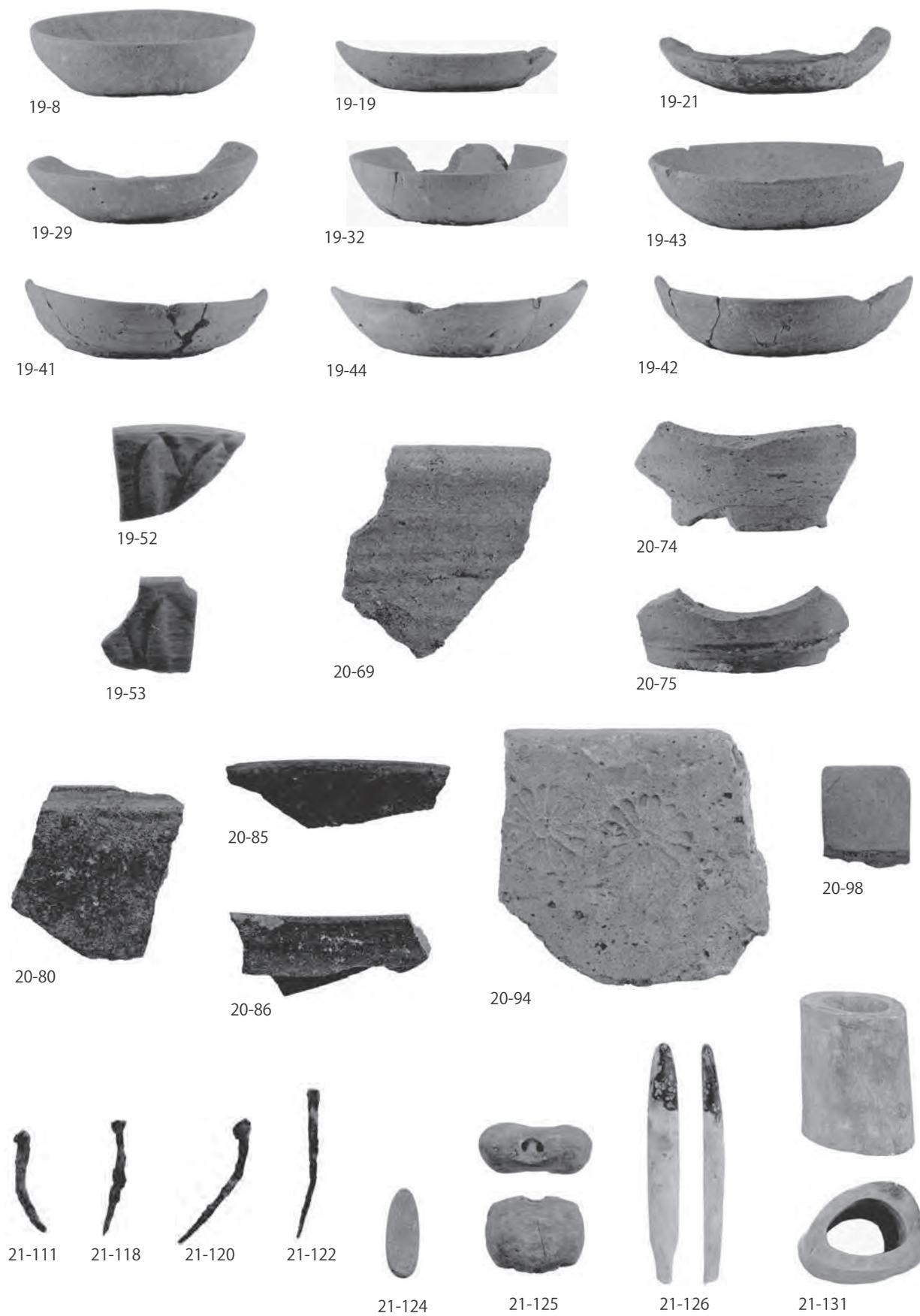


16-36



16-37

图版 8



台山遺跡 (No.29)

山ノ内 860 番 2 地点

例 言

1. 本報告は、鎌倉市山ノ内 860 番 2 において実施した台山遺跡(鎌倉市 No.29)の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は平成 27 年 4 月 28 日から同年 6 月 23 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査の対象面積は、69.6㎡である。
3. 発掘調査体制は、以下のとおりである。

主任調査員 押木弘己(鎌倉市文化財課 臨時的任用職員)

調査員 赤堀祐子、小野夏菜、松吉里永子、遠藤綾子、佐藤千尋、吉田麻子
(鎌倉市文化財課 臨時的任用職員)

作業員 沼上三代治、牛嶋道夫、吉澤 功、鈴木道明、石黒 清、大澤清春
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)

整理作業参加者 押木弘己、吉田桂子、菅野知子(鎌倉市文化財課 臨時的任用職員)

4. 本報告に掲げた中世瀬戸窯製品の器種分類と様式認定は、藤澤良祐氏(愛知学院大学)に依頼し、東濃窯製品は山本智子氏(多治見市美濃焼ミュージアム)にご教示を賜った。また、以下の諸氏からも出土品についてご教示を賜った(順不同、敬称・所属先略)。

中野晴久、浅野晴樹、池谷初恵、森まどか、伊藤真央

5. 本報告の執筆と編集は、押木が行った。
6. 本報告で使用した写真は、現地・出土遺物とも押木が撮影した。
7. 本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「D I 1 5 0 1」とし、出土品への注記などに使用した。

凡 例

1. 挿図の縮尺は、遺構・遺物ともに図中に表示している。
2. 本書中に記載した国土座標値は、世界測地系(第IX系:東日本大震災後の補正後)に基づいている。
3. 挿図に示した方位標は座標北(Y軸)で、真北はこれより0°09'25"ほど東に振れている。
4. 遺構挿図中の水系高は、海拔値を示す。
5. 出土遺物の年代観は以下の文献を参考としたが、筆者が各所見を理解し切れていない部分もある。

◆かわらけ・遺物全体の様相:宗臺秀明 2005「中世鎌倉の土器・陶磁器」『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』

◆輸入陶磁器:太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編—』

◆瀬戸窯製品:藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

◆常滑・渥美窯製品:愛知県 2012『愛知県史』別編窯業3 中世・近世常滑系

目 次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	217
第1節 遺跡の立地	
第2節 周辺の調査成果	
第二章 調査の方法と経過	220
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の方法	
第3節 調査の経過	
第三章 基本土層	221
第四章 発見された遺構と遺物	221
第五章 調査成果のまとめ	231
付 編 台山遺跡の花粉分析とプラント・オパール分析	232

挿図目次

図1 台山遺跡における発掘調査地点	218	図5 2面全体図	224
図2 調査区配置図	220	図6 出土遺物(1)	226
図3 調査区壁断面図	222	図7 出土遺物(2)	227
図4 1面全体図	223		

表 目 次

表1 出土遺物カウント表	228	表2 出土遺物観察表	229
--------------	-----	------------	-----

図 版 目 次

図版1	235	5. I区1面溝1(北から)	
1. 調査地遠景(東から)		6. I区1面溝1(北東から)	
2. I区表土掘削状況(北西から)		7. I区1面溝1土層断面(北から)	
3. I区1面作業風景(南東から)		8. I区2面全景(東から)	
4. I区1面全景(東から)			

図版 2 236

1. II区 表土掘削状況 (西から)
2. II区 1面 全景 (東から)
3. II区 1面 溝 1 (南西から)
4. II区 1面 溝 1 かわらけ出土状況 (南東から)

5. II区南壁 土層断面 (北から)

6. II区 2面 全景 (東から)
7. II区 2面 土坑 3 (南から)
8. II区 測量作業状況 (南西から)

図版 3・4 出土遺物 237



調査地上空から東南東 (巨福呂坂方面) を望む
2015年2月9日撮影

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

台山遺跡は鎌倉市北部に位置し、鎌倉街道（主要地方道 横浜鎌倉線）と JR 横須賀線を北に見下ろす丘陵尾根の上部から裾部にかけて立地している。丘陵地形は多摩丘陵から三浦半島方面へ続くもので、鎌倉市北部の大部分を構成している。遺跡範囲は北西～南東に 700 m、北東～南西には 300 m の規模をもち、標高は 18～74 m を測る。本調査地は遺跡範囲の北東縁辺部に位置し、JR 北鎌倉駅から 300 m ほど西の丘陵中腹部に所在する。小袋谷川に架かる藤源治橋を渡って北鎌倉女学園方面に上がる途上にあり、雛壇状に造成された宅地となっている。現況での標高は、30 m 強を測る。

第2節 周辺の調査成果

台山遺跡では、これまでに 15 地点で発掘調査が実施され（平成 28 年 8 月現在）、本調査は 16 地点目の調査例となる。

図 1 には、遺跡内の調査地点を発掘調査実施順に示した。未報告の地点もあって具体的な調査成果が不明なケースもあるが、幾例か代表的な成果について紹介する。地点 1 では昭和 49 年、三上次男氏が学術調査を実施している。標高 60 m 弱の丘陵上で弥生後期・古墳後期・時期不明の竪穴住居が各 1 軒検出され、中世ではかわらけが出土したという。地点 2・5・7 は北鎌倉女子学園の校舎建設に伴って実施され、周辺の小字から「台山藤源治遺跡」と呼ばれている。この第 1 次調査（地点 2）では縄文時代の陥とし穴 1 基、弥生中期以降の竪穴住居 18 軒、古墳時代の竪穴住居 13 軒、平安時代の竪穴住居 5 軒が検出されている。中世では道路状遺構や 14～16 世紀の遺物が発見されている。第 2 次調査（地点 5）でも縄文早期～前期の陥とし穴 2 基の他、弥生後期の竪穴住居 1 軒、奈良末～平安初期の竪穴住居 1 軒が検出されている。中世の遺構は確認されていないが、やはり 14～16 世紀の遺物が発見されている。第 3 次調査（地点 7）では弥生後期後半～古墳時代の竪穴住居 5 軒、平安時代の竪穴住居 1 軒が検出され、中世では段切り造成面やピット列が確認されている。中世の遺物は、14～15 世紀代の製品が中心となる。

この他、地点 3・4 では弥生後期を中心とする竪穴住居 8 軒が確認されており、地点 8 では中世後期の南北溝 2 条が確認されている。地点 9 では弥生後期の竪穴住居 4 軒、古墳時代に属する竪穴住居 2 軒と掘立柱建物 1 棟、古墳後期末～奈良時代前半の竪穴住居 2 軒が発見されている。古代以前の掘立柱建物や奈良時代の竪穴住居は、台山遺跡では初めての確認例となった。地点 10 は丘陵斜面に立地するため遺構・遺物とも少なかったが、弥生後期～古墳前期のピット 2 基が検出され、弥生中期後葉の宮ノ台式壺形土器が出土している。地点 11・14 は本地点と同じ造成平場に立地しており、地点 11 では調査深度に制限があったため明確な遺構の検出には至っていないが、南北朝期以降を中心とする中世遺物が出土している。地点 15 では古墳時代後期（終末期）にあたる 7 世紀中葉前後の竪穴住居が確認されている。同地点が所在する西ノ台地区は近代に入り海軍将校の宅地として造成されたため丘陵稜線が大幅に削平されており、その中でも損壊を免れた数少ない事例として特筆できる。

地点 12 は丘陵の北向き斜面中腹に立地し、雛壇状の平場において 3 枚の中世遺構面が確認されている。遺構は土坑とピットが中心で、一部のピットは並ぶ可能性がある。遺物の様相から、15 世紀の中葉～後半を中心に土地利用がなされていたようだ。距離的な隔たりはあるものの、当地点の立地、開発状況と近似した在り方といえる。

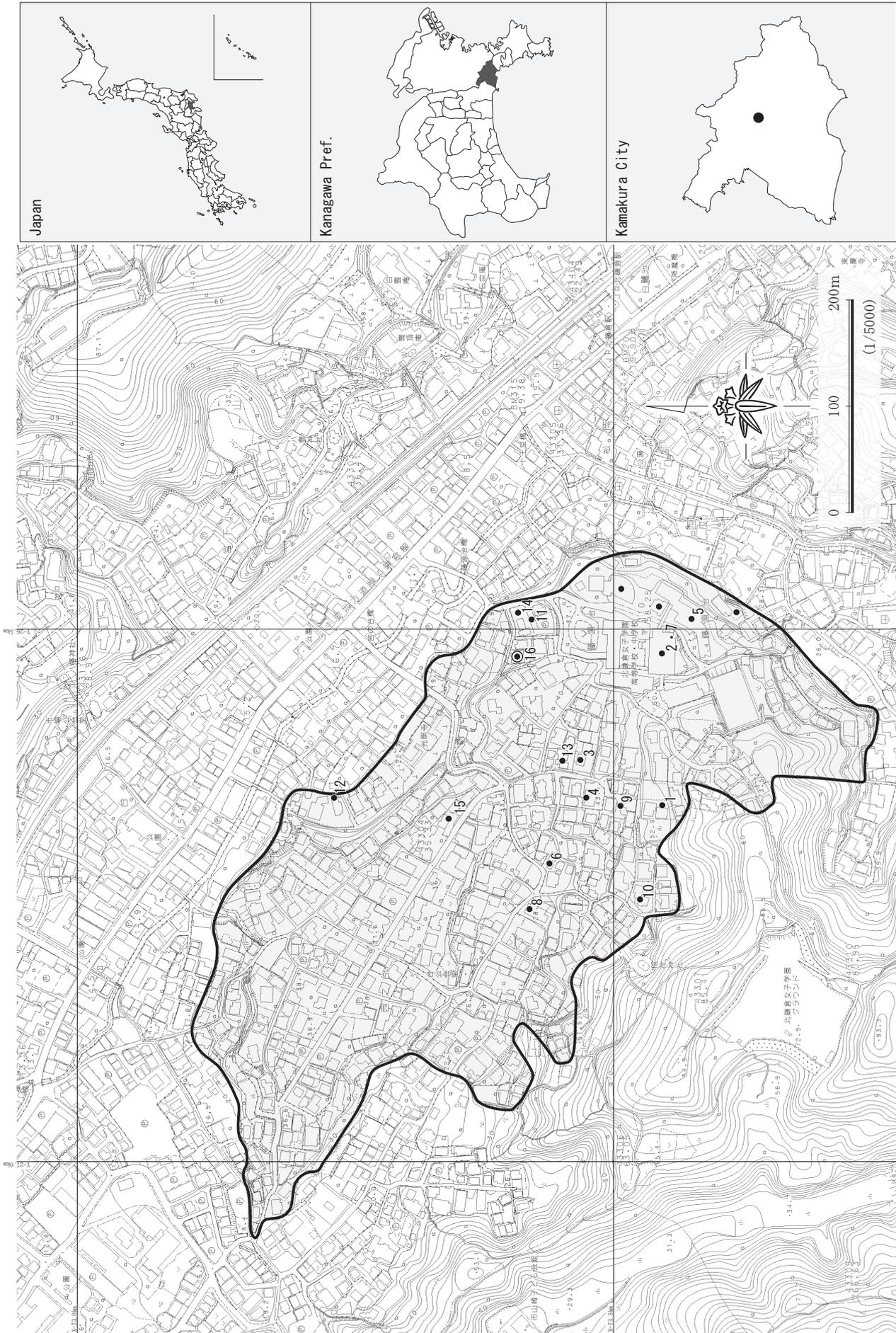


図1 台山遺跡における発掘調査地点（鎌倉市発行 1:2,500 都市計画基本図を使用）

以上を整理すると、台山遺跡では丘陵上を中心に広範囲にわたって弥生時代～平安時代の竪穴住居が分布しており、各時代の集落展開が把握されていることになる。集落の開始時期は弥生時代中期後葉の宮ノ台式期となろうが、この段階では発見されている住居の数も少なく、現時点の調査成果では大規模集落の存在は想定できない。弥生後期の久ヶ原式～弥生町式期に住居軒数が増加し、古墳時代前期まで一定規模の集落が継続するようである。古墳中期には地点5・7で竪穴住居が3軒、地点9で土坑1基が発見されており、他地域の例に漏れず退潮には入るものの完全には途絶しないようである。古墳後期になると再び住居軒数は増加に転じ、後期末～奈良時代前半に継続する状況も窺える。続く平安時代に入っても、一定規模の集落が存続するようである。以上は大まかな時期区分に基づく記述であるため、報告された各遺構の帰属時期を詳細に把握することで集落変遷の実相が明らかになってこよう。

また、縄文時代の発見遺構は今のところ陥とし穴に限られているが、早期～前期と比較的古い時期の遺構も含まれていることから、鎌倉周辺の縄文社会の形成過程を考える上で貴重な成果といえる。

中世においては14世紀後半～15世紀代に土地利用が進んだことが明らかとなりつつあり、弘安五年(1282)の円覚寺創建に伴う土地開発は、本遺跡付近までは及ばなかったことが推測できる。本地点の北東に近い西台山英月院光照寺は時宗寺院で、藤沢市清浄光寺(遊行寺)の末である。境内に建武二年(1336)銘をもつ安山岩製板碑が現存することから14世紀前半に寺域の整備が進んだ可能性はあるが、この段階では周辺の広い範囲にまで開発が及ばなかった様子が、遺跡内容からは窺い知れる。

本章は、押木 2016 の第一章を一部改変後、転載した。

【図1に示した調査地点の報告書】

1. 丑野 毅 1974 「神奈川県鎌倉市台遺跡調査報告書」『人文学科紀要』第59輯 東京大学教養学部人文科学科
2. 手塚直樹他 1985 『台山藤源治遺跡』台山遺跡発掘調査団
3. 齋木秀雄・宗臺秀明 1985 「3. 台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1』鎌倉市教育委員会
4. 玉林美男他 1988 「6. 台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4』鎌倉市教育委員会
5. 大河内 勉 1996 『台山藤源治遺跡 第2次調査報告』台山遺跡発掘調査団
6. 大上周三 1992 「4. 台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8』鎌倉市教育委員会
7. 宗臺秀明 1993 『台山藤源治遺跡—第3次調査報告—』台山藤源治遺跡発掘調査団
8. 野本賢二 1997 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
9. 若松美智子 1998 『台山遺跡発掘調査報告書—西ノ台1733-1外地点—』台山遺跡埋蔵文化財発掘調査団・東国歴史考古学研究所 1999 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
10. 継 実 2001 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
11. 森 孝子 2002 『台山遺跡発掘調査報告書』有限会社博通
12. 伊丹まどか 2004 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
13. 2007年度調査・未報告
14. 2009年度調査・未報告
15. 押木弘己 2016 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書32(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
16. 2015年度調査・本報告

【参考文献】

- 鎌倉市史編纂委員会編 1959 『鎌倉市史 社寺編』鎌倉市
白井永二編 1976 『鎌倉事典』東京堂出版

第二章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経緯

今回の調査は個人専用住宅の建設に伴う埋蔵文化財の記録保存調査として鎌倉市教育委員会（以下、市教委）が実施した。

建築計画では基礎部分に深さ 6.4 m の鋼管杭を打ち込む予定であったため、市教委は平成 26 年 4 月 16・17 日の二日間にわたって埋蔵文化財の確認調査を実施した。この結果、地表下 100cm で中世の遺物包含層が検出され、地表下 2 m までに 3 枚の中世遺構面が存在することを確認した。この内容を受け、建築工事の実施に先立って本格的な発掘調査を実施する必要があるとの判断に至った。

現地での発掘は、平成 27 年 4 月 28 日～6 月 23 日の約 2 ヶ月をかけて実施した。建築面積に基づく調査予定範囲は約 84m²であったが、安全対策などを行った後、最終的な調査面積は 69.6m²となった。

第2節 調査の方法

調査区は、掘削に伴う残土置き場を確保する必要から南半部の I 区と北半部の II 区とに分割し、I 区から II 区の順に調査を進めた（図 2）。

表土掘削は I・II 区とも重機によって行い、遺物包含層以下は全て人力によって掘削し、順次遺構の確認と掘削、次いで写真撮影・測量図作成といった記録作業を進めた。

測量に当たっては、国家座標値を載せた基準杭を敷地内に設定し、主に光波測距儀で測定した座標値を方眼紙にプロットする方法で平面図を作成した。国家座標の移設は、市道上に設置された都市再生街区多角点「10B50」と同補助点「4A544」との二点間関係をもとに開放トラバース法で行った。標高は、多角点「10B26」（16.628 m）を起点に直接水準測量を繰り返して敷地内の測量杭に移した。測量の基準として使用した多角点および補助点の国家座標値は、東日本大震災後の補正值である。

第3節 調査の経過

前述のとおり、調査は I 区から II 区の順に進めた。I 区の表土掘削は平成 27 年 4 月 23 日に実施し、28 日には調査用具を搬入して本格的に調査に着手した。遺構の確認と掘削、図面作成および写真撮影など記録作業を進め、6 月 4 日には I 区の埋め戻しと II 区の表土掘削を行った。II 区でも掘削と記録を進め、6 月 17 日には全ての記録作業を終え、23 日には調査用具を撤収して、現地での調査

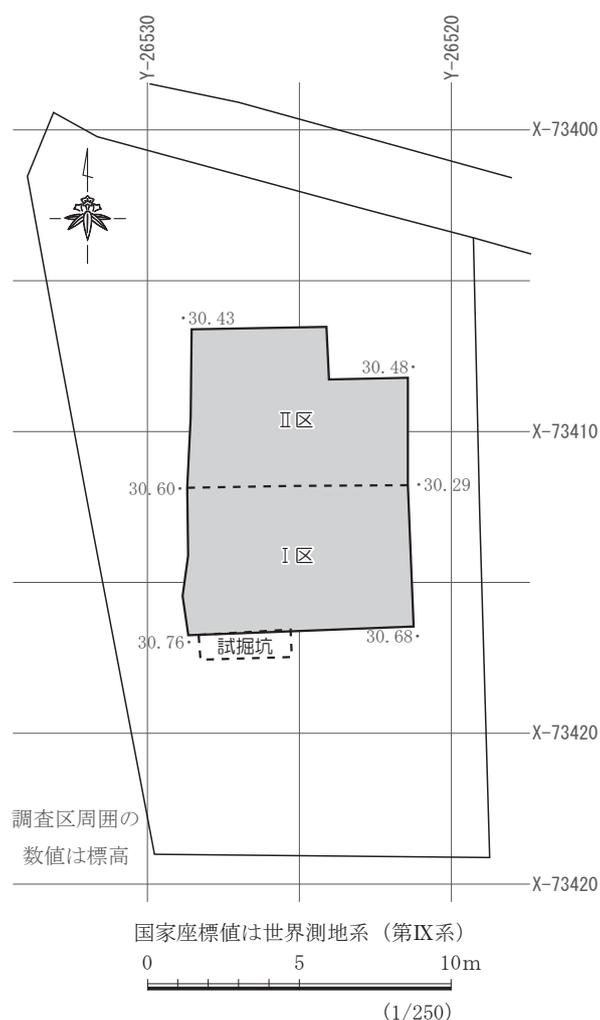


図2 調査区配置図

工程を全て終了した。Ⅱ区の埋め戻し作業は、器材撤収後に施工事業者によって行われた。

出土品および記録類の整理作業は平成 27 年度の後半に、報告書の執筆・編集作業は 28 年度の前半に、鎌倉市教育委員会文化財課分室において行った。

第三章 基本土層

本地点は丘陵中腹部の斜面地形に立地しており、現状では雛壇状の平場となっている。敷地の西側と南側に高位の平場があるが、特に西側の平場とは急傾斜の崖面で隔絶される格好となっている。崖面は間知ブロック積みの擁壁で保護されているが、この裾部の地表面には露頭岩盤が見られ、本地点の平場が山裾側では切り土によって、斜面下方では盛り土によって造成された様子が窺われた。

図 3 には、調査区壁の土層断面図を掲げた。確認調査では地表下 100cm で中世の遺物包含層との判断が示されたが、堆積土様相の変化からは地表下 65cm の 3 層以下が遺物包含層で、厚さ 10～40cm ごとに様相を違えながら地表下 170cm 前後で山裾溝などを掘り込んだ第 1 面となることを確認した。この間の層序には泥岩粒が密に入り、一見すると整地された生活面らしき土層も見られたが（3 層・13 層など）、上面での明確な掘り込みや遺物分布が認められなかったため、第 1 面までは全て遺物包含層と判断した。

上述の露頭岩盤は調査区の西壁際から落ちる傾斜度 55° の斜面となり、現地地表下 190cm で平坦面となることが確認された。人工の切り土造成によるもので、少数ながら土坑などの掘り込みも確認できたので、ここを第 2 面とした。標高は 28.3～28.6 m で、北東に向けて低くなっていた。

中世層は暗褐色土をベースとし、泥岩粒の多寡などを基に分層することができた。

第四章 発見された遺構と遺物

前章で述べたように、本地点では 2 枚の遺構面が確認され、いずれも中世に帰属すると考えられる。1 面・2 面とも検出遺構が少なく出土遺物も非常に僅少であり、生活感が薄い印象を受けた。

1 面（図 4）

標高 28.6～29.0 m で検出された。北東側が低くなっている。泥岩粒を多く含んだ暗黄褐色粘質土で構築されている。調査区の西壁外から露頭岩盤が斜面となって続くが、1 面レベルで斜面の裾に沿って南北に延びる溝 1 を確認した。上幅 130cm、下幅 30cm を測り、確認面からの深さは 30cm 強で、U 字状の断面形を呈する。底面標高は 28.6 m 前後で、明確な流下方向としては確認できなかったが、北側に向けてわずかに低くなるようである。山裾からしみ出る水を排水する目的で掘削されたものであろう。1 面上では他にピット状の浅い窪み 1 基が検出されたのみであるが、生活面を安定的に保持する意図は感じ取れた。

図 7-81～84 に溝 1 の出土遺物を示した。81 のロクロかわらけ小皿は器壁が厚く作りのシャープさに欠ける。底部には焼成後に穿った貫通孔があり、口縁の端部付近に油煤が付着している。83 は瀬戸の卸目付大皿。古瀬戸後期様式のⅣ期古段階まで下る。

2 面（図 5）

岩盤を人工的に削平した面で、標高 28.3～28.6 m で検出された。西側からの斜面裾は 1 面の溝 1 が開削されたことによって窪んでいる。2 面でも山裾に水切り溝が走っていた可能性はあるが、明確

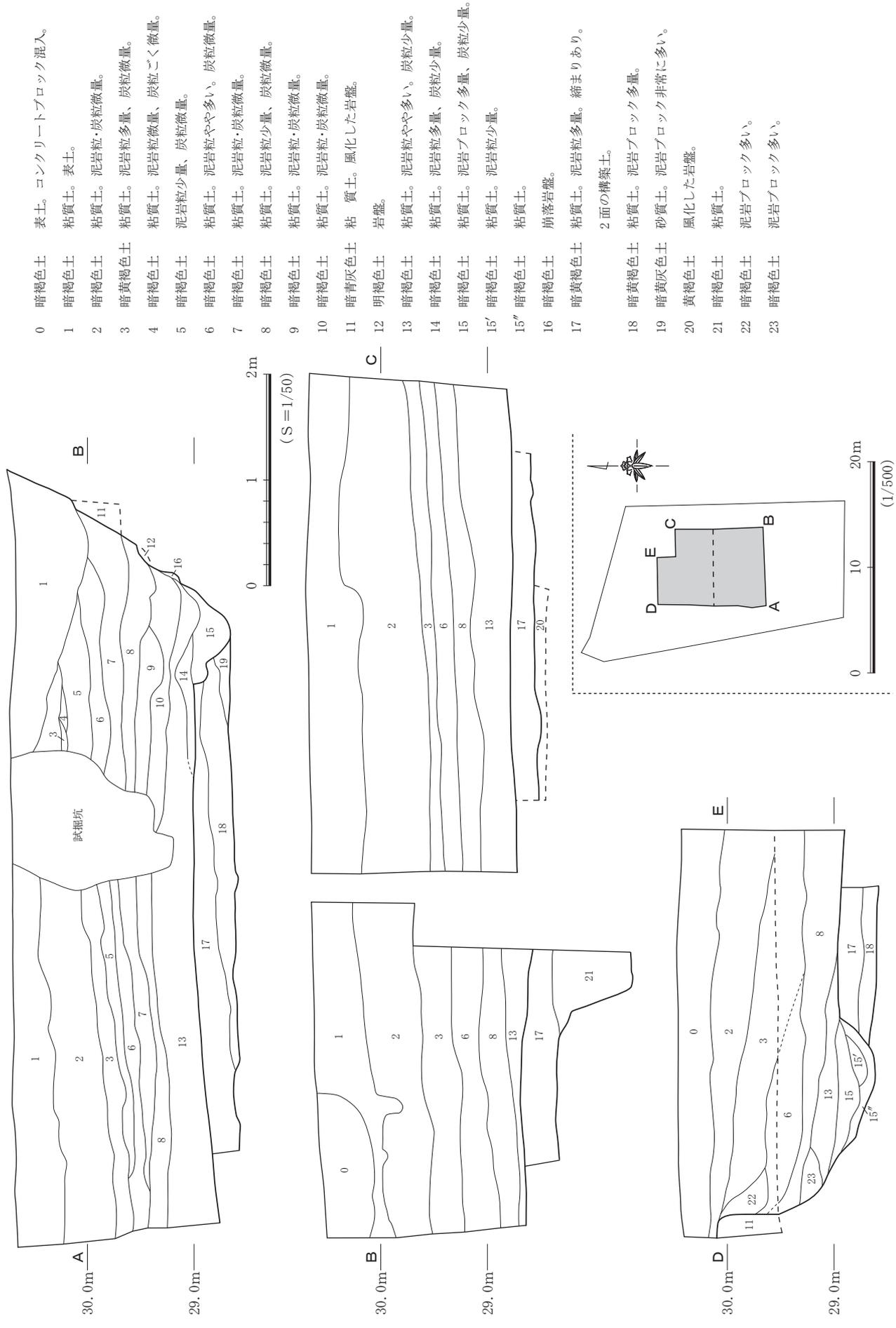


図3 調査区壁断面図

- 0 暗褐色土 表土。コンクリートブロック混入。
- 1 暗褐色土 粘質土。表土。
- 2 暗褐色土 粘質土。泥岩粒・炭粒微量。
- 3 暗黄褐色土 粘質土。泥岩粒多量、炭粒微量。
- 4 暗褐色土 粘質土。泥岩粒微量、炭粒ごく微量。
- 5 暗褐色土 泥岩粒少量、炭粒微量。
- 6 暗褐色土 粘質土。泥岩粒やや多い。炭粒微量。
- 7 暗褐色土 粘質土。泥岩粒・炭粒微量。
- 8 暗褐色土 粘質土。泥岩粒少量、炭粒微量。
- 9 暗褐色土 粘質土。泥岩粒・炭粒微量。
- 10 暗褐色土 粘質土。泥岩粒・炭粒微量。
- 11 暗青灰色土 粘質土。風化した岩盤。
- 12 明褐色土 岩盤。
- 13 暗褐色土 粘質土。泥岩粒やや多い。炭粒少量。
- 14 暗褐色土 粘質土。泥岩粒多量、炭粒少量。
- 15 暗褐色土 粘質土。泥岩粒多量、炭粒少量。
- 15' 暗褐色土 粘質土。泥岩粒少量。
- 15'' 暗褐色土 粘質土。
- 16 暗褐色土 崩落岩盤。
- 17 暗黄褐色土 粘質土。泥岩粒多量。縮まりあり。
2面の構築土。
- 18 暗黄褐色土 粘質土。泥岩ブロック多量。
- 19 暗黄灰色土 砂質土。泥岩ブロック非常に多い。
- 20 黄褐色土 風化した岩盤。
- 21 暗褐色土 粘質土。
- 22 暗褐色土 泥岩ブロック多い。
- 23 暗褐色土 泥岩ブロック多い。

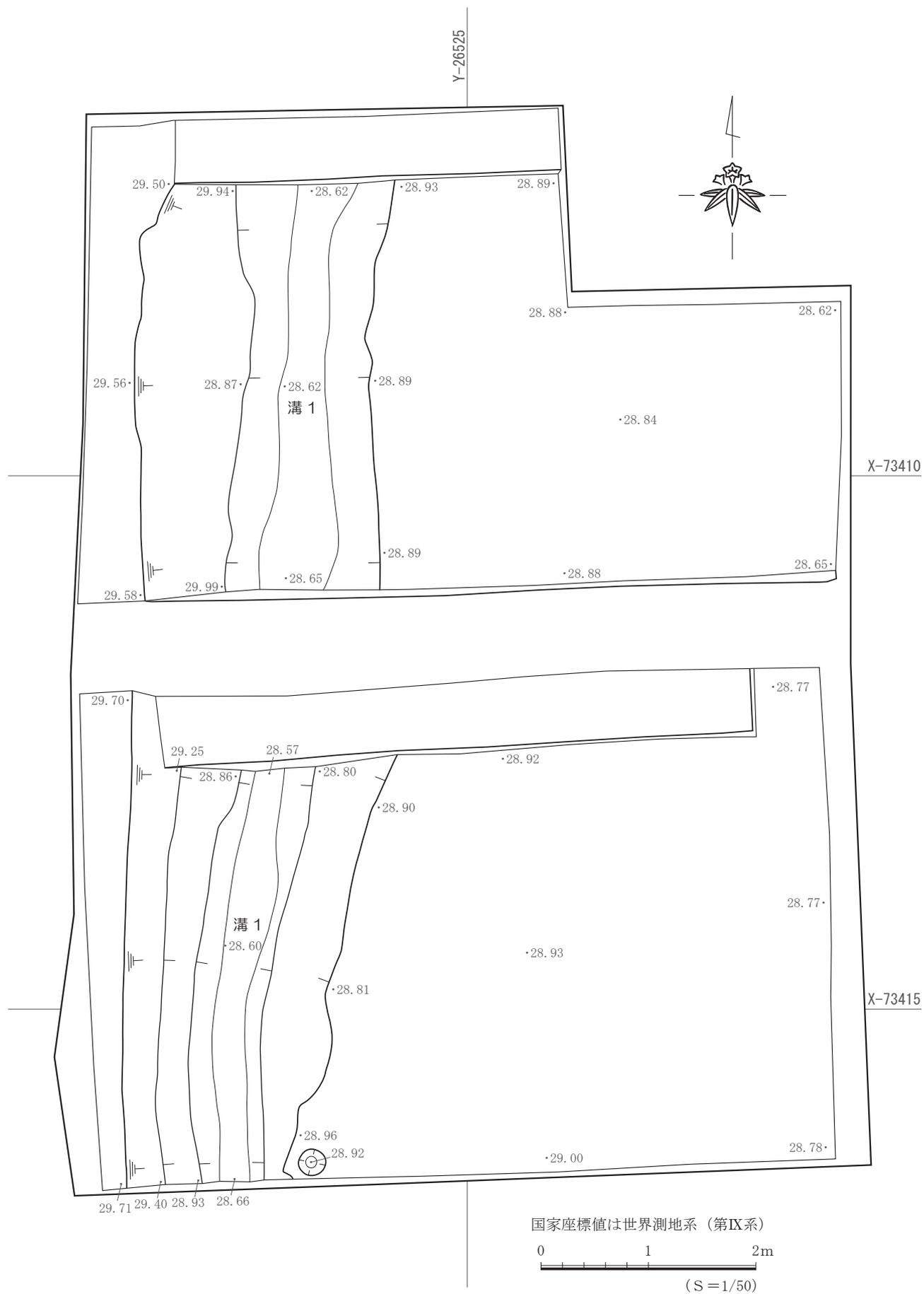


図4 1面全体図

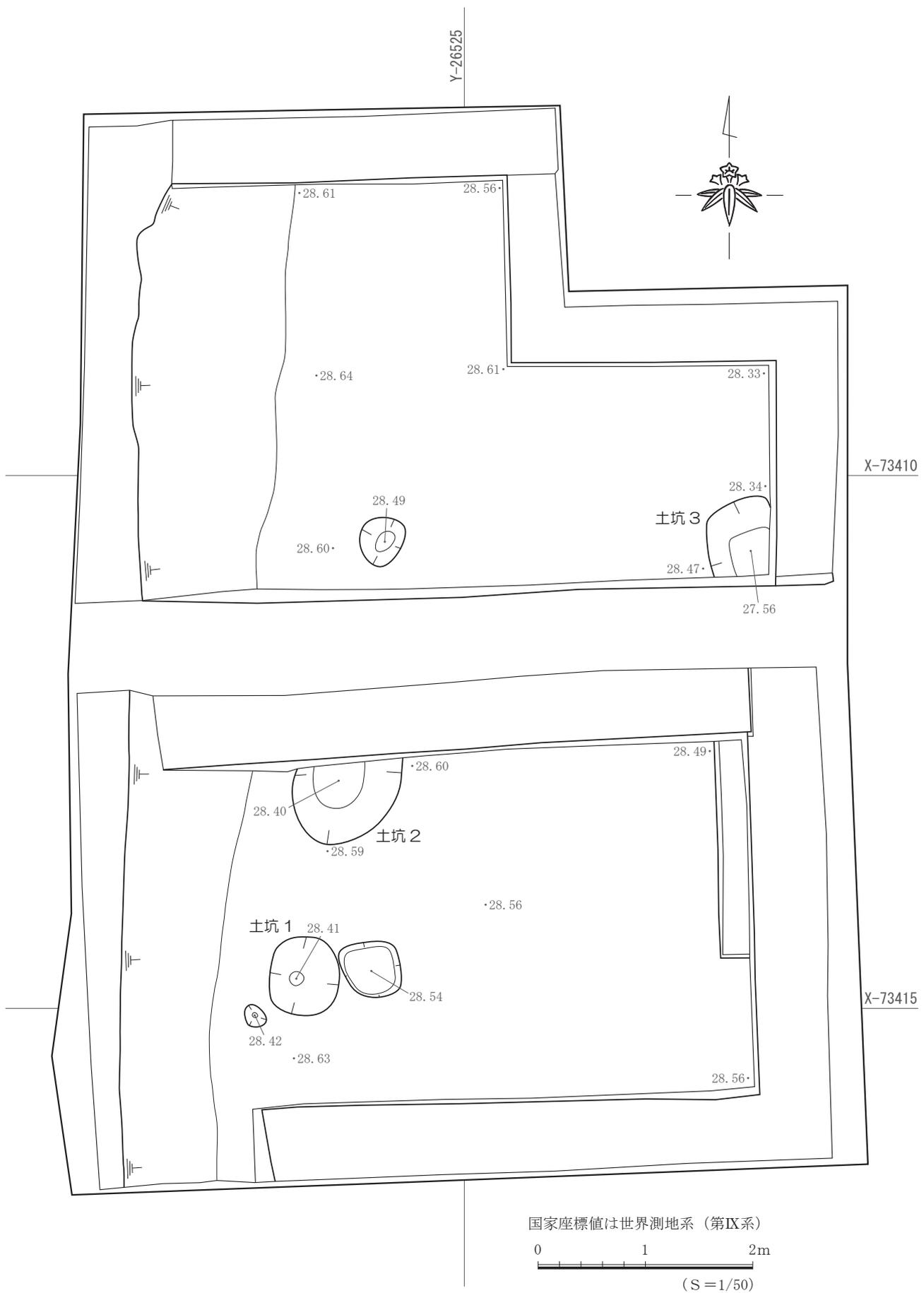


図5 2面全体図

な痕跡は確認できなかった。面上では土坑と浅い落ち込みが6基確認されている。このうちⅡ区南西角に位置する土坑3は岩盤を垂直気味に掘り下げて平坦な底面を造作しており、確認面からの深さは90cmを計測した。暗褐色粘質土で短期間の内に埋没した様子であるが、どのような用途を持っていたのかは定かでない。他の土坑・落ち込みについては確認面から10～20cm程度の深さしかなく、意図的には掘り込まれていないものもあるかもしれない。

図7-92は、土坑3出土のロクロかわらけ小皿である。これより上位の層序から出土した資料よりも低平で丸味を帯びた体部を持つ。

1 面までの出土遺物 (図6・7)

本地点では1面までの遺物包含層が厚く、出土した遺物の多くがこの層中に含まれるものであった。出土した点数(破片数)と重量は、表1を参照されたい。かわらけは全てロクロ成形品が占めており、小皿・大皿とも器壁が厚く断面逆台形に近い資料が主体となる。灯明皿としての使用痕跡が散見される。また、小片資料のみで全体の器形を知り得る個体はなかったが、灰釉平碗や緑釉小皿、卸皿、折縁皿(中)といった古瀬戸の碗・皿が多い点の特記できる。後期様式に下る資料が主体であり、上述したかわらけの年代観を知る上で手掛かりとなる。常滑甕は口縁縁帯幅の長い8型式が主体となり、土器の鏝釜(鍋)は鏝の薄い袋状胴部となる資料が入っている。瓦質土器では火鉢の他に土風炉の小破片も見られ、全体として南北朝期以降の遺物様相と捉えることができる。これら中世遺物に混じって縄文時代～平安時代の土器片も出土している。斜面中腹という立地でもあり、古代以前に段切り造成を行って集落を営んでいたとは思えないが、前述のように丘陵上ではこの段階の竪穴住居が多く発見されているので、本地点へは斜面上部から土とともに流れ込んできたと考えるべきであろう。

1 面下～2 面の出土遺物 (図7)

85～91が2面(岩盤削平面)の検出までに出土した遺物である。かわらけに図示するものがなく、そのため古瀬戸製品が多い印象を受ける。中期様式～後期様式の資料が主体で、87の平碗は後期様式のⅢ期まで下る。91は鉄製品で、甲冑の小札。

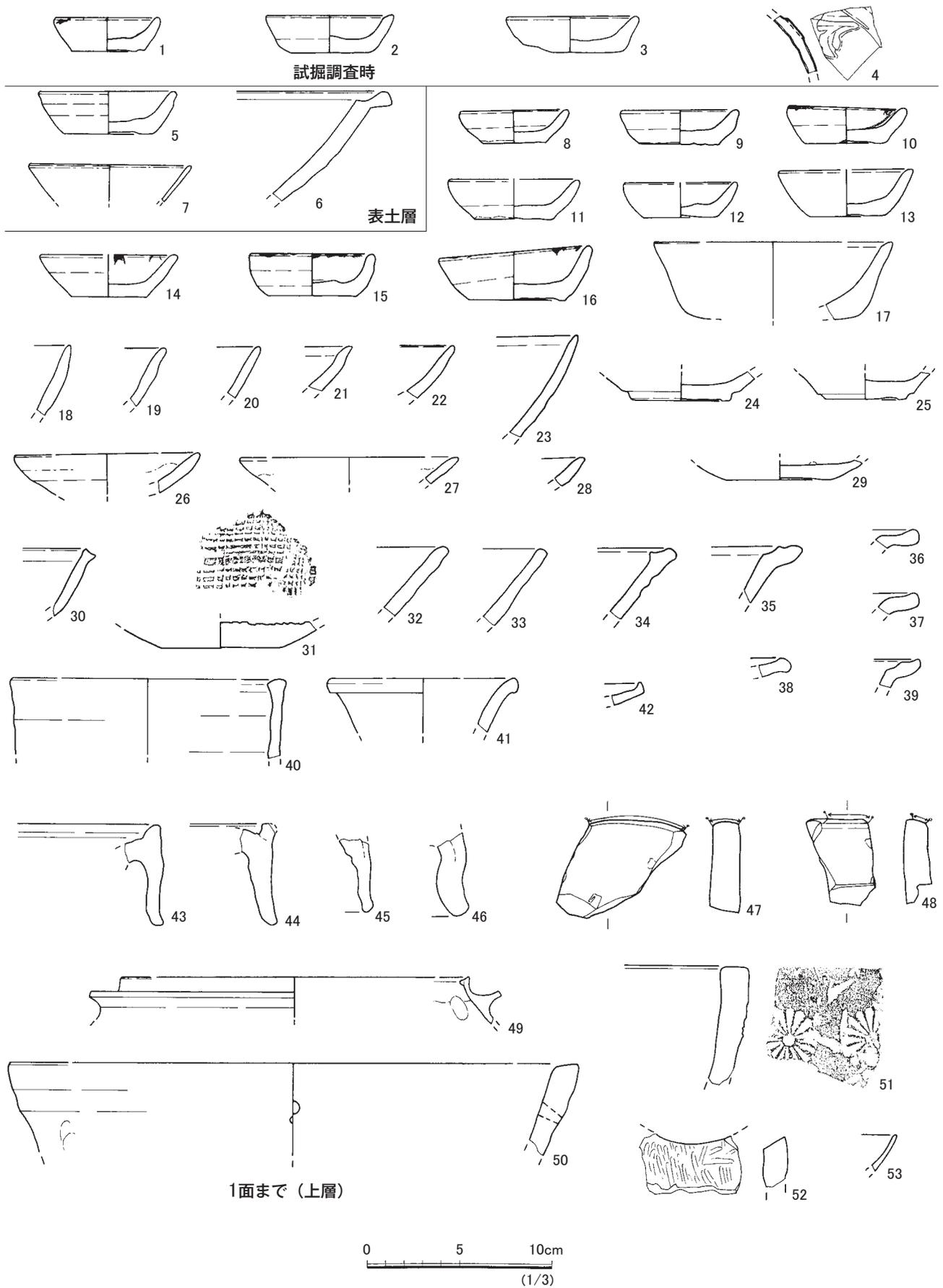


図6 出土遺物 (1)

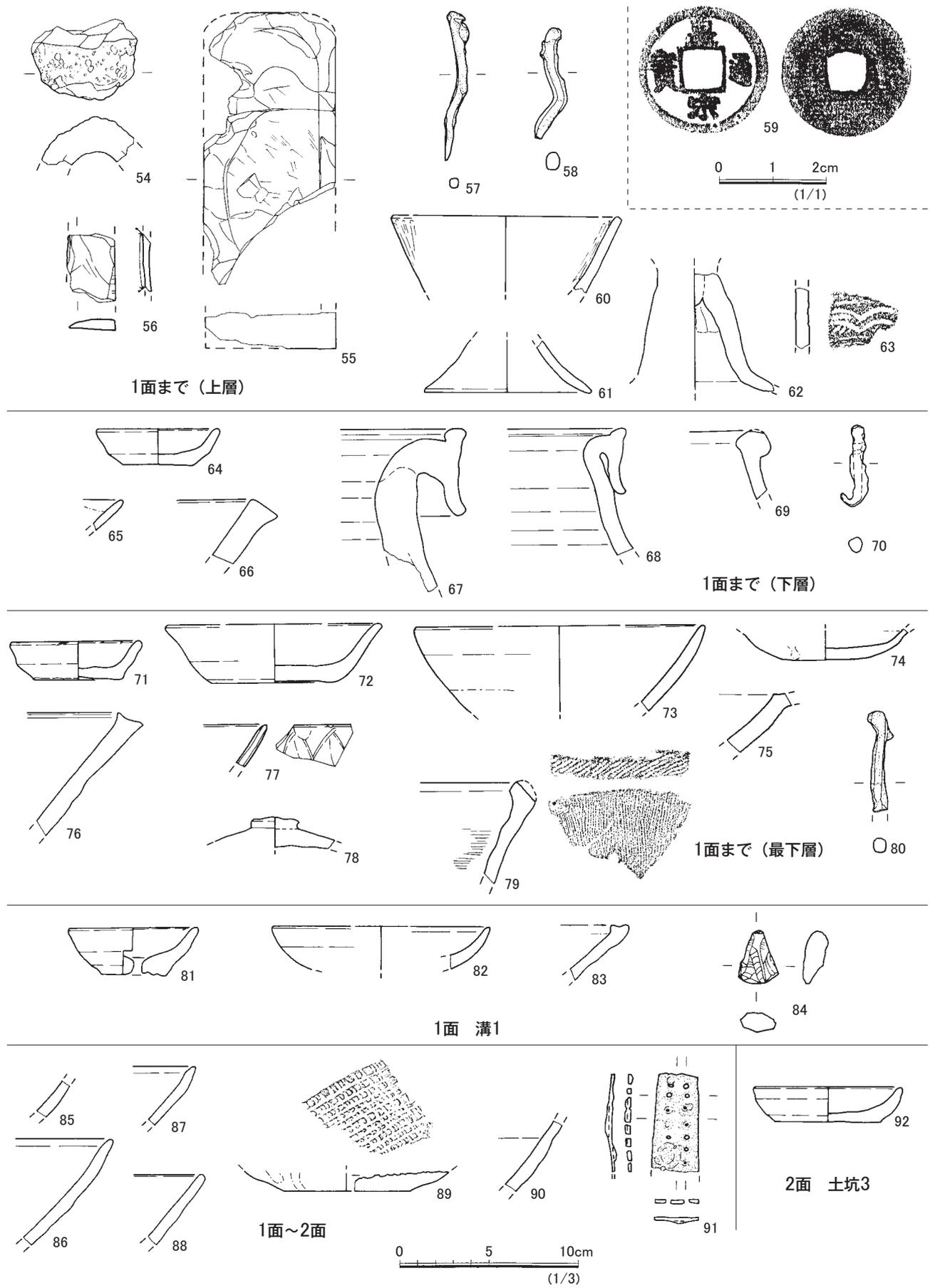


図7 出土遺物 (2)

表 1 出土遺物カウント表

所属 遺構面	遺構	かわらけ		白かわらけ		土器		白磁		青白磁		青磁 (龍泉窯系)																					
		ロクロ	小	小片	手づたね 大	罫釜	火鉢	口禿皿	碗皿	梅瓶	合子蓋	劃花文碗	蓮弁文碗	折縁皿 (杯)	折縁皿 (杯)	酒会壺	壺類																
		大 点数	重量	大 点数	重量	大 点数	重量	大 点数	重量	大 点数	重量	大 点数	重量	大 点数	重量	大 点数	重量	大 点数	重量														
帛属 遺構面	遺構	瀬戸・美濃																															
		柏載陶器																															
		天目碗	盤	壺類	天目碗	平碗	浅碗 小鉢	縁軸小皿	卸皿	折縁深皿	直縁大皿 御目付大皿	播鉢 鉢	碗形鉢	盤類	香炉	燗台	四耳壺 (東濃)	瓶類															
試掘時																																	
表土		9	75	7	125																												
0-1(上層)		11	90	4	45																												
0-1(下層)		533	4590	126	930	1	5	1	15	1	90	2	10	2	15	1	5	1	25	1	5												
1	溝1	19	310	7	105	8	100																										
1-2		15	110	1	55																												
2	土坑3	38	350	15	40																												
帛属 遺構面	遺構	尾張・常滑																															
		尾張・常滑																															
		甕	壺	片口鉢 I類	片口鉢 II類	転用片	猿投?	東濃	瓦質土器	瓦	銅製品	鉄製品	石製品																				
試掘時																																	
表土		7	235																														
0-1(上層)		3	180																														
0-1(下層)		119	4950	1	35	3	100	14	630	1	70	1	30	1	5	21	640	1	30	5	210	3	155	1	5	6	55	3	225	1	10		
1	溝1	15	1095																														
1-2		6	140																														
2	土坑3	4	425																														
帛属 遺構面	遺構	肥前系磁器																															
		肥前系磁器																															
		土製品 ・用材	人骨	鉄骨	鉄骨 ・クア	土師器	土師器	古式土師器	須恵器																								
試掘時																																	
表土																																	
0-1(上層)		1	45	1	5																												
0-1(下層)																																	
1	溝1																																
1-2																																	
2	土坑3																																

凡例
点数=破片数
重量単位 = g

表1 出土遺物観察表

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
出土遺物(1) (図6)						
1	土器	ロクロかわらけ 小	5.5	3.9	1.9	4/5 胎土:角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
2	土器	ロクロかわらけ 小	(6.8)	4.0	2.1	1/3 淡橙色
3	土器	ロクロかわらけ 小	7.0	(5.5)	2.0	2/3 胎土:白色針状物質 黄橙色 外底面に板状圧痕
4	青磁	花瓶	—	—	—	胴小片 淡緑色
5	土器	ロクロかわらけ 小	(7.3)	(4.8)	2.3	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
6	陶器	瀬戸 折縁深皿	—	—	[5.9]	口小片 淡灰緑色(灰釉) 古瀬戸中期様式II
7	磁器	白磁 口禿皿	(8.7)	—	[2.0]	口1/3 大宰府IX類
8	土器	ロクロかわらけ 小	6.1	4.2	1.9	2/3 胎土:白色針状物質 明橙色
9	土器	ロクロかわらけ 小	(5.8)	(3.4)	1.8	1/3 胎土:白色針状物質 明橙色 外底面に板状圧痕
10	土器	ロクロかわらけ 小	6.2	4.2	2.0	2/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色
11	土器	ロクロかわらけ 小	(7.0)	(4.2)	2.2	1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色 外底面に板状圧痕
12	土器	ロクロかわらけ 小	(6.0)	(4.0)	1.9	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色、角閃石 外底面に板状圧痕
13	土器	ロクロかわらけ 小	(7.0)	(4.0)	2.6	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色
14	土器	ロクロかわらけ 小	(7.3)	(4.0)	2.3	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
15	土器	ロクロかわらけ 小	(6.6)	(4.8)	2.3	1/4 胎土:白色針状物質 明橙色
16	土器	ロクロかわらけ 小	8.1	5.1	2.6	3/4 胎土:白色針状物質 明橙色 外底面に板状圧痕
17	土器	ロクロかわらけ 大	(12.8)	—	[4.2]	1/8 胎土:白色針状物質 黄橙色
18	陶器	瀬戸 天目碗	—	—	[3.8]	口小片 胎土:緻密 灰黄色/黒色(鉄釉) 古瀬戸後期様式I
19	陶器	瀬戸 小鉢	—	—	[3.2]	口小片 胎土:緻密 灰色/黒色(鉄釉) 古瀬戸後期様式III
20	陶器	瀬戸 平碗	—	—	[2.8]	口小片 淡灰黄色(灰釉) 古瀬戸中期様式III・IV
21	陶器	瀬戸 平碗	—	—	[2.4]	口小片 灰黄色/淡灰緑色(灰釉) 古瀬戸後期様式III
22	陶器	瀬戸 浅碗	—	—	[2.9]	口小片 胎土:赤色粒 灰白色/淡灰緑色(灰釉) 古瀬戸後期様式I・II
23	陶器	瀬戸 平碗	—	—	[5.5]	口小片 胎土:赤色粒 淡灰橙色/淡灰緑色(灰釉) 古瀬戸後期様式I
24	陶器	瀬戸 平碗	—	5.3	[1.6]	底2/3 胎土:赤色粒 淡黄橙色 古瀬戸後期様式IV古
25	陶器	瀬戸 小鉢	—	4.4	[1.5]	底1/2 胎土:赤色粒 淡灰黄色/緑色(灰釉) 古瀬戸後期様式II・III
26	陶器	瀬戸 緑釉小皿	(10.9)	—	[2.2]	口1/8 淡黄橙色/黄緑色(灰釉) 古瀬戸後期様式IV新
27	陶器	瀬戸 緑釉小皿	(11.7)	—	[1.5]	口1/8 淡灰黄色/淡灰緑色(灰釉) 古瀬戸後期様式II
28	陶器	瀬戸 緑釉小皿	—	—	[1.5]	口小片 淡灰黄色/暗褐色(鉄釉) 古瀬戸後期様式III
29	陶器	瀬戸 緑釉小皿	—	(5.7)	[1.1]	底1/3 淡灰黄色/淡灰緑色(灰釉) 古瀬戸後期様式II・III
30	陶器	瀬戸 卸皿	—	—	[3.7]	口小片 淡灰黄色/淡黄緑色(灰釉) 古瀬戸中期様式III
31	陶器	瀬戸 卸皿	—	(6.8)	[1.4]	底1/3 淡灰黄色/淡灰緑色(内面灰釉) 古瀬戸中期様式
32	陶器	瀬戸 直縁大皿	—	—	[3.8]	口小片 淡灰黄色/淡灰黄色(灰釉) 古瀬戸後期様式IV古
33	陶器	瀬戸 直縁大皿	—	—	[4.2]	口小片 淡灰黄色/淡灰黄色(灰釉) 古瀬戸後期様式III
34	陶器	瀬戸 卸目付大皿	—	—	[3.8]	口小片 胎土:赤色粒 灰白色/灰緑色(灰釉) 古瀬戸後期様式IV古
35	陶器	瀬戸 折縁深皿	—	—	[3.1]	口小片 灰白色/淡灰緑色(灰釉) 古瀬戸後期様式II
36	陶器	瀬戸 折縁深皿	—	—	[1.0]	口小片 灰黄色/淡灰緑色(灰釉) 古瀬戸中期様式II
37	陶器	瀬戸 折縁深皿	—	—	[1.5]	口小片 淡灰黄色/淡灰黄色(灰釉) 古瀬戸中期様式II

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
38	陶器	瀬戸折縁深皿	—	—	[1.4]	口小片 胎土:赤色粒 淡黄橙色/緑白色 (灰釉) 古瀬戸中期様式II
39	瀬戸	瀬戸折縁深皿	—	—	[1.5]	口小片 胎土:緻密 淡灰黄色/淡灰緑色 (灰釉) 古瀬戸後期様式III
40	陶器	瀬戸筒形香炉	(14.8)	—	[4.3]	口1/8 胎土:赤色粒 淡灰橙色/灰緑色 古瀬戸後期様式IV古
41	陶器	東濃四耳壺	(10.0)	—	[3.0]	口1/6 胎土:赤色粒 淡灰橙色/黄緑色 (灰釉) 6型式併行
42	陶器	瀬戸燭台II類	—	—	—	受け皿部口小片、傾き曖昧 胎土:赤色粒 灰白色/淡灰緑色 (灰釉) 古瀬戸後期様式I・II
43	陶器	常滑壺	—	—	[5.5]	口小片 8型式か
44	陶器	常滑壺	—	—	[5.6]	口小片 8型式か
45	陶器	常滑壺	—	—	[3.8]	口小片 8型式か
46	陶器	常滑壺	—	—	[4.5]	口小片 8型式か
47	陶器	常滑転用研磨具	長さ 5.2	幅 5.6	厚さ 1.6	甕胴部片 割れ口の一辺が磨耗
48	須恵器?	転用研磨具	長さ 4.7	幅 3.3	厚さ 1.5	東海産須恵器or猿投窯産の壺頸部片か 割れ口の一辺が磨耗
49	土器	鏝釜	(19.0)	—	[2.6]	口1/8 白橙色 鏝下部に煤付着
50	瓦質土器	火鉢	(30.8)	—	[5.0]	口1/10 胎土:赤色粒、白色粒 灰黒色/淡黄橙色 I B類
51	瓦質土器	火鉢	—	—	[5.5]	口小片 胎土:白色粒 灰橙色 III類
52	瓦質土器	風炉	—	—	—	胴小片、透かし窓部分か 胎土:赤色粒、白色粒 黒褐色
53	磁器	白磁碗	—	—	2.0	口小片 胎土:堅緻 白色
出土遺物(2)(図7)						
54	土製品	轆羽口	長さ [4.6]	外径 (7.0)	孔径 (3.0)	端部 炉体との結合部が溶解・ガラス化
55	石製品	硯	長さ [15.5]	幅 7.4	高さ [2.0]	胴小片 胎土:細砂質、角閃石 色調:褐色～黒褐色 胴部外面鋸歯状沈線区画内に単筋LR縄文充填 文様帯以外はナナメハケ→ヘラミガキ
56	石製品	砥石	長さ [3.9]	幅 2.6	厚さ 0.6	仕上げ砥 両端欠損 表一面を使用
57	鉄製品	釘	長さ 8.3	幅 0.6	厚さ 0.6	完形
58	鉄製品	釘	長さ [6.3]	0.8	1.0	端部欠損
59	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.8	厚さ 0.1	皇宋通寶(真書) 中国北宋代、1038年初鋳
60	土師器	埴	(12.6)	—	[4.3]	口1/10 胎土:白色針状物質、角閃石 赤褐色(内外面赤彩)
61	土師器	高坏	—	(9.2)	[3.0]	脚1/4 胎土:白色針状物質、角閃石 淡橙色
62	土師器	高坏	—	—	[7.0]	脚部 胎土:白色粒 橙色
63	土器	深鉢?	—	—	—	胴小片 胎土:角閃石 黄橙色
64	土器	かわらけ	(6.6)	(3.8)	2.1	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石 橙色
65	陶器	瀬戸緑釉小皿	—	—	[1.7]	口小片 淡灰黄色/緑色(灰釉) 古瀬戸後期様式III
66	陶器	常滑片口鉢II類	—	—	[3.6]	口小片 7型式頃か
67	陶器	常滑壺	—	—	[9.3]	口小片 7型式
68	陶器	常滑壺	—	—	[7.2]	口小片 8型式
69	舶載陶器	緑釉陶器盤	—	—	[3.8]	口小片 胎土:黒色粒 灰色/緑色(緑釉) 体部内面は無釉
70	鉄製品	釘	長さ 4.6	幅 0.8	厚さ 0.8	完形
71	土器	ロクロかわらけ小	7.1	4.8	2.2	完形 50g 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕
72	土器	ロクロかわらけ大	(11.8)	(7.0)	3.3	1/6 胎土:白色針状物質、角閃石 橙褐色 器面全体に磨耗
73	陶器	瀬戸平碗	(16.2)	—	[4.8]	口1/6 胎土:赤色粒 黄橙色/灰緑色(灰釉) 古瀬戸後期様式IV古
74	陶器	瀬戸緑釉小皿	—	(4.8)	[1.7]	底1/3 胎土:赤色粒 淡灰橙色/灰緑色(灰釉) 古瀬戸後期様式III

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
75	陶器	瀬戸 折縁深皿	—	—	—	口小片、傾き曖昧 胎土:赤色粒 淡灰橙色/淡灰緑色 (灰釉) 古瀬戸後期様式 I・II
76	陶器	常滑 片口鉢 II 類	—	—	[6.9]	口小片 9~10型式
77	磁器	青磁 鎚蓮弁文碗	—	—	[2.4]	口小片 龍泉窯系 II-b類
78	須恵器	坏蓋	—	—	[1.8]	天井部 灰色 東海産か
79	土器	壺	—	—	[5.6]	口小片 胎土:角閃石 橙褐色 端面に単節LR縄文→棒状浮文
80	鉄製品	釘	長さ [5.7]	幅 0.7	厚さ 0.8	端部欠損
81	土器	ロクロかわらけ 小	7.2	3.7	2.7	2/3 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色 外底面に板状圧痕 底中心に穿孔
82	土器	ロクロかわらけ 大	(12.2)	—	[2.4]	口1/8 胎土:白色針状物質、角閃石 黄橙色
83	陶器	瀬戸 卸目付大皿	—	—	[3.2]	口小片 淡黄橙色/淡黄緑色 (灰釉) 古瀬戸後期様式 IV 古
84	石製品	石核	長さ 3.0	幅 2.2	厚さ 1.2	残存率不明
85	陶器	天目碗	—	—	—	体小片、傾き曖昧 胎土:緻密 淡灰褐色/黒褐色 (鉄釉) 中国産カ
86	陶器	瀬戸 碗形鉢	—	—	[6.0]	口小片 胎土:赤色粒 淡灰黄色/淡黄緑色 (灰釉) 古瀬戸後期様式 I・II
87	陶器	瀬戸 平碗	—	—	[3.3]	口小片 胎土:緻密 淡灰黄色/淡灰緑色 (灰釉) 古瀬戸後期様式 III
88	陶器	瀬戸 碗形鉢	—	—	[4.0]	口小片 胎土:緻密 淡灰黄色/淡灰緑色 (灰釉) 古瀬戸中期様式 III・IV
89	陶器	瀬戸 卸皿	—	(7.0)	[1.1]	底1/4 淡灰黄色/淡灰黄色 (灰釉) 古瀬戸中期様式
90	陶器	瀬戸 折縁深皿	—	—	—	体小片、傾き曖昧 胎土:緻密 淡灰橙色/灰緑色 (灰釉) 古瀬戸後期様式 I・II
91	鉄製品	小札	長さ [5.1]	幅 2.7	厚さ 0.2	下端欠損、4/5ほど残存か
92	土器	ロクロかわらけ 小	(8.2)	(6.0)	2.0	1/3 胎土:白色針状物質、角閃石、赤色粒 黄橙色

- ・ロクロかわらけの底面調整は、[内底面ナデ・外底面板状圧痕]を基本とする。
- ・古瀬戸製品の器種判別と様式認定は、藤澤良祐氏による。

第五章 調査成果のまとめ

本地点では、2枚の中世遺構面が検出された。1面では山裾に沿って水切り溝が検出され、2面では岩盤削平面上に土坑や浅い窪みが検出された。両遺構面とも非常に散漫な遺構分布で建物痕跡はなく、ここを居住域とした形跡は窺えなかった。遺物では、2面土坑3の埋土から出土したロクロかわらけの小皿が本地点では最も古い様相を示しており、13世紀後葉～14世紀前葉頃の所産と見ている。2面上～1面の造成土からは古瀬戸後期様式のⅢ期まで下る灰釉平碗が出土しており、室町時代以降に新たな盛り土造成が進んだことが考えられる。1面溝1や1面上に堆積する遺物包含層からは古瀬戸後期様式のⅣ期まで下る碗・皿が出土しており、15世紀中葉～後半の年代観を示している。常滑甕は口縁部形態から8型式が主体と見え、古瀬戸製品よりは古い遺物様相である。この段階のかわらけはロクロ成形品のみで大・小とも器壁が厚く断面逆台形を呈する。他に瓦質土器の土風炉など、全体として1400年を前後する時期の様相である。よって本地点では、鎌倉時代末期～南北朝・室町期にわたって平場造成に伴う土地利用が開始・進展した状況が見て取れた。これは、台山遺跡における他の調査地とも概ね同様の傾向といえる。古瀬戸製品には燭台や香炉が含まれるものの、主体となるのは縁釉小皿や平碗、折縁深皿などの雑器類であった。遺構・遺物ともに少なく人口が増加したような形跡は窺えなかった反面、岩盤を削平しての平場造成は大規模な地形改変といえ、造成の労に見合った土地利用となっていない。消去法的な考察にはなるが、塔頭など小堂宇の建築のために造成が進められたものと理解したい。

付編 台山遺跡の花粉分析とプラント・オパール分析

森 将志 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

鎌倉市山ノ内 860 番 2 に所在する台山遺跡において、花粉分析用とプラント・オパール分析用の試料が採取された。以下では、採取された試料について行った花粉分析とプラント・オパール分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。

2. 試料と方法

分析試料は、I 区東壁セクションから採取された 3 点 (①、⑧、⑬) である (表 1)。いずれも地業層の構成土と考えられている。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

2-1. 花粉分析

試料(湿重量約 3g)を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え 1 時間放置する。水洗後、比重分離 (比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離) を行い、浮遊物を回収し水洗

表 1 分析試料一覧表

試料No.	採取地点	性質	土相
①	I 区東壁セクション	地業層構成土	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト
⑧			暗褐色 (10YR3/4) シルト
⑬			にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト

する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理 (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎) を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは全面を検鏡し、その間に現れる花粉・胞子を全て数えた。

2-2. プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する (絶対乾燥重量測定)。別に試料約 1g (秤量) をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ (直径約 0.04mm) を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ~ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが 300 個に達するまで行った。また、保存状態の良好な植物珪酸体を選んで写真を撮り、図版 1 に載せた。

3. 結果

3-1. 花粉分析

今回の分析試料にはほとんど花粉化石が含まれておらず、3 試料を検鏡した結果、イネ科とツリフネソウ属、ヨモギ属、単条溝胞子が検出されたのみである (表 2)。なお、花粉化石の産出量が極めて少ないため、花粉分布図は示していない。

表 2 産出花粉胞子一覧表

学名	和名	①	⑧	⑬
草本				
Gramineae	イネ科	-	1	-
Impatiens	ツリフネソウ属	1	-	-
Artemisia	ヨモギ属	1	-	-
シダ植物				
trilete type spore	三条溝胞子	8	3	5
樹木花粉				
Arboreal pollen	樹木花粉	-	-	-
草本花粉				
Nonarboreal pollen	草本花粉	2	1	-
Spores	シダ植物胞子	8	3	5
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	10	4	5

3-2. プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求めた。一覧表を表 3 に、分布図を図 1 に示した。以下に示す各分類群の

プラント・オパール個数は、試料 1g 当りの検出個数である。

3 試料の検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の 7 種類の機動細胞珪酸体が確認できた。3 試料の組成に顕著な相違はなく、ともにイネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の産出が目立つ。それぞれの産出量はイネ機動細胞珪酸体が 24,200 ~ 39,800 個、ネザサ節型機動細胞珪酸体が 95,700 ~ 61,000 個、ササ属型機動細胞珪酸体が 1,200 ~ 5,000 個、他のタケ亜科機動細胞珪酸体が 19,900 ~ 32,400 個、キビ族機動細胞珪酸体が 60,000 ~ 87,300 個、ウシクサ族機動細胞珪酸体が 58,700 ~ 77,300 個である。それ以外では、イネの籾殻に形成される植物珪酸体（イネ穎破片）やポイント型珪酸体などの産出が見られた。

表 3 試料 1g 当りのプラント・オパール個数

	イネ (個/g)	イネ穎破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	ポイント型珪酸体 (個/g)
①	33,700	3,700	79,800	1,200	32,400	2,500	87,300	77,300	3,700
⑧	39,800	3,700	61,000	5,000	19,900	5,000	66,000	75,900	1,200
⑬	24,200	3,800	95,700	2,600	30,600	1,300	60,000	58,700	5,100

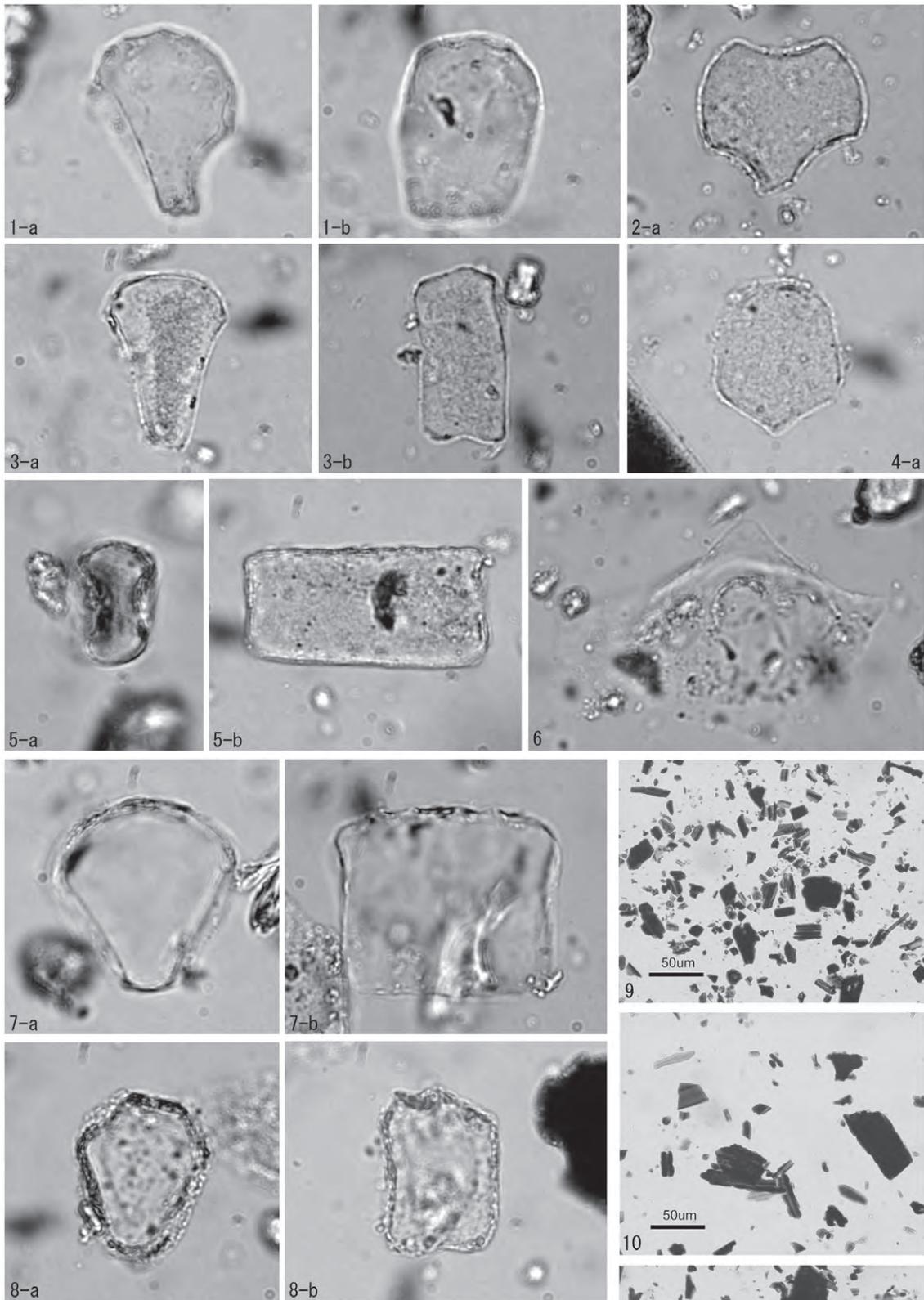


図 1 植物珪酸体分布図

4. 考察

今回の分析試料には花粉化石がほとんど含まれていなかった。一般的に花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され消失してしまう。そのため、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉化石が残りにくい。遺跡は台地上に位置しており、試料は地業層の構成土から採取されているため、酸化的環境に晒される機会が多かったと推測され、それが花粉化石が残っていない理由と思われる。よって、花粉分析から古植生について言及するのは難しい。

一方で、乾燥状態に晒されても分解されない植物珪酸体は、分析試料から多く産出した。3 試料の珪酸体組成に顕著な相違はなく、いずれの試料においてもイネ機動細胞珪酸体やネザサ節型機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の産出が目立つ。イネ機動細胞珪酸体の産出から、試料採取地点周辺におけるイネの葉身の存在が推測される。また、イネ機動細胞珪酸体とともにイネ穎破片の産出も見られ、イネの籾殻も存在していたと思われる。ネザサ節型機動細胞珪酸体については、遺跡周辺の林縁部などに生育していたネザサ節のササ類からもたらされたと思われる。また、キビ族機動細胞珪酸体については台地上に生育する野生種からもたらされたと思われる。ウシクサ族機動細胞珪酸体についても同じく台地上に生育していたススキやチガヤなど、乾燥的環境に生育するウシクサ族からもたらされたものであろう。



図版1 台山遺跡(試料No. ①)から産出した植物珪酸体
および花粉分析プレパラート写真

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1. イネ機動細胞珪酸体 | 2. シバ属機動細胞珪酸体 |
| 3. ウシクサ族機動細胞珪酸体 | 4. ササ属型機動細胞珪酸体 |
| 5. キビ族機動細胞珪酸体 | 6. イネ穎破片 |
| 7. ネザサ節型機動細胞珪酸体 | 8. 他のタケ亜科機動細胞珪酸体 |

a. 断面 b. 側面

9. 試料No. ① 10. 試料No. ⑧ 11. 試料No. ⑬

0.02mm



1. 調査地遠景 (東から)



5. I区1面溝1 (北から)



2. I区表土掘削状況 (北西から)



6. I区1面溝1 (北東から)



3. I区1面作業風景 (南東から)



7. I区1面溝1土層断面 (北から)



4. I区1面全景 (東から)



8. I区2面全景 (東から)

図版2



1. II区 表土掘削状況 (西から)



5. II区南壁 土層断面 (北から)



2. II区 1面 全景 (東から)



6. II区 2面 全景 (東から)



3. II区 1面 溝1 (南西から)



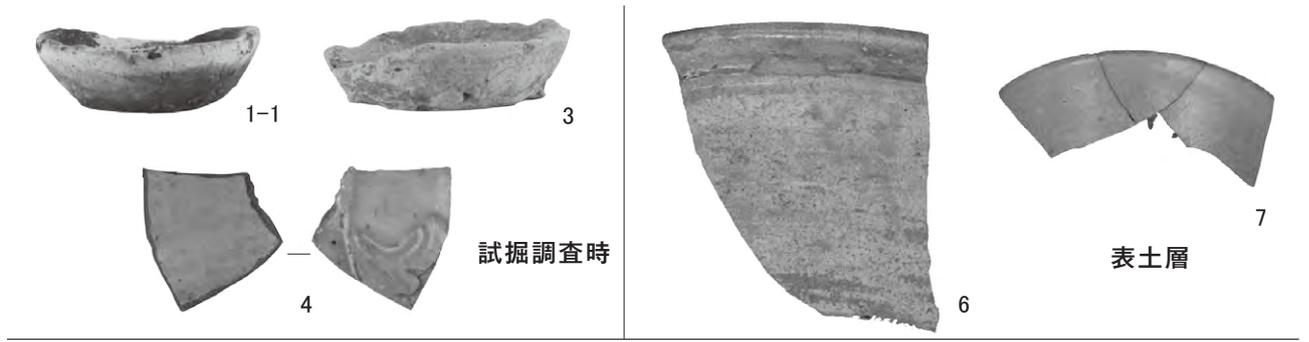
7. II区 2面 土坑3 (南から)



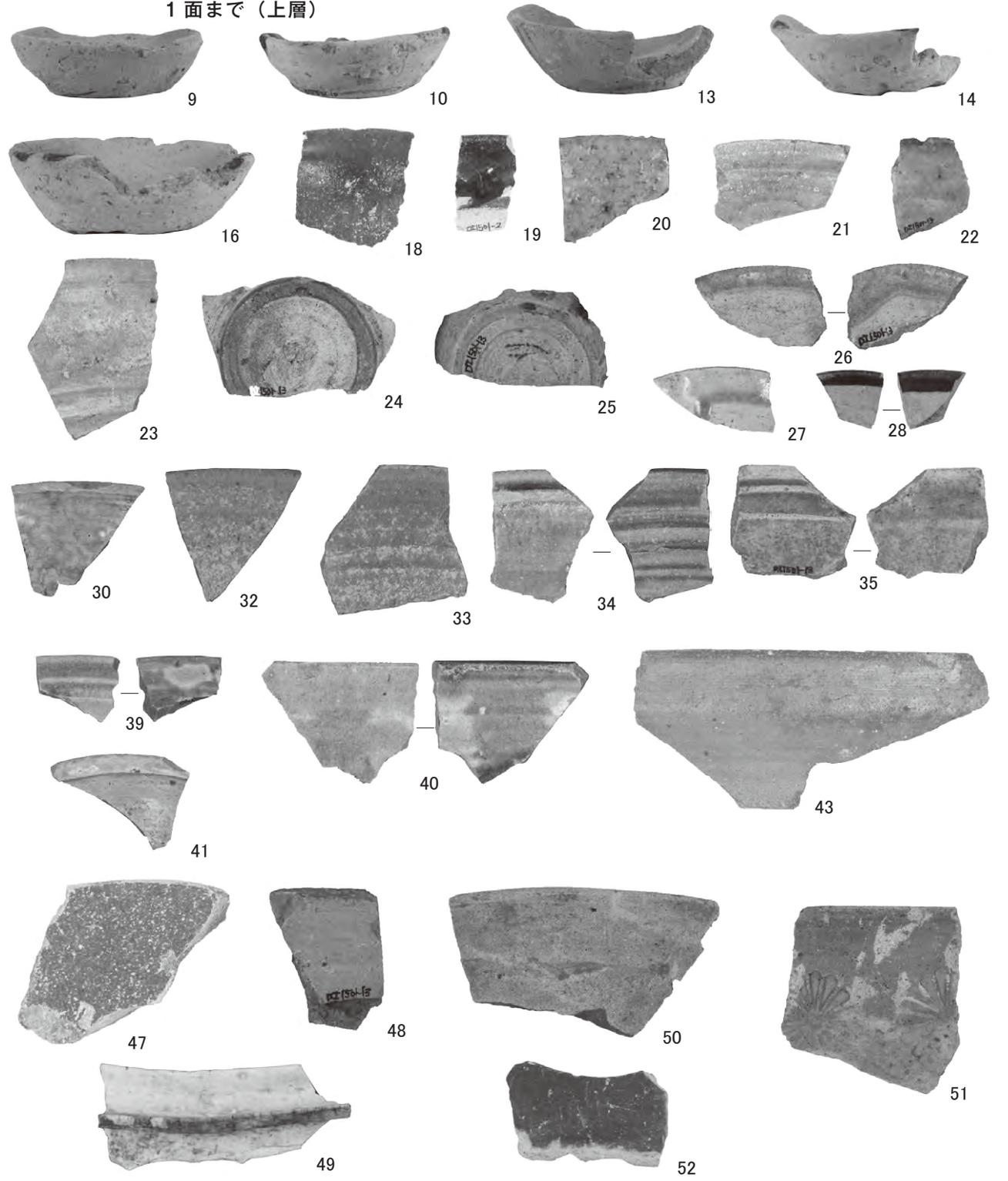
4. II区 1面 溝1 かわらけ出土状況 (南東から)



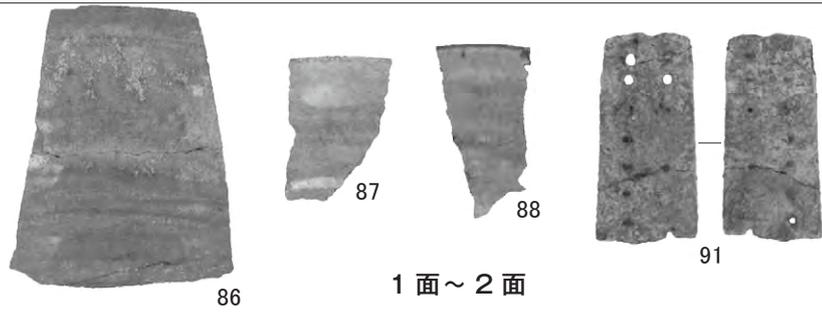
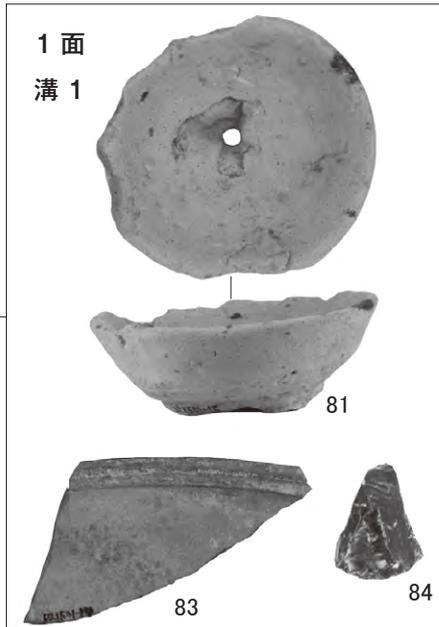
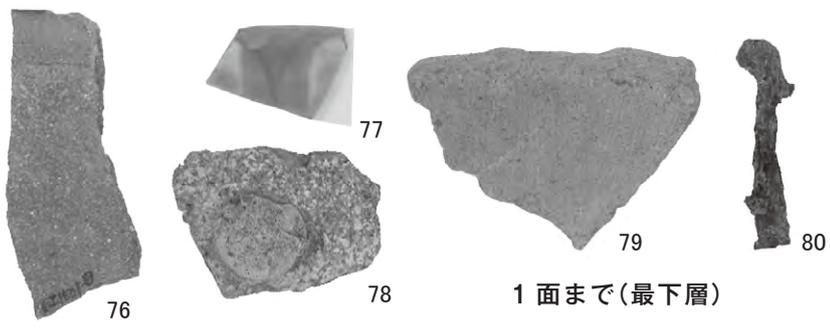
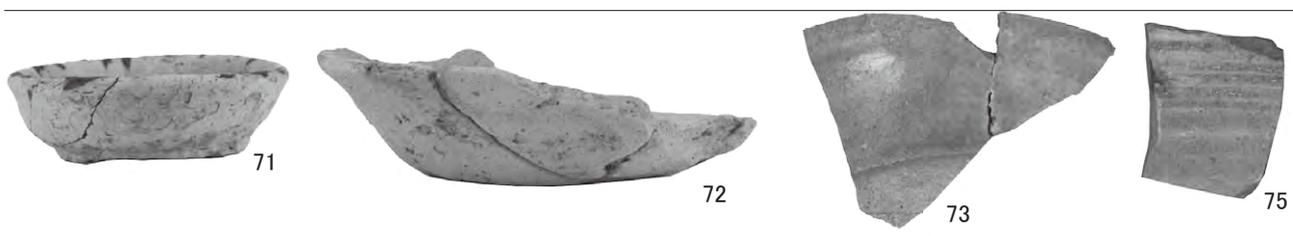
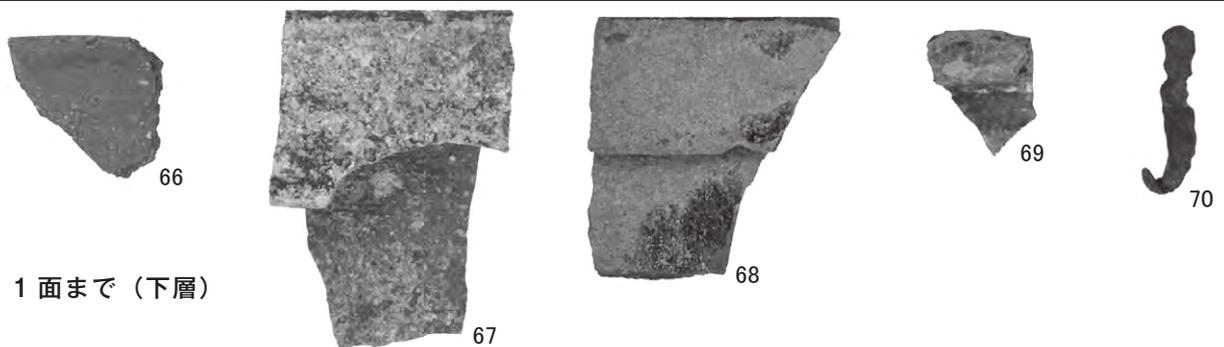
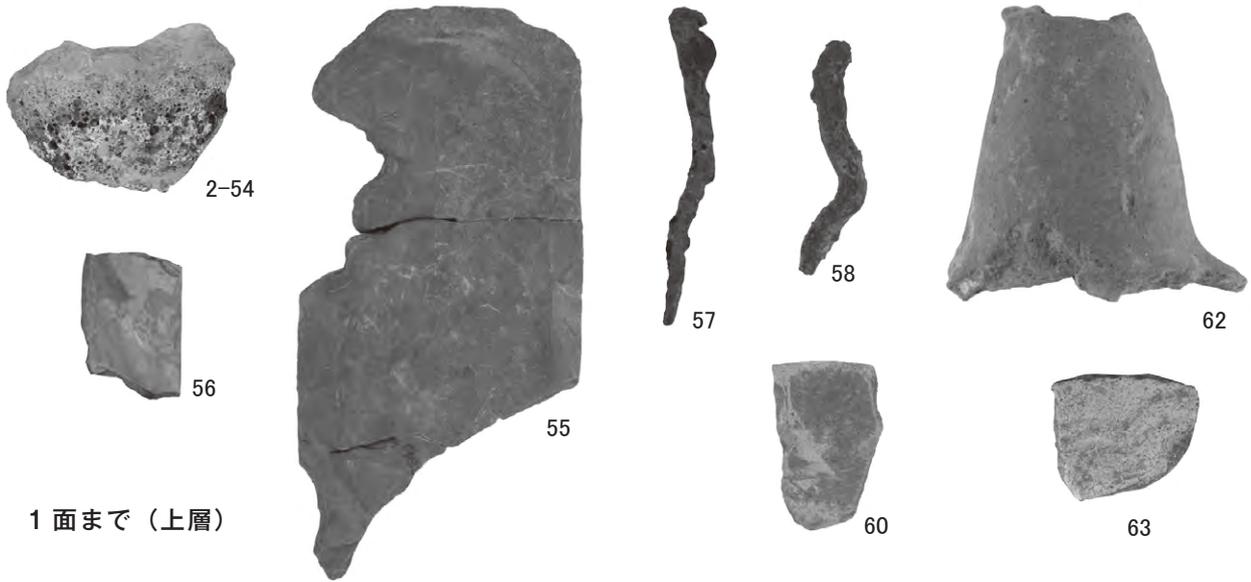
8. II区 測量作業状況 (南西から)



1面まで(上層)



図版4



報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成28年度調査報告							
巻次	33 (第2分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	押木弘己/押木弘己/押木弘己/松吉里永子/押木弘己							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2017年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
こめまちいせき 米町遺跡	神奈川県鎌倉市 大町二丁目 2340番1	14204	245	35° 18' 48"	139° 33' 21"	20110425 ～ 20110708	72.00	個人専用 住宅 (柱状改良工事)
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 大町六丁目 1506番11の一部	14204	231	35° 18' 52"	139° 33' 50"	20130415 ～ 20130531	55.00	個人専用 住宅 (柱状改良工事)
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 403番14	14204	282	35° 19' 19"	139° 33' 21"	20131010 ～ 20131227	41.80	個人専用 住宅 (鋼管杭工事)
はせこうじしゅうへんいせき 長谷小路周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜三丁目 194番71	14204	194	35° 18' 48"	139° 32' 27"	20131101 ～ 20140307	140.00	個人専用 住宅 (柱状改良工事)
だいやまいせき 台山遺跡	神奈川県鎌倉市 山ノ内 860番2の一部	14204	29	35° 20' 17"	139° 32' 30"	20150428 ～ 20150623	69.60	個人専用 住宅 (鋼管杭工事)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
こめまちいせき 米町遺跡	都市	古代 中世 近世	道路、井戸、溝、 炬穴、土坑、ピット	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、木製品、 金属製品、石製品、土 師器	中世は13世紀前半～ 14世紀前半で、東西 道路と側溝、大型井 戸などを確認。
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	屋敷跡	弥生時代 古墳時代 中世	溝状遺構、ピット	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、土師器	中世遺構は13世紀後 半～14世紀前半。弥 生末～古墳前期の遺 物は充実。
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	屋敷跡	中世	溝、井戸、ピット 列、土坑、カマド 状遺構	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、瓦、金属 製品、石製品	13世紀前半～14世紀 前半の遺構を検出。 溝+柱穴列での土地 区画・変遷を確認。
はせこうじしゅうへんいせき 長谷小路周辺遺跡	都市	古代 中世	竪穴住居 土坑、ピット	土師器、須恵器、金属 製品、石製品 かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、金属製 品、石製品	9世紀後葉頃と考え られる生活面を検 出。13世紀後半から 14世紀前半の生活面 を検出。

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 33

平成 28 年度発掘調査報告

(第 2 分冊)

発行日 平成 29 年 3 月 31 日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 株式会社ポートサイド印刷

